
鬼の宿命

樹文緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の宿命

【Nコード】

N6865S

【作者名】

樹文緒

【あらすじ】

罪を持つ人は等しく 鬼 に喰われ、 鬼 は人に成り代わってこの世に顕現する。

そんな 鬼 たちに対し、代々受け継がれてきた信念をもって相対している三つの家系が存在した。

鬼おに被ひい の梅原家。
鬼おに護まもり の聖森家。
鬼おに殺ころし の闇倉家。の三家である。

そんな中で主人公である梅原晃蔵は日々の中で 鬼 と接し、聖
森や闇倉の両家と関わっていく内に、今の在り方は何か違うのでは、
と思い始める。

やがて晃蔵は、そのどれにも属さない、自分だけの理想を追い求
め、苦悩し、成長していく。

果たして、晃蔵が導き出した答えとは

……

そして 人間 と 鬼 との関係はどうなるのか

!?

序章 【 ？望？ 】（前書き）

丁度2年くらい前に書いた作品です。

少しでも楽しんで頂ければと思います。

それほど残酷な描写は無いと思いますが、一応タグを付けました。

人は止まることなく流れ続ける時の中で、あらゆる事象に対して自らの感覚や認識を慣れさせてゆく。

此の世に生を受けた瞬間でさえ、？生きる事？に慣れようとして
いるのだ。

やがて成長するにつれ、日常生活や学業、仕事や趣味、スポーツ
や芸術などへと発展し自我を形成する。

だが、？慣れ？はなにもそれだけに限ったことではない。

人は毎日のように耳にする事件に於いても、その認識を徐々に慣
れさせてしまう。

否。この場合は？麻痺？という方が適切だろう。

最初こそ驚きはすれども、繰り返される内に刺激が薄れ、興味を
抱かなくなる。

時間が経てばなおさらだ。

此の世で起こる事件の大半は、時という荒波によっていとも容易
く流され、人々の記憶から消されてしまう。……あの時のように。

二年前。

ほぼ同時期に三つのニュースが報じられた。

同級生に重傷を負わせた少年。

自殺未遂の少女。

両親を殺害した少女。

いずれも年齢は十四歳前後だったため、氏名等は公開されること
はなかった。

報道直後こそ騒がれはしたが、時間が経つにつれて世間は興味を
失っていった。

しかし、人がどれだけ事件を忘れようが、今、この瞬間も世界中
では事件が起こっているというのに……。

果たして……事件が起こり、繰り返される原因は何なのだろうか

……？

それから一年の月日が流れた。

日本某所。都心から電車で小一時間ほど離れた小さな町

禱雅とうが

町。

その町に比較的大きな家があり、表札には『梅原うめはら』と書かれてい
る。

家の中はひっそりと静まり返っていて、どこか寂しさが漂う。

「晃こうげん。お前がこの家に来てからもうすぐで一年になるが、も
う生活には慣れたか？」

そう話の口火を切ったのは、どこか日本人離れした彫りの深い容貌
と鋭い眼差しが特徴的な老爺だ。威風堂々とした姿からは、一切の
年齢を感じさせない気迫に満ちている。

食卓の傍にあるテレビからは、お昼のニュースが報じられてい
る。それまで何気なしにテレビを観ていた晃晃は老爺の言葉に姿勢
を正し、正面に向き直った。

「はい、げんせい。晃清おじいちゃん。まだ少し不安な面もありますが、だい
ぶ慣れました」

答えて晃晃は、弱く微笑む。すると老爺　晃清はどこか哀しそ
うな面持ちで「……そうか」と呟き、居住まいを正した晃清は、お
もむろに口を開いた。

「　晃晃。今日からお前には私の？仕事？に同行してもらおう」

「……え？　晃清おじいちゃんの仕事……？」

晃清の言葉に晃晃は驚きを露わにした。なぜなら、晃清が自身の
仕事について話してくれた事など、これまで一度もなかったからで
ある。

なのになぜ今、晃清はこんな話を切り出したのか……。晃晃は複
雑な思いを抱いたまま、晃清の言葉を待つ。

「晃晃。なぜ、こつも毎日事件が絶えないのか……疑問に思ったこ
とはないか？」

「はい。あります」

率直な答えが返り軽く頷いた蔵清は、視線をテレビに向け、ゆっくりと言葉を継ぐ。

「人とは罪を犯す生き物だ。罪のない人間など此の世に一人でも居ればいい方だろう。一度罪を犯した人間が再び罪を犯し、新たな罪を引き起こしてゆく。そうして負の連鎖が広がる所為で、此の世から事件が絶えることはないのだ」

蔵清はまるで何かに耐えるように歯を軋ませる。

「どうして人は……あやまちを繰り返すか判るか？」

二度目の問い掛けに胸が早鐘を撞く。それでもなんとか答えを返そうと思いを巡らす。

「……人の心が……弱いからですか？」

元々深く考える事が苦手な晃蔵には、それが精一杯の答えだった。切って返される事を覚悟して、蔵清の様子を窺う。

数拍の間を置き返ってきたのは意外にも肯定の言葉だった。

「それも一因だろうな。しかし、もっと深い原因があるのだ。それ

こそが 鬼」

「…… 鬼？」

鸚鵡返しに呟く。晃蔵の表情を一瞥した蔵清は「そうだ」と、短く相槌を打った。テレビではニュースキャスターが、先日発生した事件を報道している。

《先日お伝えしました連続殺傷事件に進展です。昨日の夕方頃、犯人と思しき男を駅構内で目撃したとの情報が寄せられました。これが主犯格と思われる男の映像です。男は電車を使い、依然として逃走を続けている模様。男が乗車した電車は禰雅町行きの間快速だったことから、停車する町には蔵清な注意が喚起されています。犯人は複数いるという情報もあり、警視庁は特殊機動隊を動員し、警戒にあたっています。出来る限り外出は控え、なるべく一人で歩かないようにしてください。それでは次のニュースを……》

「……丁度いい」

そう呟き電源を切ると、蔵清は席を立った。

「説明するより実際に見た方が早かるう。これから私の？仕事？を見てもらう。私は少し支度をして来る故、お前も必要あらば済ませよ　すぐに出るぞ」

「……は、はい……！」

その時晃蔵は言い知れぬ不安と、蔵清の？仕事？に対する期待を同時に抱いていた。

支度を整え戻ってきた蔵清の手には、何やら長袋が携えられていた。

晃蔵はこれまでに度々、その長袋を目にしてはいたが、中身は知らない。蔵清の？仕事？に同行することになった今日でさえ、晃蔵は長袋に触れる間もなく、家を後にしたのだった。

家を出るや否や、蔵清は走り出した。

一分の迷いなく疾走する蔵清に晃蔵は必死で付いてゆく。

町中は例の事件が報道され、警戒区域に指定されている所為か、いつもより人通りは少なく、どことなく殺伐とした空気が漂っている。しばらく走り続け、二人はとある廃ビルに辿り着いた。辺りに人家はなく、寂れた光景が広がっているような場所だ。

ようやく止まる事が出来た晃蔵は全身汗だくな上、肩で息をしている。蔵清へと視線を向けた瞬間、晃蔵は愕然とした。

蔵清は晃蔵より速く走ったというのに、一滴の汗もかかず、息すら乱れていない。ましてや蔵清は晃蔵より四倍近く年上だということ……である。

初めて目にする蔵清の身体能力に、晃蔵は寒気を覚えた。

「……蔵清おじ　」

声を掛けようとした途端に制され、思わず口を噤む。蔵清は身振り手振りで、静かにする事と屈む事を晃蔵に伝え、物陰へと誘導し

た。廃ビルの側面に位置する物陰に身を隠し、敵清は小声で囁く。

「晃敵。この建物の中に 鬼憑おにじつき が居る」

「…… 鬼憑おにじつき ？」

またしても聞きなれない言葉を疑問に思いながらも、言われた通り廃ビルへと視線を向ける。廃ビルの出入り口は既に大勢の警官が包囲しており、さらに特殊機動隊の姿も確認出来た。

「……すごい敵戒態勢……！」

「ああ。凶悪な連続殺傷事件で、しかも複数犯らしいから……当然警戒も厳しくなる」

冷静に返す敵清だが、その表情にはわずかな動揺が浮んでいる。

「でも、これだけ沢山いればすぐに片付きそうですね」

晃敵の言葉に敵清はかぶりを振り、静かに口を開いた。

「……無理だ。 鬼憑おにじつき はこれしきでは倒せぬ……！」

「……え？ まさか……そんな事って……」

敵清の動揺が晃敵に伝染したのか、途端に不安を露わにする。そうしている内にも機動隊は突入の準備を整え、そして 一斉に廃ビルへの突入を開始した。

夕暮れが近づく空の下で、乾いた銃声と無数の叫び声が辺りに響き渡る。

敵清の言葉を信じないワケではないが、晃敵はすぐに犯人グループは取り押さえられるモノだと思っていた。

だが、晃敵のその予想はもの見事に裏切られる事となる。

異変はすぐに起こった。

廃ビルの正面に陣取って指揮を執っていた警官たちが、突然現れた影の攻撃を受けて倒れたのである。

つまり、廃ビルへ突入した機動隊は全滅したんだということに、晃敵はすぐに気付いた。

「……やはりか」

隣で敵清が苦々しく呟く。そして身を起こして、毅然とした口調で告げた。

「行くぞ、晃蔵。決して私の傍を離れるでないぞ。よいな」
晃蔵は驚くべき光景を目の当たりにした事で、底知れぬ恐怖を感じていた。

しかし、これ程の事態にも果敢に立ち向かおうとする姿に安心感を覚えると同時に、蔵清の？仕事？を見てみたいという衝動に駆られていた。

「……はい！」

力強く返事をして、晃蔵は蔵清の後に続いて廃ビルへと入って行く。晃蔵は恐る恐る歩を進め、ほどなくして二階に着く。そこには成す術無く倒された機動隊員があった。

どうやら装備のお陰で気絶しているだけのようだった。安心するのも束の間、蔵清に促され、さらに階段を上る。

各階には、まるで道標のように、機動隊員が倒れていた。それらなるべく見ないように、晃蔵は蔵清の後に続いて歩く。

やがて最上階に辿り着いた その瞬間！

「ッ!? 晃蔵、跳べ！」

不意に蔵清の口から差し迫った大声が放たれた。

ワケがわからないままに晃蔵が真横に跳んだ直後、コンクリートの床に何やら太い針のようなモノが突き刺さり、晃蔵は息を呑んで身を震わせた。

「……。そこに隠れている。決して出るでないぞ」

そう忠告すると、蔵清はただっ広いフロアの中央まで歩を進める。

「我ノ攻撃ヲ避ケタカ。……貴様、何者ダ？」

フロアの奥から奇妙な声上がり、物陰からひとりの男が姿を現した。それは紛れもなく、さきほどニュースで映像にも出ていた、犯行グループの主犯格の男だった。

晃蔵は物陰からじつと様子を窺う。

「私はお主たちから人を救う者だ……とでも言っておこうか」

「人ヲ救ウ……ダト？ 貴様、マサカツ……!？」

途端に表情を歪める男。蔵清はなおも毅然とした態度で佇み、左

手に携えた長袋の紐を解く。

「ほう。お主、勘が良いな。おそらく察しの通りだ。観念するんだな」

「黙レ！ 例工貴様が？アレ？ダトシテモ、タツタ独リデ何が出来ルツ！？」

怒りを露わにさせ、こめかみに青筋が浮き上がる。蔵清はそんな男の反応を鼻で笑うと、長袋から一振りの刀を取り出した。

「あれには刀が入っていたんだ……」

晃蔵が背後で得心がいったように呟く。

「ソノ刀……ヤハリナ。ドウヤラ我ダケデハ、荷ガ重イ様ダ。先ノ連中ト同ジ様ニハイカヌナ……」

晃蔵は男の言葉から、機動隊員は眼前の男一人で倒したのだと判断した。そんな男が警戒を露わにする相手 蔵清とはいかなる人物なのか。晃蔵の心が自然と高鳴ってゆく。

「だったらどうするのだ。大人しく斬られるか？」

「フツ。……笑エ又冗談ダ。 集マレ、同胞タチヨ！」

男の掛け声で瞬時に四人の男たちが姿を現した。

「なツ！？ 一人で機動隊を全滅させるような奴が五人も！？ ダメだ、無謀すぎる！ 蔵清おじいちゃん……！」

圧倒的な戦力を目の当たりにした晃蔵は、祈るような思いで眼前の光景を見守る。

「どうした？ 掛かって来ぬならこちらからゆくぞ？」

蔵清に挑発され癩に障ったのか、次の瞬間には五人が一斉に地を蹴って疾走。長期戦になると思われた戦いは驚くべき展開をみせる。

一番早く蔵清に肉薄した男が繰り出す矢継ぎ早の猛攻を物ともせず、落ち着き払った動作で刀を抜き放つ。すると次第に刀身が紅く染まってゆく。

その時、晃蔵は男達の胸の辺りに、何やら黒い影のようなモノが見て取れた。だが、その影が何かは判らなかつた。

蔵清は流れるような動きで紅に染まった刀身を男の胸に突き刺

すと、素早く引き抜いて男の背後の空間を一刀のもとに両断した。その瞬間、鈴の音のような爽涼とした音がフロアに響き、すぐに溶けて消えた。

男は意識を失ったのか、力なくくずおれて砂埃が舞い上がる。

「ッ！」

晃蔵はさきほど目にした黒い影が、倒れた男の身体から消えていることに気が付いた。ここに来る前に蔵清が口にしていた鬼と何か関係があるのだろうか、晃蔵は思考を巡らせる。

「怯ムナ！ 続ケエエツ！」

主犯格の怒号に二人目の男が蔵清に飛び掛るが、一人目と同じ要領で倒された。ならばと、今度は二人同時に攻め立てる。人間離れた攻撃が絶え間なく繰り出され、蔵清はそのことごとくを見切つて躲わす。

晃蔵からしてみればどちらも常軌を逸しているとは思えない事だろう。蔵清は二人の動きに神経を集中させてゆく。そして、二人が直線上に並んだ一瞬の隙を突いて、右手に握っている刀でまとめて貫いた。前の二人と同じく刀を引き抜くと同時にそれぞれの背後の空間を断ち切る。

戦闘開始わずか数分で、残るは主犯格のみとなった。

「これが……蔵清おじいちゃんの……実力……？」

「これで後はお主だけだ」

「……クツ。我等二八同胞ヲ増ヤス使命ガ有ルノダ。コンナ所デ終ワル訳ニハイカヌツ！」

「そんな事、この私がさせぬよ」

「五月蠅イッツ！ 死ネエエエエ ツツ！」

怒りに満ちた叫びを上げて、主犯格は先ほど投げつけて来た太い針 指の爪を、驚くべき速度で伸ばし、蔵清に向かって疾走する。

「ほう。そんな事も出来るのか。 どれ」

小莫迦にしたような言葉を呟き、蔵清は傍に転がっていた鉄筋を拾い、主犯格へと投げつけた。

「小賢シイ！」

忌々しげに吐き捨てて右手の爪で薙ぎ払うと、鉄筋はまるで豆腐で出来ているかのようになり、いとも容易く切断された。恐るべき鋭さである。

「切れ味が自慢のようだが、当たらなければ意味はない。すぐに終わらせてやるわ」

「出来ルモノナラナアアアツ！」

一段と疾い動きで敵清の背後を取った主犯格　だが。

「安心しろ。　もう終わっている」

「……………ナ……………ニイ……………ツ!？」

主犯格の爪は敵清のすぐ横で止まり、男の胸には紅い刀身が深々と突き刺さっている。

「……………莫迦……………ナ……………」

未だ信じられないといった表情で自分の胸を見詰める主犯格。

「お主たちが取り憑いた人たちは、返してもらおうぞ」

「……………今回八引キ下ガツテヤル。ダガ、此ノ世ニ 闇 ガアル限り我等八途絶　」

主犯格の言葉が言い終わるより早く、敵清は刀身を引き抜き、背後の空間を断ち切った。

リ　　イン。

それは既に五度目。爽涼とした心地よい音色がフロアに反響し、戦いは終わりを告げた。

「　『鬼抜い（おにばらい）』完了……………!」

淀みない口調でそう呟き、敵清は刀を鞘に納めた。

晃敵は後に、先刻響いた鈴の音は、『鬼抜い』が完了した合図だと、敵清から聞く事となる。

敵清は毅然とした態度を崩さぬまま、フロアを後にする。晃敵は驚きに目を睨り、床に倒れている五人へと視線を向けた。

（黒い影が……………全部消えている……………）

戦いが始まった時には確かに見えた？黒い影？が、彼等の体から

跡形もなく消え去っていたのである。

その事を確かめてから晃蔵は蔵清の後を追ってフロアを後にしたのだった。

帰り道。二人ともしばらく無言で歩き続けた。そして家が近付き始めた頃、蔵清がおもむろに口を開いた。

「見たか、晃蔵。あれが私の？仕事？」 『鬼祓い』だ」

「……『鬼祓い』……」

晃蔵は蔵清が言った言葉を確かめるように繰り返す。

「先刻私は、『どうして人は……あやまちを繰り返すか判るか』とお前に問うたな？」

瞬時に食堂での記憶を手繰り寄せ、静かに頷く。

「……あれはすべて 鬼 が関係しているのだ」

「…… 鬼 ？ ……それは？黒い影？と何か関係があるのですか？」

「ッ！？」

蔵清は普段から滅多に動揺を露わにしない。だが、この時ばかりは細い目を見開いて驚きを露わにした。

「……晃蔵……お前には 闇 が見えるのか？」

蔵清の神妙な面持ちに晃蔵は？黒い影？は 闇 と呼び、 闇

は普通見えないという事を悟った。しかし、不思議と恐怖は感じなかった。それは今し方、 闇 を持っていた彼等から 闇 が消えた光景を目の当たりにしたからだろうか……。

「……はい。ぼんやりとですが……見えます」

「……。そうか」

決して多くは語らず、心の内に渦巻く思いの大半を胸に留める。

再び沈黙が続き、今度は晃蔵が話の口火を切った。

「……さっきの人たちはどうなるのですか？」

「彼等に憑いていた 鬼 は切り離し、 闇 も小さくなった。心から罪を悔い改めたならば、二度とあやまちを繰り返すことはない

だろう」

言葉の端々に寂しさが滲む。自らの行いに対して責任を感じているような眼差しに、晃蔵は胸が締め付けられるような息苦しさを覚えた。

「…… 鬼 に憑かれたままだと、どうなるのですか？」

「 鬼憑き を放っておくと、その人間は完全な 鬼 となる。そうなってしまうっては二度と人には戻れず、永遠を彷徨う罪の導き手となるだけだ……」

「じゃあ、 鬼 になっちゃったら、どうすれば……？」

晃蔵の祈るような思いも空しく、蔵清はハッキリと言い放つ。

「 殺すしかないのだ。その為に『鬼殺し』という家系も存在しておる」

「そんな……。……では、さっきみたいに 鬼 になる前に助ける事が出来れば！」

「そう。それが私の？仕事？なのだ。いち早く 鬼憑き の気配を察知し、再びあやまちに手を染める前に救い出す……。それが最善の策だ。我等『梅原』の同志は世界に散り、各地を監視・対処しておるが、如何せん人手が少なすぎるのだ……」

どこか落胆にも似た蔵清の姿に、晃蔵はありのままの思いを打ち明けた。

「蔵清おじいちゃん。俺、『鬼被い』になりたいです。今はまだ何も出来ないけど……。一生懸命修行して、力をつけます。だから、お願いしますッ！」

「晃蔵……。お前……」

晃蔵の思いを受け、蔵清は足を止める。深く頭を下げる晃蔵へ視線を向けて、複雑な表情で呟く。

「恐らく、過酷な道となるだろう……。それでもいいのか？」

「はい。俺、さっきの人たちを見て思ったんです。人は誰もあやまちを繰り返したくないと願っているんだと……。！ だから俺は一人でも多くの人を 鬼 から救いたいんです！」

驚くほど純粹で偽りなき晃蔵の思いに、蔵清は感嘆の溜息を漏らす。それは、晃蔵の思いが蔵清の信念と同じだったからに違いない。様々な思いを巡らせ、蔵清は静かに口を開いた。

「では、これから一年、お前は私の？仕事？に同行する中で修行を積むがよい。そして高校生になった日、お前の気持ちに変わりなければ、お前にも『鬼抜い』の力を授けよう。しっかりと修行に励めよ……晃蔵」

「はい！」

こうして晃蔵は、蔵清と同じ『鬼抜い』の道歩むことを決意した。だが、それが晃蔵にとって、あまりに過酷で悲しみに満ちた道となることなど……この時はまだ知る由もない。そして、再び時は流れゆく。

ごみごみした都心から電車を乗り継いで一時間ほどの場所に袴雅町という町がある。都心から離れているせいか人口も少なく、町自体にそれほど活気はない。一見清らかで明るそうな町名とは裏腹な雰囲気という言葉がピッタリと当て嵌まる。

そんな町を一人の少年が険しい表情で走っていた。

曇り空のような灰色の頭髮に端正な顔立ち、背丈は一八〇センチ前後で常時ケンカを売ってそうな鋭い目をしている。少年の名は梅原晃蔵という。目つきさえ直れば頼り甲斐のある好青年といった風貌だ。

交差点の手前を左折した時、それまでの湿っぽさが一瞬にして吹き飛んだ。視線の先にはこの町で唯一の小学校が見え、校門の前にはお洒落に着飾った大人たちと子供たちの姿が見て取れた。

晃蔵は迂回しようかと考えたが、和やかな雰囲気につられるように前進を続け、やがて校門の前まで辿り着く。

淡い色の花びらが舞い散り、ゆつくりと校庭を染め上げている。その上を真新しい制服に身を包み、期待に胸を膨らました子供が元氣よく駆け抜けた。巻き起こった風を受け、降り積もった花びらがふわっと浮くと同時に、子供のすぐ横からひとりの女性が飛び出してきた。母親だろうかと思える。

母親は暴れる子供を抱えて、『袴雅小学校入学式』と書かれた案内板の前に立たせると、いかにも初心者らしい手付きで記念写真を撮っている。その姿が晃蔵には実に微笑ましく感じられた。

少しの間を置いて、爽やかな香水の匂いが晃蔵の鼻をくすぐる。どこか懐かしい匂いに、晃蔵は目の前の女性に母親の姿を重ねようとしたのだが……。

(……………やっぱりダメだ……………思い出せない……………)
すぐに嘆息が零れた。

晃蔵は両親の思い出はもとより、幼少期の記憶すら思い出せずにいる。記憶にあるのは蔵清と共に過ごした過去二年間の出来事と、身に覚えの無い断片的な記憶だけ。

だが不思議とその事実を受け容れる事が出来ている。ただ、母親や父親の顔を思い出せないという寂しさがあるくらいだ。特に今のような光景を見た時に、そういう感情が込み上げてくる。

無邪気な笑顔で駆け回る子供たちに内心で別れを告げて、晃蔵は先を急いだ。

しばらく走って大通りへと出た。都会ほどではないが、大勢の人々が行き交う場所だ。

学生、主婦、青年、サラリーマン、OL、etc……etc。先ほどの明るさとは一変し、元の湿っぽさが大通り全体を包み込んでいる。晃蔵はすれ違う人々に視線を向けて鬱陶しそうに溜息を吐いた。

人は生涯の内に、少なくとも一度は罪を犯す生き物だとは誰が言った言葉だったか。

「チツ…… 闇人やみびと ばかりだ……」

周囲に聞こえないよう、忌々しげに呟いた。

晃蔵には少し変わった？力が存在している。それは人の心に刻まれた 闇 を視認出来るという ？力？。

いつ頃得たという記憶は一切なく、人が無意識に呼吸するのと同じように、気が付けば視えていたのである。きっと家系の血筋に受け継がれている遺伝か何かだろうと、晃蔵は考える。

日常生活において、（気分が滅入ることを除き）特に支障がないので難なく受け容れることが出来たというワケだ。

晃蔵はなるべく他人の 闇 を視ないようにと、伏し目がちに走り続けた。

「ゲン爺の話はいつも長いんだよなあ……。今日は入学式なのに……」

晃蔵は今、入学式に出るべく『県立袴雅高等学校』へと向かって

いる最中だ。

それが何の嫌がらせか、晃蔵の養育者である梅原蔵清に呼び出されたのが数時間前の事。

言っても仕方ない愚痴を零しながら晃蔵は学校を目指し、さらに速度を上げた。

時間を遡ること、約四時間前。

朝の六時に目覚めた晃蔵は支度を整えてから食堂へと向かい、蔵清と共に朝食を摂っていた。

「晃蔵」

食事中にも関わらず蔵清から声が上がった。

珍しい事もあるものだ、と、晃蔵は内心で呟いて一旦箸を置く。

「食事が済んだら座敷へ来なさい。少し話がある」

「分かりました」

晃蔵は入学式に間に合わないかも知れないという懸念を抱き、二つ返事で了解した。

ほどなくして食事を終えると、その足で座敷へと向かう。座敷に入り、お互い正座のまま数分が経過した頃、蔵清が話の口火を切った。

「話とは お前自身も知っての通り、我ら梅原家に代々伝わる『鬼被い』についてだ」

空気を凍らせてしまいそうな凜然とした口調に、思わず晃蔵は身を震わせる。

「本来ならここで儀を行い、闇を視認する力を授けるのだが……やはり未だ視えておるのか？」

僅かに語尾を緩めて尋ねる。

すると晃蔵はゆっくりと目を瞑り、昨日までの光景を瞼の裏に再生する。目を開き、何かを確信するかのように頷くと、

「はい。ハッキリと視えます」

真っ直ぐに蔵清を見据え、落ち着いた口調でそう答えた。

蔵清は細い目を少しだけ開いて驚きを表現すると、次の言葉を探すかのように顎鬚を撫でた。

「……そうか。以前よりも力は強まっているようだな」
そこで言葉を区切り、軽い咳払いを挟んだ。

「それで……。意志の方は変わらぬか？」

その問いに晃蔵は一切の迷いを含ませず、確固たる意志をもって告げた。

「はい、変わりなく。おじいちゃんの仕事を見るようになったあの日から 既に心は決まっております。俺は『鬼抜い』の道を歩みます」

揺ぎ無く、曇りすらない言葉。

予想通りの返答だったのか、もしくは予想外だったのか……。蔵清は複雑な微笑を浮かべて「……そうか」と相槌を打った。

二人の間にしばらくの沈黙が下りた。時間が緩やかに流れてゆく。永遠に続きそうな静寂を破ったのは蔵清だった。

「私の？仕事？を見ていたお前なら『鬼抜い』の方法は心得ているだろう。敢えて今更教えるつもりはない。あとはその？力？を、お前がどのように使うか……。それだけだ」

「……？力？をどのように使うか……」

たった今、蔵清が言った言葉を、晃蔵は内心で何度も反芻し、最後だけ声に出して確かめた。

蔵清は背後に据えられた筆筒から何かを取り出し、晃蔵の前に置いた。

「これを……渡しておく」

「……それは……！」

視界に入った瞬間、鼓動が高鳴ったのが分かった。

眼前には朱塗りの鞘に収められた一振りの刀。長さは標準的な日本刀とほぼ同じ。晃蔵はその刀の名を知っていた。

二年前から蔵清の？仕事？に同行し、何度も目にしたことのある刀。 名を。

「…………… 鬼キフト被刀」

「左様。我ら梅原家に伝わる『鬼被い』の力だ。一日でも早く己の手に馴染ませよ」

恐る恐る手に取った刀は予想以上に重く、心なしか刀自体が脈打っているように感じられた。

「…………… 本当にいいのだな？ …… 引き返すことは叶わぬぞ？」

これで幾度目かの確認の言葉が紡がれる。蔵清が放つ気迫に気圧される事無く、晃蔵は力強く頷き、鬼被刀を手に取る。晃蔵の覚悟を改めて認識し、蔵清は感嘆の溜息を零す。

「これでお前も『鬼被い』の身。しかと己の役目を心に刻んでおけ。蔵清の鋭い言葉に晃蔵はしっかりと頷いた。

「お前の担当区域は禱雅高校だ。学生ゆえ、なにかと都合もよかる」
「う」

「はい。分かりました」

ふと、奇妙な文字が記された布が柄に巻かれていることに晃蔵が気付いた瞬間、蔵清が体の芯に響くほど低い声で言葉を放った。

「その布は決して外してはならぬ」

「ツツ!？」

あまりの迫力に晃蔵は思わず息を詰まらせた。只ならぬ雰囲気、座敷を支配する。まるで海の中にもいるような…………… そんな息苦しさが晃蔵を襲う。

「それは謂わばお守りのようなものだ。努々忘れるでないぞ」

口調が和らぐと同時に呼吸も正常に戻る。

その後も蔵清の話は続いた。…………… といっても話題の大半を占めたのが？座敷に飾っている掛け軸がいかにも素晴らしい物かについて？であった。晃蔵にしてみればこの上なく退屈極まりない話でしかなく、気が付けば九時を回っており、慌てて家を飛び出したのだった。

「…………… 今思えば、どうしてあんな退屈な話をずっと聞いていたんだ？」

自問と同時に後悔を振り払うかのように走り続ける。やがて歩道橋に差し掛かり階段を二段飛ばしで上った。今は学校に辿り着くことが先決だと判断したのだ。

階段を上り切ると歩道橋の半ばに、ひとりの少女が佇んでいた。物静かに行き交う車を眺めている。晃蔵は少女の姿が視界に映ると同時に、妙な違和感を覚えた。

儂げに佇む少女は小柄で、その横顔はどこか幼さが残った顔立ちをしていた。中でも特に目を引いたのが雪のように白く長い髪だった。腰まで届きそうな白髪は驚くほど艶やかで、天使の翼を思わせるほどである……。あまりの鮮烈さに晃蔵は息を呑み、その場に立ち尽くすことしか出来なっていた。

「……あ」

不意に今し方感じた違和感の正体に気付く。

(そうか……この子には 闇 がないんだ。……珍しいな)
ひとり納得する。

人は誰でも大小の違いはあれ、必ずといっていいほど 闇 を持っているものだ。 闇 を持たないのは、それこそ赤ん坊くらいだと蔵清から聞いた事があつた事を思い出す。だからこそ晃蔵は白髪の少女に違和感を覚えたのだった。

晃蔵が動きあぐねていると、少女は晃蔵の存在に気付いた。まるで待ち人を目にしたような優しい微笑みを浮かべた次の瞬間白髪の少女は意外な言葉を投げ掛けてきた。

「あ！ 久しぶりだね！」

「……はい？」

晃蔵は思わず自分の後方を確認するが……もちろん誰もいない。きつと少女の勘違いだと考えた。

しかし笑顔を向けたまま一向に言い直そうとしない雰囲気、晃蔵は堪えきれず聞き返した。

「あの……えつと……悪い。俺には覚えがないんだけど……。人違いじゃないのか？」

少女が放つ不思議な空気に吞まれているせいか、ただたどしい物言いになってしまう。

すると少女は晃蔵の顔を見て、

「ううん。ちゃんと、においは合ってるよ!」

実にわざとらしく舌をチロつと出して答えた。

妙な物言いに晃蔵は怪訝な表情で問い返す。

「……………におい?」

そこで、自分がここまで走ってきた事を思い出し、反射的に服のにおいを嗅いだ。しかし何もにおわない。?におい?の意味を訊こうと顔を上げた時には既に、少女の姿は消えていた。辺りを見渡してもそれらしき影も形もない。それこそ雪のように……………。

「……………そうだ……………学校」

そこで本来の目的を思い出し、足早に歩道橋を渡る。

階段を下りて再び走り、二時間の遅刻で辿り着いたものの、入学式は既に終わっていた。

晃蔵の高校生活はこうして幕を開けたのであった。

椿雅高校より数キロほど離れたところに一軒の人家がある。屋敷ほどの広さを有する割に、どこかひっそりとした雰囲気漂う、なんとも奇妙な家だ。

夕焼けに染まる空の下、茶室のような設えがある部屋から、しわがれた声が漏れた。

「茜^{あかね}衾^{ねむ}や……………茜衾はおるか?」

「……………はい。衾^{ねむ}様。茜衾はいつでも衾^{ねむ}様のお傍に」

障子を静かに開けて現れたのはまだ幼さの残る茜衾と呼ばれた少女だ。アーモンド形の瞳に小さな口をしており、その身体にあるべき女性的な膨らみは乏しい。その弱点をスカートから伸びたしなやかな両脚が補っている。なにより腰まで伸びた艶やかな白髪が、茜衾という少女を見事に表現していた。

茜衾の姿を認めた老婆。衾^{ねむ}は言葉を選ぶようにゆっくりと口

を開いた。

「……梅原の　？被いの子？にはもう会ったのかえ？」

「はい。仰せの通り……今朝、接触してきました」

茜祢の明瞭な返答に祢夢は薄く微笑む。

「結構、結構。ならば茜祢や……その子を護るのじゃ。よいな」

「はい。祢夢様」

茜祢は穏やかな笑みを浮かべて頷いた。

「準備が整い次第知らせるでな、暫し待たれよ」

祢夢のその一言で、茜祢は来た時と同じく、静かに障子を開けて出て行った。いつしか陽が落ち、暗闇に包まれた部屋で、祢夢は虚空に向けてひとりごちる。

「あの子は異なる存在よ。だがそれが、我等の未来を照らし出すやも知れぬ。我等の血が途絶えるわけにもいかぬのじゃ。刻々と脅威が迫っており。急がねば……急がねば……！」

差し迫った口調で紡がれる祢夢の独白は、闇に包まれた部屋に溶けて消えた。

「2」

翌日から、校舎案内やカリキュラム説明もそこそこに、早速授業が始まった。忙しい日々はあつという間に過ぎ去り、今日で一週間が経った。

晃蔵には高校入学にあたり、期待していることがあった。それが友達を作る事である。過去二年間の記憶を辿ってみても友達の影すら見当たらない。今からでも遅くないと言い聞かせ、友達を作ろうとするのだが、どうにも上手くいかなかった。

目つきが鋭く、近寄りがたい雰囲気のせいもあるのだろうか、原因はもっと根本的なところにある。

それが晃蔵の持つ、人の心にある　闇　を視ることができる？力？だ。

人に近付きたいと思う反面、信用出来ないという意思が、他人との関わりを拒絶する。相反する思いが晃蔵を苦しめ、考えれば考

えるほど身動きがとれなくなる。日を追うことにクラス内で孤立していった。

(友達を作るってこんなにも難しい事なのか……?)

前途多難な事態を目の当たりにして小さく溜息をつく。周囲を見渡せば行動派のクラスメイトたちは順調に友達開拓を進めており、早くもグループを形成しつつあった。そんな彼等の姿を晃蔵は羨ましそうに見つめることしか出来ずにいる。

各部活動の勧誘も盛んで、一人でも多くの新入部員を確保しようと学校中では入学式の翌日から盛大な争奪戦が繰り広げられた。だがなぜか晃蔵にはどの部活からも勧誘の声はかからなかった。

所詮は 闇人 だからと強がってみるが、実のところは少し寂しかったりするのだった。

友達は欲しいが 闇人 は御免だ……しかし友達は欲しい……という堂々巡りの末、晃蔵はその問題をとりあえず保留し、思考を切り替えることにした。

晃蔵とて自身の役割を忘れてしているワケではない。晃蔵は今朝、蔵清から『?仕事?の際に動きやすいよう、環境を整えておけ』と言われていた事を思い出し教室の天井を仰ぐ。

幸い晃蔵の担当区域である学校では今のところ?仕事?は発生していない。しかし、いつ?仕事?が発生するか分からない以上、その時に備えておくに越したことはないという蔵清の言葉に「当然だな」と晃蔵は内心で呟く。

束の間の休憩時間が終わり、六限目の始まりを告げるチャイムが鳴り響いた。教室に溢れていた喧騒が徐々に静まってゆく。

「なー……次ってホームルームだけ? 何やるか知ってる?」

教室の窓側 晃蔵から三列左の席に座っているロン毛の男子生徒が気だるそうな声を上げた。ロン毛の声が呼び水となって、一旦は静かになっていた教室に喧騒が戻る。

ロン毛の質問にボウズ頭の男子生徒が返す。

「あー……確か部活を決めるって言ってたぜ」

「部活ねえ……お前はもう決めた？」

「別にイ。中学でバスケやってたけどよオ……好きでやってたワケじゃねえしなア」

「あ、それ同じ。俺もサッカー部だったけどよオ……高校に入ってまでやる気ねえよ」

「だよな。それよりも遊びてえから部活には入らねえな。敢えて言えば」

「帰宅部！」

そこで二人の声がキレイに重なり、途端に噴き出して笑い合う。彼等の会話から六限目の授業内容を把握した晃蔵は最も適した部活を思案した。

(……って、そもそもどんな部活があるのか知らねえや……考えるのはそれからだな)

即座に思考を打ち切って、担任の到着を待った。

晃蔵の祈りが通じたのか、唐突に前方の引き戸が開き、一人の男性教師が入ってきた。担任でもある教師は前置きもなしにプリントを配り始め、一通り行渡った頃合いを見計らって口を開く。

「この時間は入部希望調査を行う。昨日までの部活紹介とプリントを参考にして、授業終了までに希望用紙に記入して提出するように」
言い終えるや否や、担任は教卓に突っ伏して寝息を立て始めた。

教室中から失笑が湧き起こる。

晃蔵はプリントを上から順に読み進め、ある部活に目が留まった。

(剣道部か……。まあこれが妥当だろうな)

手早く記入を済ませる。話し相手などいない晃蔵は、大人しく授業時間が終わるまで眠ることにした。

その日の放課後。

「ここが……道場か」

体育館の傍に設けられた道場の前に立ち、誰にともなく呟く。中からは竹刀の乾いた音と共に、奇声にも似た叫び声が聞こえ、近寄

りがたい空気を漂わせている。そのため晃蔵はかれこれ、一〇分ほどこうして二の足を踏んでいるのだった。

(よし……入ろう！)

気持ちを奮い立たせ、晃蔵は道場の扉を開けた……それとほぼ同時に。

「一本！」

裂帛の声と共に、防具に身を包んだ生徒が目の前でくずおれた。場内にどよめきが湧き起こる。晃蔵のすぐそばで部員のひとりがおのきの声を上げる。

「だ……誰だよ、あの一年の女子は……。ウチの主将を倒しやがったぜ……」

晃蔵はその本人を一目見ようと視線を向けた瞬間衝撃が走った。

「ッッ!？」

振り向いた少女と視線が合った瞬間、晃蔵は心臓にナイフを当てられているかのような冷たさを感じたのだ。その瞳は深い闇を切り取ったような色をしており、同じ色の黒髪は肩口で切り揃えられている。少女が立っている周囲の空間が歪んでいるような錯覚すら覚えた晃蔵は内心で叫ぶ。

(妙だ……!)

少女が 鬼憑き かという推測に至り、?力?で視てみたが 闇は見当たらなかった。

(この子は?普通?だ。けど……だったらこの気配は何なんだ……?)

既に何度も視線を外そうとしているのだが、不思議と外せない。不可解な事態に戸惑い、歯噛みする。額に冷や汗が滲み頬を伝う。

すると少女がおもむろに近寄ってきた。ただそれだけの事で動悸が起こり、息が苦しくなる。眼前まで迫った少女は静かに言葉を紡いだ。

「……お前からはなんだか懐かしいにおいがする……」

その言葉に一瞬、晃蔵は何かを思い出しそうになった。だが動揺

しきつた思考回路では思い出せるワケもなく、思ったことをそのまま口にした。

「におうのは……防具をつけて動き回っていたキミの方じゃないかな？　なんて……ね。……あはは」

しばしの沈黙。

「む。女の子に対して失礼な奴め」

冷然とした声が容赦なく晃蔵に突き刺さる。戸惑う晃蔵に構わず、少女は道場から出て行くとする。

「おい！　待って。においてなんのことだよ！？」

冷静さを取り戻した晃蔵は、そこでようやく一週間前の事を思い出した。天使を思わせる白髪の少女にも、おいがどうこう言われていたのだ。短期間の内に似たような言葉を聞かされたら、誰だつて気になる。

晃蔵の質問に少女は振り返り、

「……なんでもない。気にするな」

抑揚の無い口調ではぐらかすと、台風のように道場から出て行った。

「……なんだ、あいつ……？」

晃蔵はこれからの学校生活に言い知れぬ不安を覚えた。

「……そんなにおうかな……？」

ふと別の不安に駆られ、思わず自身のおいをかいだのだった。

「　　そうか。剣道部に入ったのか」

道場で謎の少女を目撃した後、晃蔵は部活を見学してから帰路についた。晃蔵は担当区域の報告も兼ねて、今日の出来事を蔵清に報告している最中だ。

「はい。鬼抜刀　を常に携帯しておくのに最適かと思いましたが、で」

「……お前なりに色々と考えてやるといいだろう」

話が途切れたところで晃蔵は？　おい？　について切り出した。す

ると蔵清は細い目を僅かに開き、眉間に皺を寄せた。

「におい……だと……？」

「……。何か心当たりがあるのですか？」

一拍の間を置いて尋ねると蔵清は目を瞑ってかぶりを振った。

「いや、なんでもない。今日の報告は充分だ。部屋に戻りなさい」

「……。はい。失礼します」

言葉を濁した蔵清の反応が気に掛かったが、戻れと言われた以上従う他ない晃蔵は 鬼抜刀 を手に立ち上がった。

障子に手が掛かったその時、背後から蔵清の声が上がった。

思い直し、話す気になつたのかと晃蔵は期待した。しかし、蔵清の口からは先日も聞かされた掛け軸の自慢話を聞かされただけだった。話が終わり、晃蔵は怪訝な表情で座敷を後にした。

自室に戻った晃蔵は月明かりを頼りに神妙な面持ちで 鬼抜刀 を眺めていた。人の心にある 闇 に誘われ、その人間を支配する存在 鬼 。

梅原家が持つ『鬼抜い』の力は、鬼憑き に対して力を発揮し、対象から 鬼 を引き離すことができる。欠点としては完全に成り代わった 鬼 には無力である事。『鬼抜い』の力はあくまで 鬼 憑き にしか効果がない。

成り代わった 鬼 には『鬼殺し』や『鬼護り』おにまもと呼ばれる別の家系が存在し、対処しているのだと、蔵清から聞いたことがあった。鬼 とはいえ、外見は人と変わらない者が殺される光景を想像するだけで、晃蔵は無念に思え、日々心を痛ませている。

「……熱い」

奇妙な文字が記された布越しに柄を握ると、まるで刀が燃え盛っているのではと思うほど熱を帯びている事に気付いた。先日、物凄い剣幕で釘を刺した蔵清の言葉が脳裏に反響する。

「……お守りか」

呟いて刀を置き、ベッドに寝転がった。目を瞑り、今日までの事

を思い返す。

歩道橋の上で出会った白髪の少女の事や道場で見かけた黒い瞳をした少女の事を……。目を開き、天井に向けて何かを掴もうとするかのように手を伸ばす。

「……？力をどう使うか……」

言い終えると同時に手を握り締め拳を作る。晃蔵は今、不安と同時に言い知れぬ寂しさを感じていた。その原因は未だに友達が出来ない所為だと考える。

「俺は……人のために？力を……」

部屋の暗さも手伝って、晃蔵の意識はゆるやかに微睡みへと沈んでいった。最後に自分が呟いた言葉にも気付くこともなく。

夜は静かに深さを増してゆく。

晃蔵が座敷を去った後、蔵清は独り物思いに耽っていた。

「晃蔵の存在に気付く者が、これほど早く……。」「聖森」（ひじりのもり）、」「閻倉」（やみくら）の両家が動き出したというのか。」「閻倉」はともかく、「聖森」との話し合いは「
そこで思考を切り、ひとつの推測を口にした。

「どうやら流れは既に変わり始めているようだ。斯くなる上は宿命に身を委ね、訪れるであろう運命の時を待つしかあるまい」

その意思是果たして覚悟であったか……。どこか諦観にも似た悲壮感が、蔵清の表情から滲み……。そして蔵清は再び思案に沈んでいた。

同じ頃。

禱雅町の南部。人里離れた山間にその家は建っている。人目を避けるようにひっそりと。

家自体はさして大きくなく、やや広い平屋建てだ。月明かりが照り輝く空の下。夜の空気に浸っているふたつの人影があった。

「刹那。学校は楽しいかい？」

その内のひとり 落ち着いた風貌の男が穏やかな口調で尋ねた。すると男の膝を枕代わりしていた少女が目を覚まし、のんびりとした声で答える。

「うん、とっても楽しいよ！ パパ」

無邪気な笑顔。男は少女の瞳を覗き込む。深い闇のような双眸に、ともすれば呑み込まれそうな錯覚すら覚える。

「よかった。困ったことがあればいつでもおいで。……愛しい刹那」

「刹那もパパのこと大好き！」

「ああ……嬉しいよ刹那。……刹那……刹那……ッ！」

ありのままの想いを紡ぐ。瞳と同じ色の髪を優しく撫で、両手で抱えて胸に引き寄せる。抱き締める手に自然と力がこもる。

「……パパ……苦しい」

「ご、ごめん。大丈夫かい……？」

「うん、平気！」

男の腕から解放された刹那はお返しとばかりに、男の唇へ自身の唇を重ねた。

「ッ！」

男は驚きに目を見開く。

「お返し、だよ！」

やがて男は硬直から回復し、一言だけ「ありがとう」と囁いた。

このままずっと続くかと思われた幸せな時間は、唐突に終わりを告げる。

「 那斬様なぎり」

どこからともなく正面の庭に、黒装束に身を包んだ長身痩躯の男が姿を現した。

「烏夜うやか。……どうした？」

那斬と呼ばれた男の口からは、それまでの穏やかさとは一変、冷然とした声が放たれた。

「……恐れながら報告がございます」

黒装束の男 烏夜は機敏な動作で跪くと刹那に一瞥を投げた。

その動作から彼の意図を察した那斬は？優しいパパ？の口調で刹那に囁いた。

「刹那。良い子だからもう部屋に戻ってお休みなさい　大好きだよ」

言い終えると同時に刹那の体を抱え上げ、床へと下ろす。並んで立つと刹那の頭はちょうど那斬の鳩尾辺りにくるため、つい反射的に撫でてしまう。美しい黒髪を手櫛で梳いてやる。

烏夜の報告すら忘れて夢中になっていると不意に刹那は身を翻した。テテと木張りの廊下を歩き、少し離れたところで振り返り、「刹那もパパのこと大好きっ！　お休みなさい、パパ。烏夜さんもお休みなさい」

「ああ……お休み」
「……」

薄暗い廊下の向こうへと去ってゆく刹那の後姿を複雑な表情で見送りながら那斬は言葉を零す。烏夜は黙したまま、視線だけを刹那へと向けていた。

那斬は少しだけ余韻に浸ってから、烏夜へと視線を戻した。

「これで良からう　申してみよ」

「ハッ。実はかねてより監視しておりました『聖森』の動向に、僅かながら動きが見られました。もしや、くだんの談合が」

烏夜の言葉はそこで途絶える。

「　もうよい。……主旨は把握した」

そう那斬が制したため、烏夜は口を噤み、跪いたまま言葉を待つ。沈黙の隙間に、不穏を知らせるかのような風が吹き抜けた。

「……堅物の『梅原』はどうだ？　相変わらずか？」

「御意にございます。『被い』の儀も七日程前に済ませた模様。どうやら？力？を使う道を選んだようです」

途端、那斬は肩眉を吊り上げて歯を軋ませた。

「なんとも堅物らしい考えだな。同時に滑稽ではあるがな。そうか？道？を歩みだしたのか。それは奴なりの？答え？なのやも知れぬ

な……」

「……」

烏夜は黙することで那斬の言葉に答えた。不穏なる風が再び吹いた。それはまるで、那斬の心を見透かして嘲笑っているかのように冷やかだった。

「案ずることはない。我々は一族の信念に従い、使命をまっとうするだけだ。『聖森』の首を獲るという目的に変わりは無い……！」
力強く決意を表した。かと思えば今度はひどくもの悲しそうな表情を浮かべ、やや沈み気味に切り出した。

「だがもし……私の身に凶事が訪れたその時は 刹那に我らの宿命を教えてやってほしい。烏夜……頼めるか？」

那斬の穏やかな物言いに、烏夜は動揺を露わに反論を口にする。

「……それは承知しかねます……！ 那斬様は我等の導き手なれば 我等は命を賭して那斬様を御守り致したく」

だが、烏夜の反論は那斬の心を動かすに至らなかった。

「烏夜……頼めるか？」

再び同じ言葉が紡がれた。

その時、烏夜には那斬の声に、何かを悟ったような哀しさを孕んでいるように思え、それ以上言葉を返す事は出来なかった。烏夜に出来る事はただ那斬の願いを聞き入れる事だけ……。

「……。那斬様のご意向のままに」

どうにもならない歯痒さに唇を噛み締めて恭順の意を示した烏夜は、瞬時に気配を絶った。

誰もいなくなった縁側で那斬は空を仰ぎ、確たる意志をもって
咳く。

「……我ら『鬼殺し』の血に懸けて この連鎖を断ち切ってみせよう……！」

遠くの空で風が叫んでいる そんな夜だった……。

「3」

様々な思いが駆け巡った夜が明け、穏やかな朝が訪れた。

晴れ渡った空の下、冷涼な空気が心地よく肺に満ちる。

素早く着替えを済ませて窓を開け放ち、晃蔵は束の間の安らぎに浸った。深呼吸して窓を閉め視線を床へ落とすと、そこには晃蔵の明確な？力？が静かに存在感を主張していた。

「…………… 鬼抜刀 ……………」

小さく呟いて刀を手を取った。奇妙な文字が記された布越しにかなりの熱が伝わってくる。そのまま握り続ければ皮膚が爛れてしまいそうなほどに……………。

「熱い……………。これが 鬼抜刀 の？力？なのか……………」

晃蔵の独白は狭い室内に響くこともなく消えた。最後に一度、存在を確かめるように強く握ると部屋の隅に据えられた机の上に置いた。

出来る事なら携えておきたいところだが、いまはまだ、環境が整っていないのだ。

晃蔵は『鬼抜い』の任についてから今日まで実戦を経験していない。あくまで過去に蔵清の？仕事？を目にしたくらいだ。当然不安は拭いきれない。

幸い、ここ一週間は特に 鬼憑き を見かける事なく過ごせたが、奴らはいつ現れるか判らないのだ。今はただ、現れないことを願うばかりの晃蔵であった。

だがそんな晃蔵の願いを嘲笑うように、厳しい現実が待ち受けていた。学校に着くと同時に、晃蔵は強烈な吐き気を覚えるような異様な空気を感じ取った。

「これはまさか！？ ……………厄介な」

校舎を見上げて低くぼやく。

晃蔵は 鬼憑き に対抗できる？力？ 鬼抜刀 を持って

来ていない。深い溜息を吐き、猛獣の檻に足を踏み込むような気分
で校舎へと向かう。

教室はいつもと変わらない喧騒に溢れていた。何人かのクラスメ

イトは最初こそ視線を向けるのだが、二秒後にはまるで何事もなかったかのようにお喋りを再開する。それが最早当たり前の光景になっていた。

依然として晃蔵の居場所はない。その原因が自分にあるのか否かを、晃蔵は量りかねている。「おはよう」の挨拶を一度も交わすことなく、晃蔵は教室の真ん中にある自分の席に着き、カバンを机の横に引っ掛ける。

それから十五分ほどが経った頃、既に顔馴染みとなった担任が教室に入ってきた。

晃蔵はようやくその担任の名前を覚えたところだった。

(確か 戸梨^{となし}……だったかな)

担任の戸梨は、年中日焼けでもしているような肌をしており頭はパンチパーマ。背は低めで紛れもない体育会系の雰囲気を漂わしている。といういかにも近寄りがたいタイプの人間だ。既にクラスでは戸梨の悪評が囁かれていた。いわゆるセクハラ教師だ。

そんな男が未だに教師を続けられているのも、戸梨が持つ下劣な性根からくる慎重さゆえであつた。

一通り連絡が終わると教室に砕けた空気が広まった。お喋り好きな女生徒たちは各々に席を立てて談笑を始める。教室を去ろうとしていた戸梨が突然、何かを思い出したような声を上げた。

「あーそういえば今日、編入生が来ることになってたんだが、どうやら遅れているようだ。本人が登校次第、追って紹介する。名前はなんて言ったかあ……。そう 聖森だ」

言い終えると同時に、近くにいた女生徒の下半身に視線を向けると、悪評通りの下卑た笑みを浮かべながら満足そうな足取りで出て行った。

入れ替わるようにして一限目 国語担当の教師が教壇に上がり、その日の授業が始まった。

(……ひじりの……もり? ……どこかで聞いたような……)

晃蔵は授業そっこのけで、戸梨が口にした編入生の名前を何度も

反芻し続けた。

やがて昼休みになり、クラスメイトの大半がお互いの机を向かい合わせて弁当を広げ始めた。教室が和気藹々とした雰囲気にも包まれる。

晃蔵は時計を一瞥すると、昼食を求めて教室を後にした。朝に感じた気配の正体を一刻も早く明らかにしておこうと考えながら。

ホームルーム棟から少し離れたところに学食棟がある。安くて美味いと評判の学食は昼時ともなると常に満席で、のんびり来た生徒が食券を買うことは不可能に近い。

また、食券にありつけなかった生徒のために食堂には購買が設けられており、パンやカップ麺、ジュースなどの類を取り扱っている。無論こちらにも数に限りがあるので、運がない者は昼飯なしという最悪な事態も別段珍しいことではない。

「……………冗談だろ」

購買を覗き込んだ晃蔵は半ば呆れ顔で冷や汗を浮かべた。授業が終わってすぐに来たというのに、カップ麺はもとよりパンすら売り切れ寸前の状態に陥っていた。既に種類の贅沢は言っていられない。今はどんなものでもいいのでパンを確保することが先決。人混みを掻き分けてどうにか菓子パンを三袋掴み取った。

晃蔵の三袋で丁度売り切れとなった 次の瞬間。

「ああああああああ ツツ!？」

素っ頓狂な叫び声がすぐ背後で上がった。何事かと思い晃蔵は声の方向へ振り返る。

「……………なんだ？」

そこには商品がキレイさっぱりなくなった棚を涙目で見つめ、ひとりの男子生徒がくずおれていた。瓶底のメガネをかけた、小柄でひ弱そうな生徒だ。

見たことない顔なので違うクラスだろうとか考えていると、

「わわわ……………パンが……………パンが一個もな……………い!？」

まるで世界の滅びを目撃してしまったかのような叫びが上がった。メガネくんの鬼気迫る形相に晃蔵は一瞬たじろいだ。晃蔵は意を決して声を掛けた。

「パンが欲しいのか？」

他人と喋り慣れていないため、どうしても口調が硬くなる。晃蔵の問いにメガネくんは顔を上げて嗚咽混じりに答えた。

「うん……うん……買えないと怒られるから」

「誰に怒られるんだ？」

「さ……三年の……先輩に……」

おおよその事情を察した晃蔵は、自分の手にあるパンへと視線を落とす。

「これでよければ譲ろうか？」

それは？友達が欲しい？という晃蔵の切実な思いから来た言葉だった。するとメガネくんは救世主を見るような眼差しで「……いいの？」と零したので、晃蔵は薄く微笑むとパンを一袋差し出した。しかしメガネくんの表情は依然として晴れず、沈鬱な面持ちで頂垂れている。

「……どうした？」

「ダメなんだ……」

「なにが？」

「一個じゃダメ……先輩は一食で最低三個は食べるんだ……」

途端に晃蔵はメガネくんの言いたいことを理解した。一瞬の躊躇いはあったもの、未練を捨てて二袋とも差し出した。

「ほら。これでいいんだろ」

「あ……ありがとう！」

メガネくんはようやく笑顔になった。

「ずっとこんな事をさせられているのか？」

尋常じゃない怯え方に引つ掛かりを覚え、疑問が口に出る。

「違うよ。こんな事になったのは最近なんだ。ちよっと前まではもっと優しく、仲も良かったのに……！ 僕には先輩が理解できな

い。もう……先輩を信じられないかも知れない……！」

記憶を手繰るように紡ぐ悲痛な思いに、晃蔵は少なからず共感を覚える。人の 闇 が見えてしまうために、他人と壁を作ってしまった。鳴咽を滲ませた声で、メガネくんは自身が感じた思いを口にした。

「先輩は変わってしまった……まるで鬼のように……！」

「……鬼……だと？」

思わず顔しかめて聞き返す。無論それは単なる言葉のあや 喩 えだろうとは頭では判っていても 言い知れぬ不安が脳裏を過ぎつた。思い違いならそれでいい。

だが自分にはこの学校を監視し、守る役目がある。不安要素は極力排除しておくに越したことは無い。

晃蔵はそんな思いを胸に、寂しそうな表情で俯くメガネくんに向けて静かに告げた。

「その先輩のそこへ連れて行ってくれ」

結局、昼食を摂らないまま、晃蔵はメガネくんの案内で？先輩？がいるという屋上へと向かった。実習棟の階段を四階まで上ると、屋上へと続く階段前に辿り着いた。

「……この先だよ」

今にも泣き出しそうな声が漏れた。一呼吸置いてメガネくんはドアのノブを握り、ゆっくりと回して開け放つ。

屋上の端に座り込んでいた先輩がメガネくんに気付くや否や、途端に大声を張り上げた。

「おい、テメエ！ メシ買うだけで何分かってんだッ！ ブツ殺すぞゴラア！」

いかにも不良っぽい物言いでメガネくんを威圧する。

「わわわ……ごめんなさいいいい！」

メガネくんは慌てて先輩の許へと駆け寄る。先輩はパンを受け取ると同時に、大きな拳でメガネくんを殴り飛ばす。防御すら出来ず

に、メガネくんは仰向けのまま気絶した。

瞬時に殺伐とした空気が肌を刺した。晃蔵は平然とした表情のまま先輩に近付き、心の内を見透かすかのような目で見据えた。

「あ？ 誰だテメエ……？ 何勝手に上がってきてんだ ブツ殺すぞゴラア！」

ワンパターンなセリフが歪んだ口から放たれた。だが晃蔵は怯んだ様子もなく、ただ先輩を見据え続けている。

（こいつはまだ 闇人 だ。……しかし）
そこまで思考し、困ったという風に短く溜息を吐いた。

（…… 鬼憑き 化が近い……遅くても放課後か。だが、今から鬼被刀 を取りに帰ってる暇はないだろうな。 チツ……厄介な）

わずかな時間で判断を下し、腹を括る。さらに数歩近付き、先輩へと迫り、囁くように告げた。

「俺が手伝ってやるよ。放課後この棟の裏に來い」
「テメエ……何を言ってるやがんだ！？」

「お前が解かる必要はない」
そんな言葉を残し、晃蔵は踵を返す。

「……。おい、しっかりしろ」
気絶しているメガネくんを声を掛けて起こす。

「ははは……ちよつと意識失っていたみたい。……そういえば用事は済んだの？」

先輩に対する怒りなど微塵も見せず、言葉を紡ぐ。
「少しは自分の体を大切にしろ。取り敢えず保健室だ」

「えっ……ちよつと……」

途端に動揺を露わにして後ろを振り向く。だが先輩は引きとめようとしなない。現状が理解できないのか、メガネくんは目を白黒させる。

「大丈夫だ。気にするな」

その言葉を最後に晃蔵とメガネくんは屋上を後にした。独りになった先輩は、言い知れぬ不安をその身に覚え、湧き起こ

る齒痒さを近くの壁にぶつけた。

放課後。

周囲を見渡せば多くの生徒で賑わい、それぞれが部活や下校などの目的を持って動いている。

そういえば自分は剣道部に入ったんだっけと、どこか他人事のように思い出す。

晃蔵は授業中も先輩の気配に注意を払い続け、無事に授業が終わった頃には先輩の気配は限りなく 鬼憑き に近いモノになっているように感じられた。

晃蔵はすぐに教室を出て実習棟へと向かう。初めての『鬼抜い』を遂行するために。

しかし今日は 鬼抜刀 を持っていない。いやが上にも不安は高まる。己の五体だけで成し遂げることが出来るのか……手に冷たい汗が滲んだ。

一步……また一步。確実に戦いの場へと近付いてゆく。避けることの出来ない道……自分自身で選んだ道を、晃蔵は今まさに歩いているのだ。

果たしてその道の先に、己が探している答えがあるのだろうか……そんな思いを巡らせながら……。

実習棟に近付くにつれて人氣が疎らになってゆく。運動場や体育館、職員室とは正反対の位置にあり、ホームルーム棟からも離れているため、部活の時間であってもこちらまで来る者はいないのである。

実習棟を除けば、今はほとんど使われなくなった予備倉庫があるくらいだ。その予備倉庫の前を通り過ぎようとした時、どこかで聞いたような声が耳に入った。荒々しい声が気に掛かり、物陰から様子を窺うことにした。

「ごちゃごちゃ言わずにカネ出せつつつてんだよオ！」

「カネが無えと遊べねえだろうがッ！」

(あいつらは確か……帰宅部だとか言ってる騒いでた二人組か。チツ馬鹿な事をしてくれるぜ、まったく)

ロン毛とボウズの脅しに屈した男子生徒は、震えながら有り金を差し出した。カネを奪い取れた事で満足したのか、二人は男子生徒に口止め代わりの蹴りを放って踵を返す。

鉢合わせをしても面倒だと判断した晃蔵は死角に身を隠し、二人をやりすごした。

男子生徒はヨロヨロと立ち上がり、校門の方へ向かって歩き出す。その姿を見た晃蔵は、ひとまずこの問題は保留して、本来の目的を果たす事にした。

実習棟に着き、裏へと回る。

「どうやら間に合ったようだな」

目的の場所には既に先輩の姿があった。

「……」

先輩は黙したまま、魚の濁ったような眼で晃蔵を見据えている。

(思った通りだ。……既に 鬼憑き になっていやがったか)

嘆息して肩を竦めると制服のボタンを外しながら言葉を放った。

「悪いけどそいつは返してもらっただけ。此の世に貴様ら 鬼 を野放ししておくワケにはいかねえんでな。約束通り、そいつから離れるのを 手伝ってやるよ！」

「何故オマエが被イノ一族ニ居ル……？」

先輩 鬼憑き の言葉に晃蔵は怪訝な表情を浮かべ、無駄だと知りつつも、

「……貴様、俺を知っているのか？」

と訊ねた。その言葉に 鬼憑き は、不敵な笑みを張り付かせただけ…… 答えは返ってこない。くつくつと、もはや人間の声ではない怖気を覚えるような音で嗤っている。ひとしきり嗤うと 鬼憑きは言葉を継いだ。

「マア理由ナドニ興味ハ無い 邪魔ヲスルナラ……才前毛喰ラウマデダ！」

直後の跳躍。鬼憑きの姿が視界から消えた。

「チツ……………！」

己の油断を呪い、晃蔵は意識を集中させる。左、右、背後、頭上……気配は目まぐるしく移り変わり捉えさせない。的になるまいと飛び退いた瞬間、狙い澄ました拳撃が脇腹を抉りあげた。胃液を吐き、苦悶に顔を歪めて片膝をつく。想定以上の威力に意識が飛びそうになる。視界に追撃の蹴りが映るが反応できずモロに食らい、体ごと吹き飛ばされ壁に激突した。

「……………ッか……………は……………」

酸素不足に陥り、慌てて息を吸った所為で激しく咳き込む。顔を上げて正面に現れた鬼憑きを睨め付ける。

「これが鬼憑きの力……。へっ……………へへ……………思ってたより強えじゃねーか」

皮肉を籠めて言い放ち、薄笑いを浮かべる。

「強イ……………ダト？ 完全ナ 鬼 デナイ我が強イナドト……………。嗤工又冗談ダ。我等ノ長八遙カニ強イゾ。最モ……………此処デ死又様ナ落チ零レニハ、関係ノ無イ事ダガナ！」

「……………ッ!?」

言い終えるより早く鬼憑きは地を蹴り、一気に肉薄。壁を背にしている晃蔵は後退が出来ない。ハンマーのような膝蹴りが腹部に突き刺さり、前屈したところに右のアッパーが晃蔵の顎を的確に捉えた。絶え間なく攻撃を浴びせ続け、晃蔵はサンドバッグと化している。持久戦を思考から排除し、一撃に全霊を注いで決着を狙う作戦に切り替える。

(……………これは腕が千切れそうなくらい痛えから、使いたくなかったんだけどな……………)

過去に一度、蔵清に同行した際にやむ無く力を解放した時のことを思い出し、額に冷や汗が滲む。

呼吸は乱れ視界が霞み、目蓋が鉛のように重い。それでも晃蔵は右手に意識を集中させ、力を解放してゆく。次第に右腕全体が熱

を帯び始め、末端にまで広がってゆくを感じた。

その間も 鬼憑きの攻撃は絶え間なく晃蔵の腹部を殴打し続けている。殆ど気力だけで意識を保ち、力が渡り切るまでじっと耐え忍ぶ。

「落手零レノ割ニ、シブトイ奴ダナ。ダガ、此レテ終ワリダ……死……！」

（ 来たッ！ ）

まさに紙一重のタイミングで晃蔵の右手に力が紡がれ 鬼憑きが腕を振りかぶった隙を衝いて、晃蔵は力を相手の体へと滑り込ませた。まるで肉体が存在しないかのように右手が手首まで埋まっている。

「バ……莫迦ナッ!? 何処ニソナナ? 力? ガ……残ッテイタト言ウノダッ!?」

「へっ……散々いたぶりやがって……。これで終わりだ! 失せやがれえッ!」

裂帛の気合いと共に晃蔵が 鬼憑きの体内で手を握り締めると、鬼憑きの背後で空間がゆがんだ。すかさず右手を引き、晃蔵はゆがんだ空間を的確に捉えて鋭く薙ぎ払う。

リ イン。

鈴を鳴らしたような爽涼とした音が辺りに響いた。

「『鬼被い』 完了」

「我が……負ケタ……ダト!? 祢夢様……申シ訳……」

「ネム……?」

晃蔵の咳きが届くより先に、 鬼憑きの気配は塵程も残らずに消え失せた。

目の前には元に戻った先輩の姿……。どうやら気絶しているようだった。

「くそっ……保健室へ……運ばなきゃ……ッぐあっ」

予想外の苦戦で体力を消耗し切った所為で、意識が朦朧となる。既に自分が口にした言葉すら記憶に残らぬ程に……。

「はは……ちょっと殴られすぎた。立ってるのが……つらいや……」
そう呟いて、その場にくずおれた。

晃敵が 鬼憑き と壮絶な戦いを繰り広げていた頃、ひとりの少女が学校の校門前に現れた。小柄な体躯に艶やかな白髪という容貌が、周囲の生徒達の視線を奪っている。

しかし少女は特に気にする様子もなく、ひとりごちた。

「やっと着いた！ えっと、まずは『しょくいんしつ』へ行くんだよね」

にはっと笑うと軽快な足取りで歩き出し……わずか数十歩で立ち止まった。どうやら目的の場所がどこにあるか分からず、立ち往生しているようだ。

困り果てている様子を見ていた生徒が心配になったのか、少女に声を掛ける。するとたちまち笑顔に戻りトテトテと走りだした。

本館（職員棟とも呼ばれる）に着き、教えられた通りに廊下を進むと『職員室』と記された案内板の部屋を見つけた。

「ここ……かなあ？」

恐る恐るドアを開ける。室内には人気はなくひっそりと静まり返っていた。後ろ手にドアを閉めた瞬間、奥の方から男の声が上がった。

「おう 遅かったじゃないか、待ってたよ。俺が担任の戸梨だ」

軽い自己紹介を口にしたがら戸梨は少女へと近付く。値踏みするような卑下た視線で少女の体を舐め回している。

「すみません……道に迷っちゃって……」

戸梨の悪意ある視線に気付かないのか、少女は謝罪を述べた。

「今日からお世話になる聖森茜祢です。よろしくおねがいします」

「……ん？ ああ、ヨロシクな」

戸梨は視線を這わせることに夢中になり返事が遅れた。悟られまいと平静を取り繕う。

「ところで『梅原晃蔵』さまはどこにいますか？」

茜祢の言葉に戸梨は怪訝な表情を浮かべた。

「なんだ聖森、あいつと知り合いだったのか？ あいつは確か剣道部だから道場にでも居るんじゃないか。ああ、道場はここを出てだな」

戸梨は丁寧に道場の場所を教えた。その際も視線はちやつかり、スカートから伸びる白磁の脚へと這わせている。噂に違わぬ筋金入りだ。

「分かりました。さつそく行ってみます」

失礼しますと言って茜祢は職員室を後にした。

「ぐふふ。聖森茜祢。とびきりの上玉だ。そそる、そそるぞオ。胸はないがそれもまた一興。だから小学校や中学校なんぞで問題が起きるワケだ。なるほど、理解した。精々愉しませてもらおうとするかのお……ぐふつくぐふっ」

一人しかいない職員室で戸梨の声だけが怪しく響き続けた。

職員室を出た茜祢はまっすぐに道場へ向かい、幸いにも迷うことなく辿り着くことが出来た。中からは裂帛の掛け声が聞こえてきている。

「ここに晃蔵さまが……！」

意を決して茜祢は道場の扉を開け中へと入っていった。場内はひりつくような空気が支配し、誰もが真剣に練習に励んでいた。視線を泳がせて晃蔵の姿を探すが見当たらない。するとひとりの男子生徒が茜祢に気付き、声を掛けてきた。

「誰かを捜しに来たのかい？」

体格のいい大柄な生徒だ。茜祢と並ぶと大人と子供のいい見本が出来上がる。主将の迫力に負けじと茜祢はぺたんこな胸を張って口を開いた。

「わあ……大きいですね……。えっと、梅原晃蔵さまはいますか？」

どうしても人目を惹いてしまう茜祢に気付き、他の生徒たちも徐

々に集まり始める。

「梅原？ ああ、確か昨日の。今日はまだ来てないぜ？ 補習でも食らってんじゃないか？ キミ……梅原の友達かい？」

「あ、はい。そうです」

茜祢が頷くと「ちょうどよかった」と言つて他の部員に合図を送る。すると程なくしてその部員が細長い布袋を手に戻ってきた。

「補習だったら練習が終わるまでに来られないだろうから、悪いけどこれを彼に渡しておいてくれないかい？ 一日でも早く手に馴染ませて欲しいのでね」

そう言つて差し出されたのは布袋に収められた二本の竹刀だった。「それじゃ頼んだよ」

他の部員たちは依然として茜祢を興味津々の様子で眺めている。だが主将の号令で弾かれるように動き出した。

「あ、ちなみに一年生の教室は真ん中の棟の一階だ。分からないかったら近くの生徒にでも聞くといいだろう」

「は……はい」

竹刀を抱えたままぺこりと頭を下げた。そして茜祢は主将に近付くと、小さく何かを呟いて踵を返す　と。

「きやつ！？」

確認せず急に振り返つたため誰かとぶつかり、茜祢は軽い悲鳴を上げた。

「ご……ごめんなさいです」

小さな鼻をさすりながらぶつかった相手へ視線を向ける。

「む？ すまない。人を探していて、少し余所見をしていた。許せ」

目の前には無愛想な物言いの少女がいた。背丈は茜祢と同じくらい。深い闇を切り取つたような黒い髪は見事に茜祢と対照的であった。

お互いに見つめ合い、不思議な沈黙が続く。先に少女が沈黙を破る。

「お前からとても心地よいにおいがする。触れても構わぬか？」

「え？ えつと……。う……。うん……。！」

少女が放つ迫力に茜祢は戸惑いながらも承諾する。

「そうか。では」

「ふわああっ!？」

言うが早く、少女は茜祢を抱きしめた。予想外の行動に茜祢は頬を染めるが、ものの五秒程で解放された。

「すまない……。驚かせたようだな。許せ」

「ううん……。大丈夫。茜祢は茜祢っていうんだよ。あなたの名前は？」

僅かに頬を染めたまま茜祢は少女に尋ねた。同じ年頃だからなのか、自然と口調が和らいでいる。すると少し間を置いて、

「……。刹那だ」

と、こちらは相変わらずの口調で答えた。

「刹那ちゃんだね！ 覚えておくね」

「茜祢……。私も覚えておくぞ」

「うん！ 茜祢もね、刹那ちゃんの事はなんだか守らなきゃって気がするんだあ。お互い会ったばかりなのに不思議だよね」

茜祢は心の底から嬉しそうに刹那に語りかけた。先ほどとは打って変わって、今は茜祢の勢いに刹那が押されている。何度か視線を彷徨わせてから刹那は少し躊躇いがちに口を開いた。

「……。友達……。」

ほとんど囁きに近い声を茜祢は聞き逃さなかった。

「うん！ 友達だよ！」

そう言って刹那の手を優しく握る。

「お前と私は……。友達……。」

今度は確かめるように、その言葉を囁いた。そこで茜祢は本来の用事を思い出し、「これから用事があるんだ。もう行くね」と告げて出入り口へと向かう。

「あ、そうだ。友達には？お前？なんて使っちゃダメなんだよ。ち

やんと名前で呼んであげてね 茜祢は茜祢だよ」

「……分かった、これからはそうする。また会おう 茜祢」

「うん！ 刹那ちゃん」

ばいばいと手を振って茜祢は道場を後にした。

「茜祢……」

しんと静まり返った道場に、刹那の呟きだけがやわらかく響いた。

「来たか、闇倉刹那。昨日の一戦は余興にすぎない。今日は本気で手合わせしよう」

「……。了解した。すぐに始めよう」

二人のやりとりに部員たちは只ならぬ不安を覚えた。なぜなら、主将が筋金入りの負けず嫌いだという事を知っているから。それがこんな小柄な一年の女の子に、二回も負けたとなればどうなるか……考えただけでも全身に悪寒が走るのであった。

「……気を失うワケにはいかねんだ、クソツ……！ 体が思うように動かねえ……！」

初めて 鬼憑き と戦い、満身創痍にされた晃蔵は、意識を保つだけでも必死の状況に陥っていた。 と、その時。

「 あ！ いたあー。晃蔵さま！」

意識の隅に、いかにも子供っぽく女の子らしい快活な声が響いた。どこかで聞いた事のある声だなど、ぼんやりと思考する。

(だれ……だ……?)

やがて声の主が、軽やかな足取りで駆け寄ってくる気配を感じた。僅かに開かれた視界に影が差し、体が抱き起こされる。

「大丈夫？」

優しい柔らかな声が降り注ぐ。残った気力を振り絞り相手の顔を見る。しかし逆光の所為で判別がつかなかった。

「……キミは……？」

掠れた声で尋ねる。すると少女は晃蔵の手をそっと握り、朗らかに答えた。

「茜祢は茜祢だよ。聖森茜祢！あなたを　晃蔵さまを護りに来たんだよ！」

「……俺を……まもり……に……？」

「そうだよ！」

「……ははっ……そうか……。ならもうちょっと早く……来て欲しかっ……」

言葉こそ返すがおそらく現状を一割も把握してはいないだろう。張り詰めていた緊張が解け、晃蔵の意識はそこで途切れた。

茜祢は晃蔵の頬を優しく撫でて、その寝顔を穏やかに覗き込む。

そのまましばらくの間、晃蔵の体力が回復するのを静かに待つことにした。

幕間【 ？理？ 】

人とは罪を犯す生き物だ。

罪を犯せば心に 闇 が残り、それは生涯をもつてしても到底消えることは叶わない。

そういう者たちを 闇人 と呼び、例外なく罪を繰り返す。何度も、何度でも……。なぜ人はあやまちを繰り返すのか。

その正体は 鬼 にある。

一括りに 鬼 といっても、そのイメージは個々により様々だろう。

ここでいう 鬼 とは、本来の？姿が見えない？という意に相当する。

謂わば？思念？に近い。

とはいえ姿が無いわけではない。あくまで？見えない？だけ。

人々が生きる？此の世？のすぐ裏側 ？彼の世？に 鬼 は存在している。

彼等は人の 闇 を喰う存在。

故に、彼等が嗅ぎ取れるほど大きな 闇 は等しく 鬼 に憑かれ、心を支配される。

この 鬼 に憑かれた状態を 鬼憑き と呼ぶ。

鬼憑き は罪を繰り返して 闇 を大きくしてゆく。

そうして得た力により 鬼 は？此の世？へと顕現する。

それが 鬼 にとって此の世に顕現することが出来る唯一の手段。

また同時に古来より続きし生き方なのだ。

そうして世に紛れ込む……。

取り憑いた人間と同じ姿をして。

実体を得て成り代わった 鬼 の姿は元の間人間となんら変わり無い。

そして本能に従い此の世に恐怖をもたらし、罪という名の破滅へといざなう。

だが此の世には、そんなモノたちに対抗出来る人々がいる。

決して表舞台に姿を見せずに暗躍する者達。

その中にひとりの少年が存在する。その名を

梅原晃蔵。

彼こそ代々続く『鬼祓い』の使い手であり、そして。

【二章】 ？友？

「1」

目を覚ました時、一番最初に映ったのは見慣れない天井だった。白を基調としていて清潔感に溢れている。鼻腔の粘膜を刺激した消毒液のにおい、自分がどこにいるのか判った。

「……保健室……か」

「そーだよっ」

「ツツ！？」

誰にもなく呟いたはずの一言に予想外にも返事が返ってきた。

聞き覚えのある幼い女の子の声。数拍の間を空けて、いつぞや歩道橋の上で見た顔が視界に映る。

「お目覚めだね！ 晃蔵さまっ」

「……キミはあの時の……？ どうしてここに……？ どうして俺の名前を……？」

まだ 鬼憑き と戦ったダメージが回復していないのか、うわ言のように疑問ばかり並べ立てる。

「茜祢だよ！ もう忘れちゃったの？」

「おお……アカネかい。ちょっと見ん間に大きくなったのう じやなくって!？ ……さり気なく人を痴呆老人扱いするのはやめてくれ」

「あはっ 晃蔵さまったら可笑しなこというんだね。 おじいちゃん、回診の時間ですよー。おなか見せてくれるかなー」

そう言っって茜祢は診察医になりきって晃蔵のカッターシャツを脱がし始めた。その動作は驚くほど手際がよく、あれよあれよという間に素肌が露わになった。晃蔵は中にTシャツを着ない主義のようだ。そこまでされてようやく身の危険を感じ取り、ハツとして茜祢のいたずらを阻止した。

「別に乗ってこなくていいから！ ……ったく」

「えへへー」

茜祢はチ口つと舌を出して微笑んでいる。深い溜息をつき、状況を整理しようと思いを巡らせる。鬼憑きをなんとか被ったあの後、誰かが自分を抱き起こしてくれたことを思い出した。

「……キミがさっきの？」

「そーだよっ！ 思い出した？」

「……ああ」

次の言葉を待つ間、晃蔵は茜祢へ視線を向けた。その心にはやはり 闇 はみられなかった。

(……やっぱり 闇 がないんだ……)

瞬間、心地よい安らぎが晃蔵をやさしく包み込む。

「晃蔵さまがあんなところで倒れてて、びっくりしたよー」

「じゃあキミがここまで？ ……あ……ありがとう、助かったよ」

ぎこちなくも礼を述べ、視線を外す。

「えへへー。だって茜祢は晃蔵さまを護りに来たんだもん！ これくらい当然だよ」

「ん？ ……どうして俺を？」

最もな疑問に茜祢は「うん？」と首を傾げて、

「よくわかんないけど、おばあちゃんがそう言ったの！ だから来たんだよっ！」

「それ……あんまり答えになつてねえんだけど……」

晃蔵は怪訝な表情で茜祢に視線を投げた。

「えへへー」

「笑って誤魔化すな！」

素人漫才のような雰囲気には晃蔵の鋭いツツコミが入る。

「よくわかんないけどね、これだけはハッキリ言えるよー」

不意に笑顔のまま真剣な面持ちを浮かべてこう言った。

「茜祢たちは友達だつてことっ！」

「……え？」

茜祢の言葉に一瞬、晃蔵の思考はフリーズした。なかなか咀嚼で

きない単語にあちこちでオーバーヒートが起こる。なぜならそれは、入学した日からずっと作りたい願っていたことだから……。闇がない茜祢に安心感を覚えたのか、晃蔵は戸惑いを露わにする。

「友達に……なってくれるのか……？」

わずかに震えた声が零れた。

「もちろん！ 茜祢たちは友達だよっ！」

爽やかな笑顔を浮かべて同じ言葉を繰り返し、晃蔵の手を握った。小さくも温かいやわらかな手。近寄った時に生じた風が茜祢の香りを運び、彼女らしい無垢な香りが晃蔵の鼻をくすぐる。一度目を瞑り、身を委ねた。

「……じゃあ……よろしく頼む」

「うん！」

それは晃蔵に初めての友達が出来た瞬間。

茜祢は笑顔のまま、しばらく晃蔵の手を握り続けた。

「聖森？ じゃあキミが例の編入生なんだ？」

あの後、保健室担当の先生に代わって晃蔵の様子を見に来た戸梨に、いい加減下校しろと催促された。

保健室を出る際、戸梨は茜祢の肢体を舐め回すような視線を這わせており、それに気付いた晃蔵は苛立ちを覚え、挨拶をすることなく学校から立ち去ったのだった。

そして今。

帰り道を歩きながら茜祢の苗字を今更ながら認識したところである。

「キミじゃないよ？」

茜祢の意地悪そうな口調で訂正を要求する。晃蔵は戸惑い「えーと……」と間を置いてから、

「……聖森……さん？」

と、遠慮がちに言った。茜祢は笑顔のまま黙し、暗に「聞こえないよ」という空気が嫌でも伝わってきた。

意外と手ごわい茜祢の態度に、晃蔵はバツが悪そうに夜空を仰ぎ逡巡する。しばらく歩いて横断歩道の信号に引っ掛かった。そこでようやく覚悟を決めた晃蔵はゆっくりと口を開く。

「……茜祢……さん？」

反応なし。そして遂に晃蔵は降参した。

「茜祢」

「なあに？」

すると、愛嬌のある声が返ってきた。言い知れないやるせなさを覚えた晃蔵だが、そんな何気ないやりとりが心地よくあり、僅かに口角を上げるに留める。

「茜祢は編入生なんだよな？」

「うん、そうだよー」

ようやくと会話が成立したと、晃蔵は小さな達成感を覚えた。

「ところで……さつきから気になってたんだけど 茜祢はさつそく剣道部に入ったのか？」

ようやく竹刀の存在に気付いた茜祢は「あ！ そうだった」と実に芝居がかかったセリフを口にして、竹刀袋を晃蔵へと差し出す。

「はい これは晃蔵さまのだよ。道場に行ったときに大きな人から預かってたのー」

「お……！ 悪いな、助かったよ。ありがとう」

「えへへー」

無邪気に喜ぶ茜祢の反応を見ると、つい『いい子、いい子』と頭を撫でてしまいそうな衝動を、晃蔵は寸でのところで抑え込んだ。

（……危ねえ、危ねえ……。かわ……。じゃない 無防備にもほどがあるだろ……）

信号が変わり二人は並んで横断歩道を渡り始め、茜祢から受け取った竹刀袋へと視線を落とす。

（……これで 鬼被刀 を持ち運べるな。もう今日みたいな戦いは御免だぜ）

晃敵は横断歩道を渡り切って左折し、自分の家へ最短コースの進路を取る。ふと、ある引掛かりを思い出し、茜祢に尋ねた。

「ところで、その『晃敵さま』ってのは……どうにかしてくれないか？」

「え？ どうして？」

「いや……普通に考えて『さま』はおかしいだろ」

晃敵の要望に茜祢は額に人差し指を当てて「うーん？」と首をひねり、困り顔を作って返した。

「晃敵さまは『晃敵さま』だよっ！ 晃敵さま！」

「ええい！ 連呼するんじゃない！」

解決の兆しが見えない禅問答のような雰囲気にとつと疲れが押し寄せてきた。恐らくはこれ以上なにを言っても無駄なのだろうという諦念を覚え「わかったよ……好きにすればいい」と肩をすくめた。
(……まあそのうち直つてくれるだろ)

そう理由をつけ気を紛らわす。もう少しで家に着く頃になってようやく、未だに茜祢と歩いていることに気付き疑問を口にした。

「そっいえば茜祢の家はこの辺なのか？」

「うっん。違うよー」

軽い口調で答えて指差したのは、今まで二人が歩いてきた方角。

しかし茜祢は、まるで他人事のような空気を醸し出している。次の瞬間、背筋に電気が走った。

晃敵は友達が出来た嬉しさの余りつい話し込んでしまい、茜祢が帰るタイミングを逸してしまったのかという不安が過ぎつたのだ。途端にバツが悪くなったのか茜祢を見つめたまま冷や汗を浮かべ、意を決して口を開いた。

「あー……悪い。つい話し込んでしまった。家はどの辺なんだ？ 送っていくよ」

せめてもの罪滅ぼしと誠意を示す。オロオロと狼狽える晃敵をよそに、茜祢はきょとんとしてアーモンド形の双眸を見開いている。

「大丈夫だよ、もうすぐ着くからっ！」

「え？ ああ、この先にも家があるのか？ なんだ、ビックリさせんなよ」

茜祢に促されて晃蔵は歩みを再開させた。一安心したのも束の間、晃蔵は自分の家に到着した。無論、茜祢はしつかりと傍に付いて来ている。

「俺の家はここなんだけど……茜祢の家はまだ先か？ 時間も遅いし送るよ」

あくまで埋め合わせをしようと提案した。しかし茜祢は笑顔を浮かべたまま後ろ手を組んでいる。

「……？」

晃蔵が異変を覚え始めた次の瞬間。茜祢は驚くべき一言を口にした。

「茜祢の家はここだよっ！」

「………はい？」

その言葉を咀嚼するにはしばらく時間が掛かった。間の抜けた声が零れる。

「どうしたの？ 晃蔵さま。早く入ろうよ。茜祢、おなかぺこぺこだよ」

「……悪い……ちょっと待ってくれ」

「うん、待つよ。でもできるだけ早くしてね」

ひとまず茜祢を制して状況整理を開始した。目を瞑り思考に集中する。その隣では茜祢が「まだかなー、まだかなー」と上体を揺らしてふわふわしている。一分ほど経ってから晃蔵は目を開いて茜祢へ視線を向け、導き出した答えを告げた。

「……つまり、茜祢が俺の家に泊まるってことか？」

晃蔵が導き出したのはなんのひねりもない、そのまんまの答えだった。おそらく考えすぎてぐるりと一周してしまったのだろう。待ち侘びていた茜祢は息遣いが聞こえそうな距離まで近付いて会心の笑みで、

「ぴんぽん」

と言って晃蔵の額を人差し指で小突いた。

突きつけられた現実に戸惑いと諦めと　わずかな期待が同時に湧き起こり、半ばなげやりな嘆息を吐いた。

「……俺は呼び鈴じゃねえ」

苦笑まじりに反撃の言葉を呟いて、晃蔵と茜祢は並んで家へと入っていった。

茜祢が自分の家に泊まることを仕方なく納得したとはいえ、蔵清に何と説明すればいいのか分からず、晃蔵は軽い頭痛を覚えた。下手に隠したりして後々発覚しようものなら、こっぴどいお説教が待っている。だからこそ晃蔵は家に茜祢を上げたその足で蔵清の部屋を訪れた。

「……おじいちゃん。晃蔵です。只今戻りました」

「晃蔵か。うむ、把握した。じきに夕飯だ……着替えて食堂へ来なさい」

いつも通りの重々しい声音が障子の向こうから発せられた。

「はい。わかりました」

会話が終わっても尚、晃蔵はその場を離れずにいる。静寂が周囲を包み込む。ゴクリと生唾を飲み込む音が異様に響き、背中に嫌な汗が滲んだ。

「どうした。晃蔵」

威圧的な言葉が鼓膜を震わせた。その声には一切の虚偽すら許されない精神的重圧を孕んでいる。

もつとも、晃蔵には蔵清に対して嘘や偽りをもって謀る度胸は微塵もない。そんなわけで晃蔵は率直に告げる。

「　今晚、学校の友達を泊めることを許可して頂きたいのです」
数拍の沈黙に続いて「入れ」という声が上がった。

「失礼します」

静かに障子を開け座敷へ入る。座敷は薄暗く、唯一の光源は蔵清の手前にある置行灯。中の火が揺らめき、蝋燭の融けるにおいがほ

のかに漂っている。蔵清は手元の書物から視線を上げ、茜祢の姿を認めた。

「！」

瞬間、晃蔵は座敷の空気が凍りついたような錯覚を覚えた。一言も声を発することが出来ない、重苦しい空気が座敷に満ちる。

蔵清は茜祢を見据えたまま微動だにしない。ユラユラと置行灯の明かりだけが動いている。永遠に続くかと思われた静寂を破ったのは蔵清だった。

「名を」

これ以上ないというほど端的な質問。聞き逃しそうなほど囁きに近い声は、しかしハッキリと耳に届き、脳裏に響いた。

晃蔵は静かに眼球を動かし、隣に佇む茜祢を視界に捉える。蔵清の気迫にあてられたら普通の子供など三秒ともたずに泣き出すか、下手をすれば気を失いかねない。晃蔵はそう認識している。そんな酷を強いるくらいなら、頑として茜祢を帰らせればよかったと、届かぬ謝罪を心の中で口にする。何度も何度も。

拷問のような刻の中で茜祢の唇がゆっくりと開くのを、晃蔵はその眼に映した。

「聖森茜祢です。お爺様」

不快を感じさせない程度の微笑みを浮かべて、茜祢は肅然と答えた。茜祢の言葉に蔵清はさらに目を見開き、加えて片眉を僅かに吊り上げる。

「良い友を持ったな。晃蔵」

「……。はい」

晃蔵はその時、蔵清が口にした言葉の真意を、察することが出来なかった。

「2」

その後蔵清は、茜祢に好きなだけ泊まってよいと告げた。そのため晃蔵は、不覚にも蔵清の前で素っ頓狂な声を上げるといふ失態をしでかしてしまい、強烈な拳骨をもらう破目になった。

無事(?)に茜祢を泊める許可を貰えた晃蔵は、着替えをするため自室へと戻った。

「ちくしょー……。痛え……」

痛みを堪えながら手早く着替えを進めてゆく。傍のベッドには茜祢がちよこんと座っている。

「痛いのか？ 大丈夫？」

茜祢はおろおろと困り顔を浮かべ、けれどやさしい声で晃蔵を慰める。そして何か閃いたのか、ポンと手を打つとベッドから飛び降り、トテトテと近寄り晃蔵の前に立った。

「……？ どうした？」

疑問符を浮かべる晃蔵の質問に答えることなく、茜祢は晃蔵の頭に手を置き、小刻みに動かしている。どうやら撫でている……つもりらしい。そして。

「……いたい。いたい……。とんでけーっ！」

「なっ！？」

完全に予想の埒外だった行動を大真面目に実行された晃蔵は、驚きのあまり硬直した。

「晃蔵さま？ どうしたの？ まだ痛い？」

茜祢の言葉によろやく我に返る。

「い……。いや、大丈夫……。大丈夫だ。もう痛くないよ。茜祢のお陰だ。ありがとう」

言葉に詰まりながらもなんとか返し、晃蔵はお返しに茜祢の頭を撫でる。

「えへへー。ばっちり効いたみたいだねっ！」

満足そうにピースサインを作った手をしっかりと伸ばしている。

(……効きすぎ注意……。には気付いてないんだろうな)

晃蔵は穏やかな笑みを浮かべ、部屋のドアを開けた。

「そろそろ下りようか。夕飯だ」

「うんっ！ わーい、ごはんだー。茜祢、おなかぺこぺこだよ」

「俺もだ。さ、行こう」

茜祢の背中を押して行動を促し、晃蔵は部屋を出た。

三人で囲んだ夕食は茜祢のお陰で幾分華やいだ雰囲気にも包まれていた。最初こそ茜祢の振る舞いに懸念を抱いていた晃蔵だが、ほんの数分足らずで杞憂だったと気付かされた。

茜祢は行儀をわきまえつつも適度な会話をはさんでは場を和ませてくれた。

蔵清が口を開くと必ずといっていいほど例の掛け軸の話になるので、茜祢の話が回避材料として利用出来たという一面もある。

ややあつて今は茜祢と一緒に自室で寛いでいるところだ。

泊まるに差し当たり、浮上してきた問題が、そう　お風呂である。晃蔵からしてみれば突然のことで、茜祢は着替えをどうするのかという心配もあったが、ちゃっかり持参していた。

最初からこのつもりだったというしたたかな一面を知り、少なからずの感嘆を覚えた。

仮にも晃蔵は健全な高校生である。女の子がいきなり自分の家に泊まるとなれば色々妄想が膨らむのであろう。

だがそれは多少の緊張はあつても分別をわきまえれば済む話だ。最大の問題は茜祢がとびっきりの笑顔で言い放ったこの一言だった。

「　晃蔵さま！　一緒に入ろっ！」

「~~~~~ツ!？」

声にならない叫びを上げて晃蔵は再び固まった。

(何言つてんだ!？　恥ずかしくないのかこいつは……!？)

さつきから晃蔵は茜祢に驚かされっぱなしである。

「待て。……どうしてそうなるんだ？　わかりやすく説明してくれ腕を引っ張ってくる茜祢を引き剥がして落ち着かせた。」

しかし茜祢は「え？　どーしてえ？」と、一緒に入ることがさも当然とも言いたげな疑問符を頭上に浮かべている。晃蔵は自分が、どうやら茜祢に振り回される宿命にあるのだと悟らざるを得なかった。

「『どーしてえ？』じゃない！理由を説明しろと言っている」
呆れを含んだ催促に茜祢は軽い口調でこう言った。

「茜祢は晃蔵さまを護らないといけないんだよっ。だからいつも傍にいないと　ねっ？」

一応筋は通っている。ただ、その理由を素直に受け容れられるかというのは別問題。

晃蔵は軽い頭痛を覚え、かぶりを振った。

「……ああ、わかった。……よくわかった」

そこで言葉を区切り、茜祢の眼を見て冷静に説得を始めた。

「でもな、茜祢……よく聞けよ？　ここは俺の家だ。ゲン爺もいるし危険が起こる可能性は低いんだ。気持ちだけ貰っておくから、わかったら大人しくひとり入ってきてくれ」

まるで妹に『高校生になったんだからいい加減風呂くらいひとりで入れるだろ』と言いついて聞かせているようである。

もともと本人にとってはそんな軽い話ではない。至って大真面目なのだ。しかし晃蔵の説得も空しく、茜祢は得意の『無言の笑顔』を発動し、鉄壁の防壁を築いている。

先の一件で、茜祢の強情さは嫌というほど思い知らされた晃蔵は、これ以上抵抗する気も湧かず、仕方なく折れることにしたのだ。せめての譲歩案を脳裏に巡らせて……。

「晃蔵さまっ！　頭洗ってあげるよー」

「　いい！　自分で洗えるから湯船に浸かってしっかり温まっていってくれよ」

一方的な論戦の末、晃蔵はある条件で茜祢の要求を呑んだのだ。た。

それが『バスタオル着用』である。しかし茜祢はその条件にさ
れ反論してきた。

だが、晃蔵とて譲るワケにはいかず、なんとか茜祢を納得させる事に成功した……というワケだ。

艶やかな白髪に加えて雪のような肌を真っ白のバスタオルで覆っているその姿は、雪の精霊かと思われてしまうほど可憐であった。一歩間違えれば浴室に赤い花が咲かねない光景に晃蔵は必死で平常心を保ち続けている。

「遠慮しないでいいよー。はい、ここに座ってね」

シャワーの前に椅子を置き、座るよう催促してきた。

早くも主導権は茜祢に握られている。平穩無事にこの場を乗り切るのは夢のまた夢だと心の中で呟く。晃蔵はほとんど操り人形の良く言えば『茜祢のお気に入りのお人形さん』のような気分で見守られた椅子に座った。

「じゃあまずは髪を濡らすよー」

そう言っただけ茜祢は蛇口をひねった。

「おいっ!?!」

その動作に身の危険を感じて制止の声を上げるも、数秒後には怖れていた結末が現実のものとなる。たとえば温度設定を適温に合わせていても、出始めは冷たいものだ。

直後、シャワーから水が噴き出る音が聞こえ

「冷てえー!」

冷水を頭からかぶる破目になった晃蔵は文字通り飛び上がるほど驚いた。

「あ、うっかりしちゃったよー。晃蔵さま、大丈夫?」

言いながら茜祢は晃蔵が目を瞑っている間に温度調節のツマミを力いっぱい回し、その時に?カチツ?という音が響いたが、ほとんどがシャワーの音にかき消された。ほどなくしてお湯に変わり、晃蔵は人心地をつく。安堵の息をついたのも束の間、お湯の温度はぐんぐんと上昇していることに気付いた。

「……………」

言い知れぬ不安を覚え、シャワーの温度設定を確かめる。

(……………そういえばさつき?カチツ?って聞こえたような……………)

温度を視界に認めた晃蔵は我が眼を疑った。設定がセーフティー

を突破して、五〇 まで到達していたのだ。次の瞬間。

「アチャチャ 熱いieeeツ！」

もう踏んだり蹴ったりである。必要以上に熱いお湯を浴びされながらも、なんとか温度設定を適温に戻した。立ち上がって茜祢からシャワーを奪い抗議した。

「なにしてんだよっ!？」

「……………えへっ!」

チロツと舌を出している。

「誤魔化すな！」

「すこんでみたもの、茜祢の悪気のない笑顔に毒気を抜かれてしまった。」

「次は大丈夫だよ。さあ座って座ってー」

何を根拠に言っているのかと問い詰めてやりたくなる気もしないではないが、ここは大人しく堪え、椅子に座る。ふたつの意味でドキドキしながら待っていると、今度はちゃんとしたお湯が降ってきた。

「はい。じゃあまず頭を洗うよー」

茜祢は一旦シャワーを置き、正面に置いてあるシャンプー液を手の平に取った。フルーティな香りが鼻腔をくすぐる。茜祢の小さな両手が頭に触れ、細かく指先を動かしてシャンプーを泡立ててゆく。泡が目に入らないように眼を瞑ると視覚が遮断され、触覚や聴覚、嗅覚が研ぎ澄まされた。おかげであらぬ妄想が増幅されてしまった。

いつもならあつと言う間に終わる作業も、こうして誰かにやってもらうと異様に長く感じる。変に意識してしまっただけ落ち着かない晃蔵の耳に、茜祢の息遣いが頭の上を感じた。

「晃蔵さまっ、気持ちいい？」

「……………ああ」

なんとか平静を装って短く返す。

「えへへー。もっと気持ちよくしてあげるねっ!」

(……ブハッ!? こ、こいつ平然となんつーセリフを……………!?)

不意打ちに等しい無邪気な言葉が後頭部に直撃した。

もはやなんと返していいか分からない茜祢の言葉に、晃蔵は悶えずにはいられない。その後も晃蔵は「茜祢のお気に入りのお人形さん」のごとく扱われ続けた。

お風呂に入っているのにも関わらず、リラックスしているのかすら判らない。

こんな生活が続くようなら、とても心身がもたないなと考えながらも晃蔵は思う。

初めての友達であり、こんなにも気を許せる茜祢を、これからもずっと大切にしたいと。

翌日。

眩しい朝陽を受けて晃蔵は目を覚ました。なぜか体がダルく、激しい眠気が残っている。見慣れた天井が視界に映っている。

ふと気配を感じ、視線を振った瞬間！ 晃蔵はベッドから盛大に転げ落ちた。

「な……なななな　なんで茜祢が俺のベッドに寝てるんだッ!？」

ひとりでパニックに陥りつつも、疑問を口にするのは忘れない。

だが茜祢はすやすやと安らかな寝息を立てて眠っている。深呼吸をして心を落ち着かせ、近くの椅子に腰を下ろす。そして昨日の事を冷静に思い返した。

(……そうだ。別々に寝ようと言っても頑として譲らず、駄々を捏ねられたんだっけ……)

晃蔵の抵抗も空しく茜祢の成すがまま……ひとつのベッドで寝ることになったのだった。

背中を向けてベッドに入ったものの、すぐ傍には茜祢がいるワケで、体温やら息遣いやらシャンプーの匂いなんか容赦なく晃蔵を誘惑したのはいうまでもない。

邪念を振り払うことに必死で、目が冴えたまま明け方まで過ごす破目になった。薄く微笑んで嘆息する。視線を茜祢へと向けると

ある思いが脳裏をよぎった。

(……………こいつの寝顔……………すげえかわいい)

呟いた途端に鼓動が高鳴ったのを感じ、晃蔵は慌てて雑念を振り払った。

「……………んん」

直後、茜祢が上体を起こしてほけーっとする。

「お……………おはよう、茜祢。起きたか？」

「……………うん。……………茜祢起きてるよお……………。くー。……………プリンおかわり」

「……………。ばつちり寝ぼけてんじゃねえか」

一笑に付して晃蔵は立ち上がり、茜祢が寝ぼけている間に手早く着替えを済ませた。

「プリンは……………？」

言葉に意思が籠もりだした。どうやら覚醒し始めたようだ。どうやら本気でプリンを要求しているのだと気付いたがあくまで冗談として対処する。

「ねえよ。それよか茜祢も早く着替えるよ。俺は先に下りてるからここを使うといい」

淡々と喋りながら今日の時間割を見て教科書類をカバンに詰め込んでゆく。

「……………プリン」

再三に渡る要求。表情や声音からは窺い知れないが、滲み出る気配からは鬼気迫るモノが感じられた。ちょっとした身の危険を覚え、真面目に答える。

「あ……………分かった分かった。……………その内買って来てやるから今は我慢しろ」

「わーい。プリン、プリン」

(ふう……………まるで子供だな)

などとは口が裂けても言えぬ晃蔵は内心呟くだけに留め、準備を進めた。

「くー」

「寝るなッ！ 起きろッ！」
思わず鋭いツツコミが入った。

晃蔵は溜息をつく、机の上に置いてある刀　鬼抜刀　を手に取った。柄に触れた箇所はやはり、ある一定以上の熱を帯びている。その熱を受けていると身が引き締まる気がした。晃蔵にとつて鬼抜刀　は　鬼　を抜うという以外、まだまだ未知数の代物でもあるのだ。

しばらく眺めた後、昨日茜祢から受け取った竹刀袋を手に取った。幸い二本入るタイプのモノだった。鬼抜刀　は細身造りなので問題なく収まる。

竹刀を一本取り出し代わりに　鬼抜刀　を収め、これで　鬼憑　き　が出てもち強いと晃蔵は安堵に口角を吊り上げた。

「じゃあ俺は先に下りてるから、茜祢もさっさと着替えて下りて来いよ」

「うんっ！」

ベッドの上にちょこんと座ったまま、茜祢は静かに微笑を返した。茜祢より先に一階へ下りた晃蔵は朝の挨拶を口にしながら食堂へと入った。

「おはようございます」

しかし、蔵清の返事が聞こえてこない。

「おじいちゃん……？」

珍しい事もあるものだと思い辺りを見渡すと、晃蔵は食卓の上に置いてあった書置きを見つけた。

「これは……」

上質そうな便箋に達筆な字で、次のような文面が記されていた。
【晃蔵へ。私はある用事のため家を空ける。しばらく留守を頼む。

蔵清】

「こんな朝早くから？　仕方ない……メシは自分で作るか」

晃敵と茜祢がプリン論議を繰り広げていた頃。

薄暗い茶室に二つの影がある。重苦しい雰囲気の中、神妙な会話が交わされていた。

「あれはお主の目論見か？」

タイミングを見計らい老爺が問うた。

「ふおつふお。いったい何を根拠に申しておるのかのお。妾は関与しておらぬ。アレはあの子が自ら行ったことじゃてのお。」

不敵な笑みを張り付かせて老婆が答えた。

「……。まあよかろう。お主が企んでいるかは知らぬがな」

「そう疑わんでも、何も企んではおらぬてのお。」

「ふん。どうだかな」

冷然とした口調で返す。そこで会話は途切れ、静寂が訪れる。時折、風流な添水の音が爽やかに響く。

「それで」

静寂を破り、老爺が話の口火を切った。

「例の話は検討して頂けたのだろうか？」

「はて？ なんじゃったかのお。年を取るとボケてしまつてのお。」

「しらばくれるな」

「冗談じゃよ。そうかつかするでねえ。其方の命が縮まるぞい」

「戯言は聞き飽きた。さつさと答えろ」

「せつかちじやお。そんなんじゃから彼奴の反感を買つんじや」

「……」

老爺は黙したまま老婆を見据えている。張り詰めた空気が辺りに満ちてゆく。老婆は短く嘆息すると男を睨み返して冷淡に告げた。

「まだ答えは出せぬのお。時期尚早じゃて。暫し待たれよ」

「……。奴が動いているのか？ それとも」

老爺の言葉が言い終わりより早く、老婆が口を開いた。

「妙な勘繰りをするでない。妾はただ、すべきことを行つておるだけじゃてのお。」

「……」

長い沈黙。老爺は次の言葉に思考を巡らしているようだ。再び添水の音が高らかに響き、二人の意識に届いた。

「事と次第に因つては然るべき対応とらせてもらうぞ」

「ふおつふお。何を申しておるのか皆目判らぬが……。好きにしたらええ」

「……食べぬやつだ」

老爺の言葉に老婆はただ不敵な笑みを浮かべて応じた。話し合いの終わりを告げるかのように、部屋の外で添水が涼やかな音を響かせたのだった……。

「3」

晃蔵と茜祢は一緒に朝食を摂り、余裕を持って家を出た。ちゃんと鬼被刀が収められた竹刀袋も忘れずに持つ。

晃蔵は誰かと登校するという念願が叶い、喜びを噛み締めながら茜祢と並んで歩く。至福の時間はあっという間に過ぎ、ほどなくして学校に到着した。校門をくぐった時、茜祢は誰かを見つけたのか、嬉しそうな声を上げた。

「あ！ 刹那ちゃん、おはよー」

晃蔵は、昨日編入したばかりの茜祢が、早くも自分以外の友達を作っている事に少なからず驚きを覚え、その行動力に舌を巻いた。茜祢は晃蔵のもとを離れ、テテテと刹那と呼んだ少女へと駆け寄ってゆく。視線を刹那と呼ばれた少女に向けた瞬間、晃蔵は心臓に氷を当てられたような錯覚を覚えた。

（ ツ！？ あの子は……一昨日、道場に居た……！ ）

それは一昨日の道場にいた異様な気配を感じた深い闇を想起させる少女だった。妖艶な雰囲気か漂う黒髪に漆黒の双眸。茜祢と並ぶと見事なほど対照的である。

晃蔵は茜祢に続き、恐る恐る二人へと歩み寄った。

「刹那ちゃん、おはよー」

もう一度同じ言葉を告げるとようやく少女の方も気付いたらしく、振り向いて返す。

「む。おはよう、茜祢。今日も茜祢は楽しそうだな」

「えへへー。刹那ちゃんも毎日楽しいよね？」

茜祢は根拠が不明の同意を向けた。すると少女　刹那は一瞬不思議そうな表情を浮かべ、少し間を置いて、

「……ああ、楽しいぞ。私と茜祢は友達なのだからな」

「うんっ！　そうだね」

微妙に答えになっていないような会話が交わされた。しかし、どちらも納得しているようなので、晃蔵は敢えて口を出すような真似はしなかった。そこで刹那は晃蔵の存在に気付き感情のない声を零した。

晃蔵は刹那にブラックホールのような瞳で見つめられ、言葉を紡ぐことがままならない。どうしたものと戸惑っていると茜祢が緊張感ゼロの口調で切り出した。

「あ！　刹那ちゃん。紹介するね。この人は晃蔵さま　茜祢の友達。だから刹那ちゃんとも友達だよっ！　みんな仲良くしようね」
そう言っつて茜祢は晃蔵と刹那の右手を取って握手を促した。

「梅原晃蔵です。えっと……よ、よろしくおねがいます」

手短に済ませようとしたが、刹那の気迫に負けて敬語へと発展した。

「闇倉刹那だ……。……。よろしく。晃蔵」

「~~~~~ツ！」

刹那の応答に晃蔵は言い知れぬ敗北感を突きつけられた。なぜなら挨拶の言葉を？　よろしく？　と縮められた挙句？　晃蔵？　と呼び捨てを食らったのだ。晃蔵の思いも分からなくもないだろう。だからといって別に訂正を求める気もない。表面上は穏やかに微笑んで握手を交わした。

「どうした？　晃蔵……。顔が怖いぞ」

「なっ！？」

思ったことを正直に口にする刹那に対し、つい顔が引き攣った。下手すればこめかみに青筋が立つほどだ。でも晃蔵は堪えた。その

ワケは、雰囲気こそ他者を圧する気配を漂わせている刹那だが、茜
祢と同じく 闇 を持たないということ。それが晃蔵にとって唯一
安心出来る判断基準なのだ。今は突っ慳貪だが、関わってゆく内に
打ち解けてくれるだろうと思うことにしたのだった。

「ご指摘アリガトウ。努力するよ」

それでも皮肉を籠めて反撃しておくことだけは忘れない。

「わー 刹那ちゃんと晃蔵さまって凄く仲良しだねっ！ 茜祢嬉
しいなー」

能気な声が上がった事で八割方ギクシャクした自己紹介は終了
となった……と思った矢先、再び間の抜けた声が上がった。

「 そうだ！ こうしてみんなと友達になれたことを記念して、
今度三人お揃いのアクセサリーを作ってくるよー わーい、決定
」

自分で提案したことを自身が承諾すれば……なるほど、世話が掛
からないなと晃蔵は心の中で微笑んだ。

ふと視線を刹那に向けるとさり気なくピースサインを作ってい
た。どうやら賛成の意思表示のようだ。それから三人はようやく歩
き始め、校舎に入った辺りで茜祢が素朴な質問を口にした。

「そう言えばさあ、茜祢はAなんだけどー、刹那ちゃんは？」

「……B」

人懐っこい笑顔で話す茜祢に対し、刹那は感情が欠落したような
表情をしている。見た目もさることながら性格まで対照的だなと晃
蔵は思った。そこでふと今の会話に疑問を覚えた。

(……A？ B？ ……何の話だ？ ああ……胸か！ それなら納
得だ)

チラッと二人の胸元を一瞥する。

晃蔵が？確かに茜祢より刹那の方が、若干膨らみが大きいよう
に見える？などと内心で思っている……。

「……晃蔵……えっち」

刹那に非難される破目になった。周りに生徒がいなかったのがせ

めてもの救いだ。恐るべき読心術の持ち主である。

「な……なな 何を言つてやがる!? 誤解だ、誤解! お前は
エスパーか何かなのか!？」

「……違う。刹那だ」

「……は？」

微妙に会話が噛み合っていない事に気付き、疑問の声を上げた。

「……? 友達? を? お前? と呼んではダメ。……私は刹那だ」

「ああ……そういうことか。悪い」

結局、晃蔵の反論は有耶無耶にされた気がしたが、蒸し返されても不利なだけなのでそのまま消滅させることにして、刹那の前で邪な考えは自重しようと心に誓ったのだった。

「そっかあ……ざんねーん。刹那ちゃんは隣のクラスなんだね」

「……そうだ」

「……隣? ああ」

クラスの話だったのか! と晃蔵はひとり得心した。同時に茜祢の意図を読み取った刹那に感心した。

「……晃蔵。……ばか……?」

「ぐっ……このっ……!」

完全に見透かされている。晃蔵は込み上げる衝動を必死に堪えた。ややあつて先に晃蔵のクラスに着いた。

「茜祢たちはこっちだよっ! また休憩時間にお話しようね、刹那ちゃん」

「……ああ、一日千秋の思いで待つてるから」

(んな大袈裟な……。そもそも意味判つて言つてんのか……?)

思考を見透かされている事を早くも失念していた晃蔵は不用意にもそんなセリフを呟いた。すると。

「……一日会わないと何年も会わないように思う意で……」

意味を淡々と喋り出したので慌てて止めに入る。

「だあーっ! わかった、わかった 俺が悪かった」

「晃蔵さまは悪者だったの? 逮捕されるの?」

「違うぞ茜祢……。俺は悪くない」

「……。 恋い慕う気持ちや待ち望む気持ちが……」

「わわわーっ！俺が悪かった！」

などと、傍から三人の様子を窺っていた生徒は、珍妙なコントでも始まったのかと、物珍しそうな視線を向けていた。

結局、晃蔵が全面的に非を認めたことによりようやく解放された。

その後「晃蔵さまは悪者だから茜祢が逮捕してあげるよー」と誤解を招きそうな言葉を口にする茜祢を説得するのに、しばらく時間を要し、朝っぱらからくたびれた晃蔵だった。

一日遅れでクラスに顔を見せた茜祢が紹介されるや否や、クラスの男達から雄叫びが上がった。その直後に茜祢が晃蔵に思慮無く声を掛けるものだから、今まで以上に厳しい視線と男共の羨望に晒されることになってしまった。それでもなんとか授業をこなし、昼休みに辿り着いた。

「晃蔵さまっ！お昼ごはんだよ！」

「ちょ……バツ」

二人だけの時ならまだしも、学校でその呼称はマズいと言ってやりたい晃蔵だが、茜祢を説得する事など未来永劫不可能だということに思い至り、逃げるように教室を後にした。

「どうしたの？ 晃蔵さま？」

廊下に出たところで尋ねられたが、敢えて説明せずに言葉を濁すに留める。

「それより、刹那も誘うんだろ？ 待つてるから呼んできなよ」

「あっ、そうだねっ じゃあ待っててね。すぐ呼んでくるよー」

言うのが早く茜祢は隣のB組へ入って行く。気持ちを落ち着かせる間もなく、刹那を連れて出てきた。三人は連れ立ち、学食を目指して歩き始めた。

「うわっ……やっぱり混んでやがる」

学食に着くと、晃蔵は開口一番に億劫そうな声を上げた。その背

後には茜祢と刹那がお喋りに夢中になっており、目の前の状況に驚く素振りすら見せない。漂ってくる雰囲気はどこか他人事である。

「……仕方ない、パンにするか。二人もそれでいいか？」

振り返って同意を求める。

「あ！ うん、茜祢はそれでいいよー」

「……いい」

ホント、対照的な二人だなと思い、自然と笑みが零れた。刹那に勘付かれる前にその場を離れようと、二人に一言告げてから晃蔵は人混みを掻き分け、三人分のパンを入手すべく突っ込んで行く。

苦労してようやく、前線まで出てきた晃蔵の目に、驚くべき光景が飛び込んできた。なんと商品台には早くも残り数個のパンしかない状況になっていたのだ。あれよあれよという間にパンがどんどん消えてゆく。

懸命に手を伸ばすが、押し合い圧し合いされなかなか掴み取れない。そうこうしている間に無情にもパンは全て売り切れてしまった。当然、収穫はゼロである。

「……嘘だろーっ!？」

悔し紛れに叫んでみるものの、言い難い空しさは晴れることは無い。このままでは昼飯抜きだ。しかも三人揃って。

茜祢はともかく刹那の報復が晃蔵には恐ろしく思えた。……いや、茜祢もあれで食い物にはうるさい気もしてきたので、結局どっちもどっちだと晃蔵は考えを改める。手ぶらで戻るワケにもいかず、途方に暮れていると、不意に声を掛けられた。

「あ！ 昨日の！ ……えーと ごめんなさい、名前知りませんでした」

晃蔵は藁にも縋る思いで振り向くと、そこには紙袋を手にした男子生徒が佇んでいた。

「……お前は昨日の……」

そこで言葉に詰まる。晃蔵もメガネくんの名前を知らないのだ。

「梅原だ。どうした？ また先輩にいじめられているのか？」

自分の名前は告げても、メガネくんの名前は聞こうとはしない。
「ううん。そうじゃないよ。聞いて驚かないね　先輩が元に戻ったんだ！」

「！……そうか。それは良かったな」

心からの喜びを露わにするメガネくんの表情に、思わず感嘆と共に安堵の溜息を零す。どうやら昨日の　鬼憑き　先輩は元々不良ではなく、真面目な先輩だったのだと、メガネくんはテンションを上昇させて饒舌に語ってくれた。その言葉に晃蔵は言い知れぬ充実感に満たされていた。鬼憑き　に對抗できる力　『鬼抜い』の末、鬼憑き　でなくなつた人間は元に戻るという事実。それこそ晃蔵が『鬼抜い』の道を歩む事を決意した最大の理由だ。

人一倍に人の事が好きな者　それが晃蔵という存在なのである。

今はただ　闇　が見えてしまう所為で、思うように接することができないだけ。自分の初仕事に対する実感を噛み締め、晃蔵はこれからも　鬼憑き　から沢山の人を救おうと決意を新たにした。

晃蔵の表情から何かを感じ取つたのか、メガネくんがおもむろに口を開く。

「やっぱり先輩の事を信じる事にしたよ。……もしかして先輩が元に戻つたのは、梅原くんと何か関係があるんじゃない？」

意外と鋭いメガネくんの言葉に、晃蔵は表情を引き攣らせたが、すぐに冷静さを取り戻し事も無げに告げる。「

「……先輩が元に戻つた事と俺は関係ない。きつとお前の信じる想いが彼に伝わつたんだらうよ」

そう言つて晃蔵は真実を闇へと葬り去つた。なぜなら、『鬼抜い』ひいては　鬼　に関する情報は極力一般人に知らせるものではない。それが晃蔵の師である蔵清の教えだからである。

メガネくんは晃蔵が即興で口にした理由に「そうなんだ」と微笑んで呟く。どこか納得仕切れていない様な表情に、晃蔵は心を痛ませる。少し悪い気もしたが、彼がそう思うことで別段不都合がある

ワケでもないので割り切る事にした。

「それはそうと。今、何か叫んでいたみたいですけど、何かマズイことでもあったんですか？」

メガネくんは人当たりの良さそうな笑顔で尋ねる。晃蔵は正直に話すかどうか逡巡したが、一縷の望みに懸けて打ち明けた。

「……ああ。実は昼飯を買いそびれてな。それでちよつと困ってたんだ」

晃蔵の言葉にメガネくんは意気揚々とした面持ちで言葉を継いだ。
「あ、それなら」

そう言つとメガネくんは手にしていた紙袋を晃蔵に差し出してきた。

「ん？ なんだこれは？」

不思議そうな眼差しでメガネくんと紙袋を交互に見つめる。するとメガネくんは爽やかに笑つたまま、

「たとえ梅原さんが先輩の一件と関係ないとしても……それでも僕には梅原さんのお陰のような気がするんです。だからこれはそ

のお礼です。僕が勝手に恩を感じているだけですから、遠慮なく貰つてください」

「……………」

晃蔵は何となくこのメガネくんにも、心の内を見透かされているのではないかという、言い知れぬ不安を覚えた。

(……もしかして俺って他人に悟られやすいのか？ そんな馬鹿な) 払拭出来ない思いをとりあえず抑え、紙袋の中身を拝見すると同時に温かな香ばしい匂いが鼻腔をくすぐる。紙袋には様々な種類のパンが収められていた。それも菓子パンや惣菜パンなどではない、最上級たるパン屋さんのパンである。

「……いいのか？ 随分たくさん入っているけど……」
さすがにほいほいと受け取ることが出来ないのか、少し躊躇いがちに確認する。

「もちろんですよ。ぜひ貰ってください。ついさっき、近くのパン

屋さんで買ってきた出来立てホカホカの絶品ですから！ 味は折紙付きですよ！」

善意全開の言葉にさすがの晃蔵も驚きを露わにした。闇人も一概に邪険にはできないなど。だから晃蔵は素直にメガネくんの好意を受け取ることにした。

「悪いな。有難く貰っておく」

「うん。冷めないうちに食べてね。それじゃ、僕は行くね」

「あ」

思わず晃蔵はメガネくんを呼び止めた。

「なに？」

学食を後にしようとしていたメガネくんは振り返り、晃蔵の言葉を待っている。果たして自分は何を言いたくて呼び止めたのか……次第に晃蔵の思考が混乱し始めた。メガネくんが訝り出した頃、晃蔵はようやく口を開いた。

「お前……名前は？」

名前など聞いてどうするというのが。しかし今はそれ以上の考えが浮かばないので仕方なかった。

「篠眼鏡だよ。難しい方の？ 篠？ に方眼用紙の？ 眼？ に手鏡の？ 鏡？ で 篠眼鏡だよ。もし良かったら近いうちに一緒に遊ぼうよ

！ それじゃ、またね！」

そう答えて踵を返した。温かな紙袋を抱えたまま、晃蔵はひとりごちる。

「一緒に遊ぶ か」

数拍の間を置いて、茜祢と刹那を待たせていることに気付き、晃蔵も学食を後にしたのだった。毎回昼食にありつくただけで、こんなにも苦勞するのなら、明日からは弁当でも作ってくるかという思案を巡らしながら……。

「わあ~~~~」

「このパンおいしいよあ~~~~」

「……美味しい」

無事(?)に昼飯を手に入れた晃蔵は、茜祢、刹那と共にホーム棟の屋上でやや遅れた昼食を摂っていた。昼休みだけは開放されている屋上には、お昼を摂ったりして自由気儘に過ごす生徒達で賑わっている。

「！ 晃蔵さま、あれはなにー？」

不意に茜祢が何かを見つけ、指差して疑問の声をあげた。晃蔵は茜祢の指先を辿って視線を向けて見たが、特に気になるものは見当たらない。あるのは生徒達が弁当を広げて楽しそうに駄弁っていたり、日向ぼっこを楽しんでいる生徒が大口を開けて爆睡していたりする程度なのだが……。

「……どれ？」

気の抜けた声で訊き返す。それでも茜祢は特定の方向を指差し続けている。晃蔵は我慢強く茜祢の意図を察することに集中した。丁寧に指を辿った先には、弁当を食べながら駄弁っているグループが確認出来た。僅かによぎった可能性を信じて尋ねてみる。

「……もしかして弁当 ああ、ちっちゃい箱に入ったごはんのことか？」

「うんっ！ そう、それだよー」

茜祢は楽しそうな雰囲気の中で目を爛々と輝かせている。どうやら楽しそうな雰囲気の中に心を惹かれたらしい。それより、弁当も知らないなんてと、晃蔵は軽い眩暈を覚えた。

「あれは『弁当』だ。予め家で作ってくるごはんんだけど。知らなかったのか？ 茜祢」

「茜祢、弁当食べたい！ 晃蔵さまと刹那ちゃんと三人で食べるのー」

問い掛けは綺麗にスルーされ、自身の意見を主張している。

「……弁当……食べたい」

刹那もさり気なく主張している。斯くいう晃蔵も、先ほど『昼食弁当案』を検討していたので、茜祢の要望に応じてやるのも悪くないなという結論を出した。

「 そうだな。明日からは弁当にするか? 」

「 うんっ! 茜祢がみんなのお弁当作ってあげるねっ 」

「 お? なんだ茜祢、料理できるのか? そりゃ意外だな 」

昼飯が弁当となれば、つい自分が作るのだからうとばかり考えていた晃蔵は、素直に感心の声を上げた……のだが……。

「 りょうり? 」

またしても茜祢の口から疑問符が飛び出した。よくよく考えてみれば今日の朝食だって晃蔵が作ったのだった。もしかすると茜祢には『ごはんは自動的に用意されるもの』と知っている節があるのかも知れない。

しかし、「茜祢が作ってあげる」と言った以上、? 作るモノ? だというのは知ってはいるようだ。

茜祢に振り回されながら弁当を作る光景が容易に想像出来た晃蔵は、再び眩暈を覚え、小さく溜息をつく。晃蔵は茜祢や刹那と一緒に居る時間を大切にしたいと思う反面、苦労は当分の間絶えそうにないことを覚悟したのだった。

「 はあ…… やつと終わった 」

六限目終了のチャイムが高らかと鳴り響き、教室に弛緩した空気が瞬時に広がった。クラスメイトたちはそれぞれの時間を過ごし始めている。

「 さとと…… 」

呟いて席を立ち、カバンと竹刀袋を持つと茜祢の席へと移動した。「茜祢。俺はこれから部活があるから、終わってから買い物に行くって事でいいか? 」

昼休みに屋上で、茜祢が明日から三人分の弁当を作ると宣言したので、その食材の買い出しである。

もしかすると茜祢は今日、自分の家へ帰るのかと、期待と未練が入り混じった考えが浮かばなくもなかったが、「明日は早起きしようねっ! 」という一言で物の見事に粉碎。どのくらい早く起きる

破目になるのかと早くも頭を抱えている。

「うんっ！ いいよー　じゃあ茜祢は刹那ちゃんとお話してもして待ってるようー」

刹那の意向はどこにいったのか、茜祢の中では既に満場一致で可決という気儘さに、晃蔵は刹那に少なからずの同情を覚えた。

「そうか、悪いな。じゃあちよつと待っててくれ。じゃあまた後でな」

「うんっ！　がんばってきてねー」

気が緩みそうな励ましの声を背に受けて、晃蔵は道場へと向かって行った。

そして茜祢も刹那を捕獲すべく、カバンを手に教室を後にした。道場に向かう手前で、晃蔵はロン毛とボウズの姿を視界に捉えた。その後ろには昨日、カネを巻き上げられていた男子生徒が、蒼褪めた表情で二人に続いている。彼等が何をしようとしているのか、晃蔵はすぐに思い至った。

(……くだらねえ事で　闇　を広げやがって……。ここは見過ごすワケにはいかないな)

内心で毒づいてロン毛たちの後を追った。

すでに予備倉庫裏を狩場と定めたのか、ロン毛たちは迷いなく狩場へと男子生徒を引き込んだ。晃蔵も続いて倉庫へ近付き、物陰から様子を窺う。

間もなくして予想通り、ロン毛たちはカネを出せと男子生徒を脅し始めた。そこで晃蔵が動く。

「くだらねえことしてんじゃねえよ」

「誰だてめえ！　こいつのダチかよ？」

誰かが来ることなど想定外だったのか、二人とも驚きを露わに、威圧的な態度で晃蔵を睨め付ける。

「……。そんな事すると退学になるんじゃないのか？　もうすぐ教師が来るぜ」

晃蔵はロン毛の言葉に答えなければかりか、平然とハツタリを口に

する。教師が来る根拠など何ひとつ有りはしない。その辺は厳清譲りの毅然とした物腰が窺える。

ロン毛とボウズは晃蔵の言葉に気圧されたのか、男子生徒から力ネを巻き上げる事無くそそくさと立ち去っていった。二人だけになった倉庫裏でしばし微妙な沈黙が続く、男子生徒はお礼の一つも口する事無く晃蔵の横を通り過ぎる。

「……所詮は 闇人 か……」

逃げるように走り去ってゆく男子生徒の後姿を見詰めながら、晃蔵はひとりごちた。

晃蔵が遅れて道場に入った瞬間、強烈な吐き気を覚えるような異様な空気が充満していた。思わず表情が険しくなる。

（ 鬼憑きの気配だど!? 一体どうなってやがる……ッ! ? ）

自然と手に汗が滲み、竹刀袋を力強く握り締める。直後、主将の怒号が場内に響き渡った。

「ウラアッ! お前ら全員、その根性叩きなおしてやる!」

（ 奴は確か……一昨日、刹那に負けた主将だったか。しかし、一昨日は異変なんてなかったのに……どうして……? ）

様々な疑問が脳裏を過ぎってゆくが、それ以上の思考を主将は許さなかつた。

「 オイ! そのお前! さっさと並べやア! 」

ドスの利いた声で一喝され、他の部員に倣い大人しく整列するこ
とにした。

並ぶや否や主将は竹刀を叩きつけて凄むと、端から順に竹刀を一閃させて部員を気絶させてゆく。目を覆いたくなるような凄惨たる光景が眼前で繰り広げられた。

「 弱い なんたる弱さだ。この程度では我の復讐は成し得ぬ! 」

それはもはや、文字通り悪鬼の形相……。晃蔵は無意識に気を引き締めた。

「お前で最後だ。……どうした、我が恐ろしいか？　だが逃げ出すのは無駄だと忠告しておいてやる。この空間は既に我の意のまま出入りは不可能だ。無論こちらからの声も届かない。たとえお前がどんなに泣き叫ぼうともなア　　ッ！」

愉悦に歪んだ相貌で恫喝する。

「へっそうかい。それじゃあ遠慮なく戦れるな。貴様は俺が被つてやる！」

裂帛の気合いで返し、晃蔵は竹刀袋から 鬼抜刀 を取り出した。

「……それは……。　お前、まさか！？」

一瞬、 鬼憑き　　主将がたじろいだ。

「ああ。ご察しの通り俺は『鬼抜い』だ！　悪いけどそいつは返してもらうぜ。此の世に貴様ら 鬼憑き を野放しにしておくワケにはいかねえンでな。せめて彼の世に戻るのを手伝ってやるぜ！」

「ほざくな、ザコが！」

「どつちが本当のザコか　　思い知らせてやるよ。　来いッ！」

晃蔵は主将をその双眸でしかと見据え、 鬼抜刀 を一挙動で抜き放つ。すると？熱？が手の平から腕を伝い、全身へと広がる感覚があった。まるで 鬼抜刀 自体が右腕の延長であるかのような一体感。初めて使うというのにまるで長年使い込んでいるみたいに手に馴染んだ。右手に意識を集中させ、力を解放してゆく。

昨日とは異なり、右手に宿った力は 鬼抜刀 を伝い、刀身を紅く染め上げる。それはエネルギーの注ぎ込みだ。肉体への負担は極力軽減される。いわば前回は燃え盛る炎の塊を素手で扱っていたのに対し、今回は火炎放射器を手に行っているようなもの。その差は歴然だろう。

晃蔵は気絶している部員に被害が及ばぬよう配慮し、空いているスペースへと跳んだ。同時に主将も身を翻し追走。改めて二人は互いに睨み合い、対峙する形となる。

「　　我は負けぬッ！　　我は強いッ！　　故に負けたりせぬッ！」
痛嘆に塗り固められた執念の叫びに空気が震えている。

一体この学校のどこに、これ程までの 鬼憑き を生み出す要因があるというのか。『鬼被い』の任を受けてまだ日が浅い晃蔵には、到底判り得ぬ問題である。とにかく今は、目の前の 鬼憑きを被うことに全神経を集中させ、感覚を研ぎ澄ませた。

「誰かに負けた意識　それが貴様の『罪』か？」

晃蔵の問いは、しかし主将の叫びによってかき消される。

「五月蠅いッ！　お前を倒して俺はさらなる力を得る　ッ！」

「なっ!?!」

直後の疾走。巨体には似合わないほど俊敏な動きで床板を蹴り、晃蔵の眼前へと肉薄した。流れるような動作で竹刀を足首目掛けて一閃させる。

「くっ……!!」

咄嗟に 鬼被刀 で切り返し、竹刀を両断することに成功。一度間合いを取り、間髪容れずに薙ぎ払った。直撃を喰らった主将は、道場の端まで吹き飛び盛大に転がる。

「……ククク」

すぐに不気味な嗤い声が場内に響き渡った。主将は平然と立ち上がり二、三度首を回す。右手には刀が握られていた。恐らく道場に飾っていた模造刀だろうと晃蔵は推測した。

「まさか本気で斬りかかって来るとは……。お前、?こいつ?を殺す気か？」

「心配するな。こいつは生身の人間は斬れない。斬れるのは 鬼憑き　貴様等だけだ！」

「なるほどナア。そういうカラクリか　ッ！」

言い終えると同時の疾走。その速力は先の倍　あるいはそれ以上だ。視界に姿を捉えることは叶わず、威圧的な気配だけが四方八方から晃蔵に突き刺さる。晃蔵は動かない。

静かに耳を澄まし、主将の気配を探る。ヒリつくような空気の中、鬼被刀 を握る手に冷や汗が滲む。

この戦いは些細な油断がそのまま死に直結する。晃蔵は今、危

機能的状況に於かれた中でその事を重々理解していた。目を瞑り、呼吸を整える。右手に握っている 鬼抜刀 が心強い熱さを発し、僅かに鼓動すら感じられた。

「ッ！」

ほとんど何の前触れもなく、突如として晃敵の右側面に出現した主将は模造刀を微塵の躊躇無く煌かせた。

金属と金属がぶつかり合い、甲高い音が響く。体重を巧みに操り晃敵の刀を捌くと、息もつかせない連撃を浴びせかけている。反撃の余地すらない主将の猛攻に、防戦一方の晃敵。やがて、躲し切れなかった一撃が右袈裟に一閃し、晃敵の体に赤い線が走った。

「なっ………につ!？」

模造刀だとばかり思っていた主将の刀は しかし、鋭い切れ味をまざまざと見せ付ける結果となった。

今し方懸念していた？些細な油断？がまさにそれである。

己の不甲斐なさに歯噛みして主将を睨め付ける。制服は無惨にも切り裂かれ、肌が露わになっている。不可解な攻撃を受け、晃敵は間合いを取ろうと機を窺うが、主将の気迫がそれを許さない。

「ククク 浅い考えを持っていたようだな。強さを求める我が望めば万物一切が刃と化するのだ。もっとも………これから死に逝く者に言っても仕方ないことだがな」

饒舌に語りながらも攻撃の手は、緩むどころかますます苛烈さを増している。晃敵の体が見るみる朱に染まってゆく。

「………なぜ………認めない？」

限りなく体力を奪われ、意識が朦朧とする中で、晃敵は主将に問うた。

「………なん………だと？」

晃敵は依然として攻撃を続けたまま、口だけで質問に答え、ほぼ気力だけで主将の攻撃を捌く。半分以上が防御を抜けて鮮血をしぶかせた。 鬼抜刀 の刀身が銀色に戻りつつある。

「貴様は………ごく最近に負けを味わった。その相手の強さを、自分

の中で認める事が出来ずに……妬んだ。歪んだ感情で……本心を隠して。ぐあつ……ッ！」

左腕に焼け付くような痛みが走った。主将が放った刺突が晃蔵の二の腕を貫いた衝撃だった。激痛に呻き声上がる。

揺ぎ無い勝利を確信したのか、主将の攻撃は先ほどから、弱者を弄ぶように陰湿なものになっていた。荒い呼吸をはきながら、晃蔵はなおも言葉を継いだ。

「貴様は見落としているんだ。本当に強い存在になりたいのなら……相手の事を自分自身が認めないと……いつまで経っても成長できない……！」

「だ、黙れッ！ 我は……グぬおおおオオー……ッ！」

（！ まだ主将の意思は残っている！）

この状況を打開出来る可能性を見出し、主将が苦しんでいる隙に晃蔵は 鬼抜刀 に力を籠め直した。要領は昨日と同じ。力を 鬼抜刀 へと注ぎ込むたびに体中が軋み悲鳴を上げた。

だがこのチャンスを逃したら後はない ありったけの気力を振り絞って力を注ぎ込んでゆく。銀色に戻りつつあった刀身が再び紅に染まった 力が戻った証拠だ！

（間に合った！）

晃蔵は 鬼抜刀 を目線の高さで構えると主将の心臓を狙い澄まして刺突を繰り出した。

放たれた一閃は吸い込まれるように主将の心臓に突き刺さり、空間にゆがみが生じた。淀みのない動作で 鬼抜刀 を引き抜くと、即座に両断の構えを取る。

「貴様は主将の誇りまでは染めることが出来なかった！」
眼前で揺らぐ空間を見据えて言葉を叩きつける。

「これで終わりだ！」

リ イン

一閃した瞬間、鈴の音のような爽涼とした音が場内に響いて溶け消えた。それは『鬼抜い』が完了した合図。

「『鬼抜い』 完了」

その言葉と同時に晃蔵は緊張の糸が切れたのか、そのまま前の方に倒れた。

薄れゆく意識の中で二つの気配を感じた気がしたが、もはや目を開くことすらままならない。晃蔵の意識は深い微睡みへと沈んでいった……。

晃蔵が教室を後にしてから二時間近くが経過し、下校時刻が近付き始めた頃。茜祢は刹那と他愛ないお喋りをして盛り上がっていた。

「ふむふむ。玉子焼きは定番なんだねー。ほかにはタコさんウインナーとミートボールと唐揚げとグラタンとプチトマトにお野菜とフルーツも欲しいよね。ごはんをおにぎりにすれば色んな味が楽しめるんだあ。サンドイッチもおいしそうだね、刹那ちゃん」
「……うん。サンドイッチ食べたい」

茜祢は図書室から借りてきた『お弁当入門』愛情こそ最高の調味料編』にせわしく視線を走らせながら、満面の笑顔で早口に捲くし立てている。

二人で弁当について話す内に距離が縮まったのか、刹那の返事が若干丸くなっているような気がしないでもない。盛り上がっているところに水を差すように下校を促すチャイムが鳴り響いた。

「じゃあそろそろ晃蔵さまを迎えにいこっか」
「……うん。行く」

料理書を閉じてカバンに収めると二人は教室を後にした。

真っ直ぐ道場へと向かい、五分と掛からずに道場へとやってきた。

「……………」
入口の手前で刹那は道場を見上げ、何かを確かめる仕草をしている。

「? どうしたの、刹那ちゃん」

それに気付いた茜祢が声を掛けた。

「……ううん、なんでもない。ただ……」

「ただ？」

「……においがした　　ような気がしただけ」

「におい……？」

言葉を受けて茜祢は周囲のにおいをかぐ。するとすぐに感嘆の声を上げ、

「　　ごはんのおいだねっ！　　茜祢もおなかすいたよぉー」

「……うん」

刹那は反論したそうな面持ちで口を噤み、短く同意を示した。

「晃蔵さまと一緒に早く買物にいかなきゃだねっ！」

とても楽しみだという気持ちを包み隠すことなく、茜祢は引き戸を開け放った。

「　　晃蔵さまー。迎えにきたよー」

にこやかに微笑み快活に呼びかけた。だが、次の瞬間　　茜祢の周囲に漂う空気が音を立てて凍りついた。続いて場内に視線を向けた刹那も驚きに眼を瞪る。その変化はあつてないようなのだが……。

「　　晃蔵さまっ！？　　どうしたの？　　傷だらけだよぉー……！」

慌てて駆け寄り、体を朱に染めて倒れている晃蔵を抱き起こす。

茜祢の後に続き、刹那も歩み寄った。

「……」

刹那は晃蔵の傍に落ちている刀　　鬼抜刀　　を見つめている。

奇妙な文字が記された布が柄に巻かれた一振り。刀身は冷めゆく鉄のごとくほのかに赤みを帯びている。何も喋ることなく、めずらしいおもちゃを見つけた子供のように……刹那は　　鬼抜刀　　から視線を外さない。

「晃蔵さまっ！　　すぐに保健室へ連れてってあげるから……それまでがんばってね」

茜祢には珍しく、動揺を露わに取り乱している。やがて刹那は

鬼被刀 から視線を外し、近くに落ちていた竹刀袋に 鬼被刀 を収めた。

そして茜祢へと一歩近寄り、

「……手伝っ」

「ありがとう、刹那ちゃん」

茜祢はその好意を素直に頼り、二人で晃蔵を運ぶことにした。とその時。

「うっつ……。俺は一体何を……？ ……キミは！？」

それまで倒れていた主将が目を覚まし、刹那を視界に映した瞬間、驚きに目を見開く。

しかし、なにか後ろめたいものがあるのか、言葉を継ぐことなく周囲を見渡した。そこで主将は再び驚愕することになる。

「これは一体誰が……？ 梅原！？ 酷い怪我じゃないか！ どうしてこんな事に……！？」

一向に把握できない状況にただただ混乱して齒噛みする。

「あ のっ！」

不意に茜祢が一際高い声を上げた。主将の顔が向けられる。

「晃蔵さまは茜祢たちがなんとかします。……だから……その……」

言い渋る茜祢の意図を察したような表情を浮かべて言葉を重ねてきた。

「ああ、ここの後始末だな。どうしてこんな事になってしまったのか俺にはさっぱりだが安心してくれ。ここは俺が片付けておく。部員達にも上手くはぐらかしておくよ。だから梅原のこと頼んだぜ」

「あ……はいっ！ あ……ありがとうございます」

ぺこつと頭を下げた茜祢に主将は微笑で応えた。一度虚空を仰ぎ、なにか吹っ切れたような表情を浮かべると刹那を見据えた。

「どうしてかな……。今、不思議とキミの強さを自分の中で認める気になれたよ。……キミに負けた時に気付けたはずなのに……」

後半から、どこかバツが悪そうに俯きながら語りかけている。

「……………」

刹那は何も答えない。その表情には感情すら読み取れないほどだ。主将は刹那を一瞥してすぐ俯き、右手を強く握り締めた。そして、意を決したように顔を上げ、毅然とした口調で心の内を打ち明けた。「またいつか、俺と手合わせ願いたい！俺はもつと精進して強くなるっ！約束する。だから頼むっ！」

深々と頭を下げて懇願する。主将ほどの巨躯でそれをやられると形容し難い迫力があるものだ。だが刹那は涼しげな表情のまま主将を見つめていた。そして刹那は、

「……………頼まれた」

と短く返した。

「有難いつ！」

ハツラツとした笑顔で礼を述べ、主将は二カツと白い歯を覗かせた。

「さあ、ここは俺に任せてキミたちは梅原の手当てを」

「はいっ！」

「……………任せた」

主将に見送られ、二人は傷だらけの晃蔵を抱え、保健室へと急いだ。

独りになった場内で主将は静かに天井を見上げた。心に冷涼な風が吹き抜けているような心地よさを感じながら……………。

そして荒れ果てた道場を片付けるべく、作業を開始した。それは早くも二人目。晃蔵の『鬼抜い』によって命を救われた者の姿であった。

「……………ッ！」

心から心配しているような声を耳にして、晃蔵は意識を取り戻した。ゆっくりと目を開ける。

そこには見慣れた天井。ではなく、必死に名前を呼び続ける茜祢の……………涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔があった。

「晃敵さまっ！ 気がついたあーっ！」

晃敵が目覚めた事に気付くや否や、一層涙を溢れさせ胸に顔を埋めてきた。

「……起きた？」

顔を横に向けるとパイプ椅子に座って冷静にリンゴを剥いている刹那が居た。

物言いは相変わらず無愛想だが、リンゴを剥いてくれている辺り甲斐甲斐しいところもあるじゃないか と心の内で刹那の評価を上げた 次の瞬間。

「……おいしい」

「なッ!？」

なんと、剥いた端から刹那の口に消えてゆくではないか……。晃敵は我が目を疑うと同時に、ようやく上昇した刹那の株が一気に急降下を開始した。

それが刹那らしいと思えばらしいので、晃敵の心にはもどかしさだけが募ることとなった。リンゴは諦めて胸の中で泣きじゃくっている茜祢へと視線を戻した。

「……茜祢、すまない。また運んでくれたんだな」

囁きのような問いに茜祢は胸に埋めた顔を左右に動かし、くぐもった小声を返した。

「……ううん。なんてないよ。刹那ちゃんも手伝ってくれたし」

「刹那が？」

意外な一言に思わず刹那へと顔を向ける。

「ッ!」

丁度眼前にリンゴが突きつけられており、晃敵は不意打ちを食らう形となった。驚きのあまり、大口を開けて振り向きでもしていたら、そのまま口に入っていたに違いない……。

「……食べる？」

「……ああ……貰うよ。ありがとう、刹那」

刹那の行動は予想の範疇を超えており突拍子がない。そんな戸惑

いを感じながら晃蔵はリンゴを受け取るうとした。

「……………」

しかし、いつまで経ってもリンゴが手に乗せてもらえる気配がない。訝つて口を開こうとした途端、

「……………あーん」

抑揚のない言葉が刹那の口から発せられた。

「……………はい？」

突飛すぎるのもいささか問題があるのではないか……………晃蔵は内心、ひとりごちた。

「……………だから……………あーん」

なにが『だから』なのか、到底判り得ない晃蔵だったが、昼休みの一件を思い出し妙に得心がいった。

(……………屋上で弁当組の光景を見てたのか……………？ それとも元々知っていたのか……………？)

結局のところ、何処までいっても推測の域は出ないのだが、もはや理由なんてどうでもよくなっていた。ただひとつ思うことがあったから……………。

(へっ……………なんだ。意外に可愛い一面があるじゃねえか……………)

「……………要らない？」

ともすれば冗談抜きでお預けを食らいそうな雰囲気だったので、晃蔵は慌てて制した。「要る要る 大いに必要」

よくわからない言葉で、なんとかお預けを阻止できた。

「……………あーん」

どう足掻いてもその道は通らなくてはいけないようだ。晃蔵は腹を括つて『あーん』と口を開けた。

「……………えいつ！」

(……なんだ『えいつ！』って！？ 絶対間違ってるだろそれ！) などという孤独な反論も空しく、キレイに剥かれたリンゴは晃蔵の口に文字通り飛び込んできた。斬新な『あーん』の洗礼を受けることになった晃蔵であった。

「甘くてうまいな。 サンキューな刹那」

「……………（静かにピース）」

リングで幾分気持ち落ち着いたのか、ゆっくりと上体を起こして体の傷を確かめる。

「……………傷が……………治ってる……………？」

今までずっと晃蔵の胸の中で泣いていた茜祢が、ようやく離れた。

「晃蔵さま……………もう起きて大丈夫なの？ どこも痛くない？」

「……………思ったより大丈夫そうだ。 ……なぜか傷も塞がってるみたいだしな」

晃蔵がそう呟くと、茜祢は誇らしげな口調で話し始めた。

「なんか茜祢がね、『晃蔵さまを治したい』って思ったら、傷が治ったんだよ。 晃蔵さまを護るために、きつとおばあちゃんが不思議な力を持たせてくれたんだよ」

（……………そういえば茜祢は俺を守りにきたんだっけ。 ……不思議な力……………か）

貫かれたはずの左腕をさすりながら晃蔵は思考を巡らした。

「そうか。 それにしても茜祢のおばあちゃんはすごい人なんだな。

まじない師か何かなのか？」

「うーん……………。 茜祢もよく知らないの。 おばあちゃんは優しいから

茜祢、おばあちゃんのこと大好きっ」

その想いは晃蔵にもよく理解できた。

両親の居ない晃蔵を育ててくれた蔵清。 それも、わずか二年間の記憶しかないのだが、晃蔵は蔵清のことを尊敬している。 その気持ちと同じくらい、好きだということも、迷いなく言える。

蔵清の性格、信念、そして 圧倒的なまでの強さ。 どれもが尊敬に値し、晃蔵にとっての誇りである。

いつの間にか茜祢の言葉に自身の想いを重ねていることに気づき、意識を引き戻した。

「そうなんだ。 俺もゲン爺のことは大好きだ。 茜祢と同じだ」

「うんっ！ 同じだね」

晃蔵は時計を一瞥した。主将と戦闘を開始してからおよそ三時間近くが経過していた。

「また戸梨に小言を言われると面倒だ。さっさと帰ろう」
言うのが早く、晃蔵はベッドから下りた。

「シャツも買いたいし、スーパ―へ直行だな。さあ、行こう」
「わーい。お弁当とお弁当」

「……タコさんウインナー」
奇妙なリズムを取って上機嫌な茜祢と、微妙な主張を口にする刹那を連れて、晃蔵は学校を後にしたのだった。

数十分後。

晃蔵の家から一〇分程度の距離にあるスーパ―に三人の姿はあった。ワイワイと弁当の材料をカゴに放り込んでゆく。一〇個人の卵パックを念のため二つカゴに入れ、次のコーナーへと向う。買い物カゴには既に、あらゆる材料が投入されている。

突然、茜祢が素っ頓狂な声を上げた。

「あつ！ 晃蔵さ」

「……ここでは勘弁してくれ。なんだ？」

「ぷはっ！ あれっ、あれっ」

茜祢が瞳を喜々と輝かせ何かを指差す。前回とは違い、すぐに茜祢の言わんとしていることが判った。

「ああ。そういえばプリンを買ってやるって言ってたな」

晃蔵自身が約束しただけに、素直に茜祢の要望に応えた。

「どれがいいんだ？」

「うんとねー白いの！」

茜祢の言葉に晃蔵は一瞬首を傾げた。

「白いの？ プリンは普通卵色だろ？」

疑問を口にしながらも探し始めると、あるひとつの商品が目にとまった。

「これか？ これ『牛乳ぷりん』って書いてるぞ？ いいのか？」

「うんっ　それがいいのー」

「ならこれにするか」

そう言って晃蔵は『ジャージャー牛乳ぷりん』をカゴに入れた。

(……ジャージャーって凄い勢いだな……)

などと考えていると、不意に刹那と視線が合う。

「……プリン」

刹那の小さな口から、囁くような声が零れた。

「……プリン？　……ああ、刹那も欲しいのか？」

「……欲しい」

どことなく拍子抜けな言葉にキョトンとした表情を浮かべ、晃蔵は優しく返す。

「いいぜ。どれがいいんだ？」

「……最上段　一番左」

とつくに決まっていたらしく、淀みない指定が飛んできた。言われた通りの場所へと視線を伸ばした。

「……最上段の……一番左　これか？」

刹那が指定した商品は『黒ごまぷりん』だった。茜祢が『牛乳ぷりん』で刹那が『黒ごまぷりん』だと、いくらなんでも似合いますぎだろという率直な感想を、晃蔵は心の中だけに留め、刹那の『ごまかし黒ごまぷりん』をカゴに入れた。

(ん？　ごまかして……そりゃ胡麻じゃねえだろ。っーか偽装臭い商品名だな……)

二人に釣られて晃蔵もプリンが食べたくなり『ぷつつんぷりん』を手を取った。なんでも家の冷蔵庫に入れておくと必ず家の誰かに食べられてしまい、血管が『ぷつつん』するからだとか。それを商品名にするのも如何なものかと、晃蔵は軽いツツコミを入れた。

会計を済ませ、レジで小さい袋を貰い、刹那の『ごまかし黒ごまぷりん』を入れて持たせてやった。

「ほら。刹那の分だ」

「……お礼」

「へ？」

僅かな間の硬直。『ありがとう』の代わりに飛んできたのは、刹那の小さな唇だった。頬に確かな感触が残っている。

刹那の行動は読めないと思っていた晃蔵でさえ、今のは桁違いの不意打ちだった。

衆人の目があるにも関わらず、まさかの行動に出られ、晃蔵の心は大きく揺らいだ。

「あーっ！ 刹那ちゃんずるいよおー。茜祢も」

あらぬ行動に出ようとする茜祢を必死で制する。

「わわわっ……ストップ ストローツプ！ せめて今は勘弁してくれ……！」

「……えー」

「『えー』じゃない！」

傍から見れば苦労人の父親に見えるかも知れないやりとりである。とにかくスーパーを出ようと、買ったものを適当に袋へ詰め込んだ。

「帰るぞ」

「うんっ！」

袋詰めの中で、ふうと膨れていた茜祢だが、すっかり機嫌を取り戻していた。

「刹那」

スーパーを出た途端、落ち着き払った声が響いた。ふと声が出た方を見やる。するとそこには声音通りの容貌をした男が立っていた。

「……パパ」

「パパ？」

刹那の口から意外ともいえる言葉が飛び出した。刹那ならてつきり『お父様』とか言いそうだと思うのは、晃蔵の勝手な思い込みである。

「帰りが遅いから心配しましたよ。……。刹那 彼等はお友達です
ね？」

「……うん」

「そうですか。刹那がお世話になっっているようですね。私はこの子の父親で那斬と申します。以後、お見知りおきを　梅原晃蔵くん」

「は……はい。こちらこそ　って……どうして俺の名前を……？」
予め刹那が話していたと考えるのが妥当ではあった。しかし、この時晃蔵はそれ以上に言い知れぬ違和感を覚えていたのだった。

「ああ失礼。この子から常々、話を伺って頂いてね。ご気分を害されたようならお詫びいたします」

対する青年　那斬は無難な答えを返してきた。そのはり付けたような笑顔の下に隠れた真意を読むことが出来ず、晃蔵は詮索を諦めた。

「いえ、そんなことは……」

「そうですか。それを聞いて安心しましたよ。それでは私もこれで失礼させて頂きます。刹那、挨拶をしなさい」

那斬に促され、『ごまかし黒ごまぷりん』の入った袋を大切そうに抱えたまま、刹那は口を開いた。

「……ばいばい」

「ばいばい、刹那ちゃん。また明日学校でねっ！　お弁当楽しみにしててね」

底抜けに明るく、茜祢がそれに応える。晃蔵も軽く手を振って応えた。

「それでは失礼します」

まるで能面のような笑顔を終始浮かべたまま、那斬と名乗った男は刹那と共に夜の闇に消えた。二人の姿が見えなくなってもなお、晃蔵は暗闇の先へと視線を向け続けた。

茜祢が言うように、明日からも三人で楽しい時間が過ごせるのだと自分自身に言い聞かせるかのよう。

それでも拭いきれない違和感は、その後しばらく晃蔵の中で燻り続けたのだった。

「1」

一夜明けて。

晃蔵は弁当作りに意気込む茜祢に叩き起こされた。

昨夜茜祢は、自身が言い出した『お揃いのアクセサリー作り』に没頭し、深夜まで起きていた。依然として晃蔵は、茜祢に翻弄されつ放し。

お風呂に入る度に「バスタオル取ってもいい？」と、どこか甘えたような瞳で迫られ、晃蔵は誘惑を振り払って何とか抗っている。寝るにしても無駄に神経を使う。意識するまいと思うのだが逆に意識してしまい、そのままずると……気付けば明け方まで雑念と闘い続けていたのである。

昨日は結局、蔵清は帰って来ず、それが余計、晃蔵の雑念に拍車を掛けることとなった。

一体蔵清はどこへ行ったのか。言い知れぬ不安が起こらなくもなかったが、それ以上に晃蔵は、自分のことで精一杯だった。

「晃蔵さまっ！ 朝だよっ！ 茜祢は先に下りてるね」

「ああ。……すぐ行く」

まだ起き抜けの晃蔵はボォ〜とした頭を動かして、なんとかそれだけ返す。一度、大きく背伸びしてあくびを噛み殺すと、茜祢がいなくなつた部屋で、

「……茜祢に早起きされるとせつかくの寝顔が見れねえな」

まるでそれが死活問題でもあるかのように、至極真面目な表情でひとりごちる。ガリガリと頭を搔いて「……なんてな」と呟き着替えを済ませた。

階段を下りていると食堂から「また真っ黒 どうしてえ！？」という心なしか楽しそうな声が聞こえてきた。

食堂に入った晃蔵の目に飛び込んできたのは予想通りの光景。食

卓にこれでもかと並べられた玉子焼き（になるはずだったもの）が消し炭と化した物体の山に晃蔵はしばし唾然。

せめて食えるモノを作ってもらえるよう、サポートに徹することをにした。

ややあつて茜祢の特製弁当は完成した。大きなプラスチック製の弁当箱を風呂敷で包み茜祢はご満悦の様子。そして二人はいつもより早めに家を出た。

蔵清はまだ帰っていない……。

一方。

茜祢が弁当作りに悪戦苦闘している頃、刹那は家の居間で那斬と話をしていた。昨日はあの後、刹那がすぐに寝てしまったため、話すタイミングを逸してしまったのだった。

テーブルを挟んで向かい合い、那斬が口火を切った。

「刹那。昨日の二人とはいづから付き合っているんだい？」

その声音には蔵しさこそないが、些細な虚言すら許さないという重さを孕んでいる。部屋の空気がいつになく重苦しい。

「……一昨日から……」

那斬の前だと普段は明るい刹那も、今ばかりは緊張した面持ちで返す。いつもと違う刹那の様子に違和感を覚え、那斬は刹那を怯えさせていることに気付く。

「刹那？ 何も怒ってるわけではないんだよ。だから普段通りに話しておくね」

「うん……！」

那斬を心配させまいと、努めて明るく振舞おうとしているのが窺えた。やはり場の空気というのは如実に影響するものらしい……。那斬は手短かに用件を伝えることにした。

「一昨日からか。まだ日が浅いのに随分と仲良しみたいだね」

「茜祢とは友達だから……晃蔵も友達。……二人といるとすごく楽しいの」

「そうか。友達が出来たことはいいいことだ」

「うん！ 他にもね、主将さんとも仲いいよ！ また手合わせしてほしいって頼まれたの」

調子を取り戻し始めた様子に安堵し、微笑みで応える。

「……。学校は楽しいかい？」

那斬は一度の会話の中で一回はこの質問をすると決めていた。それは単に、子供の心配をする親の心理であつたらうか。

「うん！ 楽しいよ。 これからもっとたくさん友達を作りたいなっ！ きつとみんな優しくていい人たちだと思ふもの！」

そう言う刹那の言葉に那斬は、喜びとも……驚きとも……哀しみとも取れるような笑顔を浮かべ「……きつとね」と、一言だけ呟いた。続く言葉を頭の中で整理するように、少し天井を仰いだ。

「他の子と友達になるのはいいことだ。でもあの二人とはあまり関わらない方がいい」

「……。どうして？」

刹那のあどけない疑問顔に、しかし那斬は答えることなく、おもむろに腰を上げた。

「さあ、もう学校に行く時間だよ。行っておいで……愛しい刹那。大好きだよ」

那斬の態度を不思議そうな面持ちで見つめていた刹那だったが、深く気にした様子もなく立ち上がり、居間のドアに手を掛けた。

「刹那もパパのこと大好きだよっ！ 学校行ってくるね！」

「ああ……。いつてらっしやい……刹那」

刹那は軽く手を振って、居間を後にした。家を出た刹那の姿を窓越しに見つめながら、静寂が訪れた居間で那斬はひとりごちた。

「梅原晃巖……聖森茜祢。彼等が我々にとっての導き手となるのか……。それとも……」

紡がれた言葉が虚空に溶けた頃合を見計らったかのように、明瞭とした声が響いた。

「那斬様」

「……鳥夜か。監視指定の動向報告を聞かせてくれ」
「ハッ。実は件の使者曰く」

「十四日間の静観だと？」

薄暗い茶室に異様な気配を漂わせる二つの影がある。

片方は毅然とした容貌をした長身の老爺。

片方は悠然とした物腰をした小柄な老婆。

老爺の声に老婆は薄い笑みを湛え、ゆっくりと口を開いた。

「左様。十四の日が流れた時、機は満ちおる。今は静観が得策じゃ
てのお。ふおっふお」

老婆は皺に埋もれた双眸を細め、わずかに口角を吊り上げた。老爺は怪訝な眼差しを向け、冷然とした口調で返す。

「？機？とはなんだ？ お主……一体何を企んでいる？」

沈黙を阻むように、部屋の外で添水の冷涼とした音が、朝の静謐な空気を震わせた。すると老婆は不敵な笑みを浮かべてゆったりとした動作で天井を仰いだ。

「……？機？が満ちれば……おのずと判ろつての。ふおっふお」

あくまで答えをぼやかそうとする態度に老爺は齒を軋ませる。

「必ずしもお主の目論見通りに事が運ぶとは思わぬ事だ。私は必ず
お主を止めて見せる。必ずだ！」

言い捨てる老爺は茶室を後にした。

「誰にも妾をとめさせたりはせぬ」

鬼気迫る形相を露わにして、老婆は虚空に言葉を溶かす。

老婆の背後で空間が ゆがんでいた……。

「はい、晃蔵さま。あーん」

「そんな事しなくても、弁当くらいひとりで食べられるから」

「……晃蔵……あーん」

「……つて、刹那まで!？」

うららかな昼下がり。晃蔵たちは屋上で、茜祢が悪戦苦闘の末に

作り上げた弁当を囲んでいた。実に仲睦まじく微笑ましい光景を作り上げている。そんな中で晃蔵は左右から猛攻を受け、複雑な表情で抵抗しているところだ。

晃蔵の脳裏には昨日の一件が思い起こされていた。リンゴを剥いていた刹那に『あーん』を強要させられた記憶。その光景を茜祢はちやつかり見ていたらしい。

昔から『善は急げ』とはよくいったもので、茜祢は思い立ったら即行動な思考回路で動いているよう思え、晃蔵はやりきれないような面持ちで降参した。

昨日は刹那から『あーん』を貰ったので、とりあえず茜祢が差し出してくれている玉子焼きを頂くことにした。

「どうかーおいしいかなー？」

不安そうにそわそわしながら、感想を待っている。複雑な思いを抱きつつも、玉子焼きを咀嚼した。焼いた端から消し炭を量産する茜祢を見かねて、曲りなりにも晃蔵がフォローして作り上げた玉子焼きだ。

なので一応、『最低限食えるレベル』には達しているのは知っているのだが、それを口にするのは野暮なので、当たり障りの無い答えを返す。

「おいしいよ」

「ホント？ わーい いっぱいあるから、たくさん食べてね」

一度、口に入っているものを嚙下してから、ふたつ目の玉子焼きを放り込む。最初はお世辞程度のもりだった晃蔵だが、咀嚼するうちに不思議な味わい深さがあることに気付いた。

（あれ？ こんな調味料……俺、入れたっけ？）

美食家のグルメ記事でも書くかのように、味覚に意識を集中して分析する。しかし、どれだけ考えてもこの味わいを生み出している調味料を思い出すことが出来ない。

うんうん唸っているうちに、玉子焼きはすっかり飲み込んでなくなっていた。

「……………晃敵……………あーん」

首を振ると、タコさんウインナーを差し出したままの刹那と目が合った。茜祢から貰っておいて刹那から貰わないというワケにはいかない。半ば開き直ってタコさんウインナーを頂戴した。

「……………どう?」

どうと訊かれても晃敵は返事に困ってしまう。

なぜならここにある弁当はすべて茜祢（助手・晃敵）が作ったものだからだ。感想を求めるところなのかと疑問を感じながらもタコさんウインナーを味わう。

「……………おいしい?」

珍しく返事を催促してきた。こころなしか頬がほのかに赤らんでいるようにも見える。なんと返したらいいものかと咀嚼を続けていると、

（これもだ！ さつきと同じ、不思議な味わいがある。それでいてさつきとはまた違った味わいだ！ 妙だ。俺はタコさんウインナーにこんな調味料は使ってないはず。この味わいは一体!?!）

朝見ていた弁当からは想像がつかないほど、食べる物ことごとくから深い味わいを感じた……………それも二種類。必死に思考を巡らせるが皆目検討もつかず、とりあえずの答えを返した。

「すぐくおいしいよ。ありがとうな、刹那」

「……………（静かにピース）」

この二日、鬼憑きと戦い心身ともに疲弊した晃敵にとって、このように和やかな雰囲気はこの上ない特效薬に等しかった。

「あ！ そうだ 見て見て〜完成したんだよー」

そう言っって茜祢はマイバッグをごそごそやって何かを取り出そうとしている。

「ほら、茜祢手作りのブレスレットだよっ！ 色々考えたんだけど、これが一番かなって思ったの。ブレスレットってなんだかみんなと繋がってそうだよね!」

茜祢は喜々とした口調でお手製のブレスレットをお披露目する。

(へえ、ブレスレットか。意外と考えてるじゃん)

案内に適っているチヨイスに晃蔵は素直に感嘆を覚えた。しかし、茜祢に聞かれたら膨れてしまいそうなセリフだったので、内心だけに留めておく。

「えつとねー晃蔵さまがリーダーっぽいので赤だね。それで刹那ちゃん黒で　茜祢が白だよー。えへへー」

作った本人が一番満足気な様子である。茜祢からブレスレットがそれぞれに手渡された。

「サンキューな、茜祢」

「……嬉しい」

二人の反応を窺ってから茜祢は、

「えへへー。茜祢も嬉しいよー　みんなお揃いだね！」

と、満面の笑みで応えた。刹那は初めて買ってもらったおもちゃのように目を輝かせながらブレスレットと戯れている。晃蔵はそんなあどけない仕草を眺めながら、あることを思っていた。

できることならこの先ずっと　鬼憑き　など現れずに、茜祢や刹那と一緒に楽しくも穏やかな学校生活を送り、やがてはクラスメイトとも打ち解けられればいいなど。

晃蔵はそんなささやかな願いを、頭上に広がる蒼穹に託した。

そして休み時間の終了を告げるチャイムが鳴るまで、晃蔵たちは楽しいお弁当タイムを満喫したのだった。

その日の夜。

相変わらず茜祢は「今日はバスタオル取っていい？」と心なしか上目遣いで晃蔵を攻め落とそうとしていた。晃蔵が誘惑に負けじと要求をキツパリ断ると、茜祢は頬をぷうと膨らましてあからさまに不満を露わにした。

入浴中、バスタオルを外さないといけないような場面でも、晃蔵は固く両目を閉じて乗り切ったのである。

つくづくリラックス出来ているのか判らないままお風呂から上がった頃、今までどこに行っていたのか、ようやく蔵清が帰ってきた。

晃蔵はその時、蔵清が神妙な面持ちでいる事に気付けないでいた……。

「2」

晃蔵の願いが通じたのか、その日を境に 鬼憑きは現れず、平穩無事な学校生活を送ることができ、三人の関係はより親密なものとなっていた。

初めてお弁当を持ってきて以来、茜祢は毎日のように早起きして三人分のお弁当を悪戦苦闘の末に完成させ、晃蔵がサポートに徹するという構図が自然と定着していた。苦労は当分報われそうにも無いなという思いを、晃蔵は内心だけに留めておく。

そして今日も穩やかに終わりを迎え、丁度二週間が経過した。いつまでも続く平穩を願いながら、その夜も晃蔵は茜祢と寄り添って眠りについた。

日付が変わり、草木も眠る丑三つ時。

人気のない道をひとりの少女が往く。少女は見る者の心を奪いそうなほど妖艶な空気を纏っている。

それはまるで闇夜に差す一条の光のよう……。艶やかな白髪を揺らしながら……。

やがて少女は闇へと消えた……。

いつもならぐっすり眠っている深夜二時前。

世界が夜の帳に包まれ、幽かな月光だけが降り注ぐ闇夜に 刹那は不思議と目を覚ましていた。なぜなら妙な気配をその身に感じたから。

起きたとはいえ普段なら眠っている時間だけに意識は朦朧気。思考回路は限りなく低速でしか回転していない。布団から身を起こして緩慢な動作で目を擦っている。

「……パパ？」

小鳥の囁きのように儂げな声が零れ、虚空に溶けた。不安に駆ら

れた刹那は静かに立ち上がり、襖を開けて廊下へと出る。

途端、名状し難い悪寒が刹那の心に吹き抜けた。それは夜の冷気のせいか、それとも先刻感じた気配からくるものなのか……。視線を向けた廊下の先には闇が蹲り、まるで獲物を待ち伏せているような恐怖が刹那の心を締め付けている。

「……パパ？」

それでも刹那は恐怖を抑え込み、愛しい相手に呼びかけるが返事はない。夜の闇に喰われたと思わざるを得ない圧迫感だけが渦巻いている。

「……パパ……」

恐怖に竦む足を懸命に前へ送りだす。一步……また一步。着実に怖気を覚える気配が滲み出ている部屋へと近付いてゆく。

進むな！ 戻れ！

「っ！？」

意思とは反する叫びが脳裏に響いた。それは本能からきた危険を察知する叫びだったろうか……。重みを孕んだ声に、ともすれば屈しそうになる心を懸命に支え、刹那はさらに歩を進めた。

見るな！ 知るな！

「っ！？ ……うる……さい……！」

響く端から撥ねのける。恐怖と悪寒が混在し、意識が混濁してゆく。緊張の糸を途切れさせようものなら、即座に気絶してしまいそうな危うい状態。夜の冷気に晒され、冷え込んだ床板が裸足に堪えた。

戻れ！

本能はなおも警鐘を発している。だが刹那の足は止まらない。一步……また一步。目前の部屋へと歩み寄ってゆく。そして遂に、部屋の戸に刹那の手が掛かった。恐る恐る開いて中を覗き込んだ次の瞬間！

「ッ！？ パパ ……ッ！？」

限りなく闇に近い空間にも関わらず、刹那の瞳には愛すべき物の

顔が鮮明に映しこまれた。恐怖の余り瞳孔が収縮している。

刹那の瞳に映されている人物、それは闇倉那斬。その人だった。視線を横に流す。那斬の正面。そこに「何か」がいるということ、刹那は本能的に感じ取っていた。「何か」の姿が視界に映らないのは、単に室内に満ちている闇だけの所為ではなく、「何か」から発せられている圧倒的なまでの？恐怖？に他ならない。呼吸が乱れ、心臓が張り裂けんばかりに脈動する。

歯の根が合わず、震えが止まらない。まるで悪夢でも見ているかのような浮遊感が刹那を包み込んでいた。

刹那の瞳には、全身を切り裂かれ、血まみの状態で宙に浮んでいる那斬の姿が、信じられないほど鮮明に映し出されていた。

次の瞬間、那斬が刹那の存在に気付く。必死の形相で刹那に叫び掛けている。普段の彼からは想像もできない取り乱しようだ。

「刹那アツ！ 来るなツ！ 見てはいけない……見てはッ
！」

「……パ……パ……？ いや……いやああアツ……！」
急に視界が滲んだ。自我を保つためにあらん限りの悲鳴を上げて泣き叫ぶ。だが不思議と涙を湛えた双眸は閉じることができず、目の前の光景を、その瞳に映し続ける。

ヒュン。

突如、闇に一条の白光が煌いた。光の正体が白刃だということを、刹那は視覚ではなく直接頭の中で理解した。

「つがあ……ぐつ……！」
那斬のくぐもった声が刹那の鼓膜にへばりつく。一瞬にして室内にさびた鉄のにおいが充満した。むせ返るほどの生々しいにおいて意識が混濁する。

もはや身体感覚はなく、自分が立っているのかどうかも刹那には判らない。耐え難い恐怖に晒されながら……それでも眼瞼を閉じること叶わず、涙すら枯れ果てた刹那はその光景を眼に焼き続けた。

「……パパ……パパ……？」

愛しい那斬の顔色から、みるみるうちに血の気が失せてゆく。それでも刹那と呼ぶ。

消え入りそうな声で何度も……何度も。

ヒュン。

再び、空気を切り裂くがごとく、白刃が煌いた。しかし、今度の一閃は刹那の眼には酷く緩慢なものに見えた。ともすれば刃文すら克明に判別できるほど……緩慢な動き。

さながらビデオ映像をスロー再生でもしているような光景の中で、刹那は風になびく細い布を捉えていた。奇妙な文字を記した布が柄に巻かれ、その一部が解けて尾を曳く形になっている。

時間は充分すぎるほどであった。刹那は恐怖も、寒気も、悲しみも驚きも忘れてそれを見詰め続ける。

「せ……っ……な……」

刹那の意識を引き戻したのは消え入りそうなほどか弱い那斬の声。

「……パパ？」

「……最……期に……ひとつ……だけ……」

彼は、今まさに死に逝こうとしている筈なのに。

「……パパ……？」

「私……は……あの……日から……刹那の……こと……が……」

彼の表情はこの上なく晴れやかで。

「……あの……日……？ パパ……？」

「大……好き……だった。誰……より……優しい……刹那を……」

それですべても穏やかなもののように。

「……いや……」

「……さようなら。……私の愛しい……せ……っ……な……」

刹那には思えた。

「い……いやああッ！」

やがて 二人に許された別れの時間は……唐突に終わりを迎えた。

ゾンツ。

那斬の体を貫き、反対側から飛び出した白刃は、那斬の血を飲み込んでいくかのように 紅に染まっていた。

鈍い煌きが闇に包まれた空間に不気味な光を放っている。宙に浮かされた形で絶命した那斬の足元には真つ赤な血溜りが出来ていた。ようやくと刹那の存在に気付いたといわんばかりに、闇の中に潜む？何か？は那斬だったモノを無造作に投げ捨てた。

「パパツ！」

恐怖心を振り払い、おぼつかない足取りで那斬へと駆け寄ると、那斬の亡骸をその腕に抱き、刹那は憎悪の眼差しで睨め付けた。それでも刹那には眼前に佇む？何か？が判別できなかった。ただただ深い闇が刹那を睥睨しているような気配しか感じ取れない。

抗うことすら叶わぬ……圧倒的な闇。

刹那の目線の先には那斬を死に至らしめた白刃が鈍い光を放ち、柄からは奇妙な文字が記された布が垂れている。それが刹那にとつて闇に潜む？何か？を認識する唯一のモノになりつつあった。

「？機？八満チタ。運命ノ歯車ガ 廻り始メル」

「っ！？」

突如として闇が空気を震わせた。声らしからぬ声が室内に反響する。

混濁した意識で意味を解そうとするが、今の刹那には到底不可能。怯え震える小鳥のように身を竦める事しか出来ない。

そして闇に潜んでいた『何か』の気配が忽然と消え去り、室内に光が戻った。ぼんやりと視認することが出来る。

「あ」

不意に緊張の糸が切れ、刹那は那斬の亡骸に覆い被さる形でくずおれた。傷口に顔を埋めたため、刹那の顔に鮮血が付着しているのだが、刹那は気にも留めず那斬の胸に頬を当てた。まだ那斬の亡骸には、大好きな匂いとやさしい温かさが残っていた。しかしその心臓は鼓動することなく、両の瞳は幸せを映した瞬間のまま固まって

いるように思えた。

力チヤ。

「！」

妙な金属音に気付き、刹那は顔を上げて視線を巡らせた。すると那斬の右手に一振りの刀が握られていることに気付き、恐る恐る手を伸ばす。

「熱っ ！？」

全身が黒塗りの刀 刀身から柄に至るまでことごとく。喻えるなら深い闇をそのまま切り取って造り上げたかのような不気味な刀。柄に触れただけで意識が蒸発しそうなほど熱い。しかしそれは、本能に直接訴えかけるほどに明白な力そのものだった。意を決し、もう一度刀を握り締める。

「あんっ……」

やはり熱い。だが、たとえ身体が蒸発しようとも刹那は刀を手放すつもりはなかった。今、刀を手放そうものなら那斬の想いを那斬の死を無価値なモノへ貶めてしまいそう……そんな気がした。だから刹那は手を離さない。

「あっ……んあっ」

灼熱に身を悶えさせながら、刹那はある感情を増幅させていた。

(憎い……パパを殺した存在が憎い！ ……なぜパパが殺されないといけないの!?)

赦さない……赦さない……赦サナイ……赦サナイ ツ！

そんな呪詛のような念が、刹那の心に絡み付き、心を巣食っている。それは彼女の 那斬に対する想いの表れが……酷く歪曲して形となってしまったという因果……。

その昏き炎は、もはや誰にも止められはせぬのだろうか……。刹那が憎悪の炎を燃やしていた最中に突然、部屋の襖が開かれた。

「刹那様」

「！？」

驚いて刀から意識を遠ざけ、視線を走らせた先には、黒装束に身

を包んだ男が、片膝を付いて畏まっている。一拍の間を置いて、刹那は口を開いた。

「……烏夜……さん……？」

「此度の悲劇……刹那様の心中お察し致します。然らば生前の那斬様より仰せつかりました言伝。今こそ刹那様にお話し致したく存じます」

「パパの……ことづて……？」

思いがけない烏夜の一言に、刹那は僅かながら正気の光を取り戻しかけた。

「ハッ！ 恐れながら申し上げます故……宜しければお部屋を移しましょうぞ」

そう言葉を紡ぐ烏夜の肩は僅かに震えている。刹那は烏夜の声に、那斬に対する深い悲しみが混ざっているように思えた。

だからこそ刹那は烏夜の申し出を受け容れず、那斬が居るこの部屋で、すべてを知る決意を固めたのである。

「うっん……ここでいい。烏夜さん、パパのことづてってなに？」

刹那の悲壮的な言葉に予想以上の覚悟を感じたのか……烏夜は恭順の意を示して頷き、面を上げた。

「ハッ！ 言伝とは我等『闇倉』の一族ならびに 刹那様ご自身について……！」

その夜刹那は、烏夜から一族の真実と己の正体を知らされた。

闇夜は刹那の心を写し取るかのように、その昏さを増してゆく。昏く、昏く……なお昏く。そうして運命の夜は更けていった……。

「 晃蔵さま…… 晃蔵さま」

静寂が辺りを包み込む真夜中に、晃蔵は茜祢に起こされた。消え入りそうなそんな声に不安を覚え、ベッドから身を起こす。枕元に置いてある目覚まし時計を一瞥 時計の針は三時前を差している。「……ん？ 茜祢……どうした？」

尋ねるが茜祢は自身の体を強く抱いたまま、小さく震えている。

その時晃蔵は茜祢の顔に影が掛かっているような気がしたが、それ以上気にする事はなかった。

やがて茜祢の声が晃蔵の耳に届く。

「……すごく怖い光景を見たの……。人の叫び声とか聞こえて……。怖い……。怖いよう 晃蔵さま……」

嗚咽混じりに言葉を零す茜祢に、晃蔵は優しく声を掛ける。

「そんなのは単なる悪い夢だ……。気にすることは無い。茜祢の傍には俺がいる。だから安心して寝るといい」

そう言って手を伸ばし頭を撫でて慰めると、茜祢は子供のようにすんなりと眠りについた。晃蔵は茜祢の怯えきった声を思い出し、言い知れぬ不安を抱いたまま……。微睡みへと沈んでいった……。

「3」

どれほど深い夜が続こうが、いずれ朝は訪れる。その日は雲ひとつない晴天に恵まれた。

うららかな陽気が晃蔵の部屋を暖かく照らし出す。

「……ん……朝か……」

寝ぼけ眼でベッドから上体を起こした晃蔵は、枕元に置いてある目覚まし時計を一瞥した。

「……んん？」

夜に一度起きた所為か、いつもより一時間も早い。道理でまだ茜祢が隣で気持ちよさそうな寝息を立てていると思ひ、久しぶりに寝顔を拝もつと身を乗り出した。

「なっ!？」

それは決して、茜祢の愛くるしい寝顔に対して上げた驚きの声ではない。いや、突き詰めて考えればそれも無理からぬ反応ではあるのだが……。晃蔵の眠気すら吹き飛ばしたのは、もっと別の理由……。

「これは血……。だよな? どうして血なんか茜祢の顔に?」

あまりの異常事態に晃蔵の思考はパニックに陥る。そう言えば夜に起こされた時、茜祢の顔に影が掛かっていた事を思い出した途端、

悪夢に怯えきっていた茜祢の顔が脳裏をよぎった。傷がないか確かめようと、茜祢に顔を近づけた。次の瞬間！

「……あー晃敵さまあゝおはよーなの。……どうしたのー？」

「うわっ！？ ……なな 何だ茜祢……お、起きてたのか……？」

「うっんー。今起きたんだよー」

しどろもどろな晃敵に対し、茜祢はいつも通りの笑顔を湛えて明るく応えた。その表情からは怯えなど微塵も窺えない。けれども、血が気になる晃敵は恐る恐る尋ねた。

「茜祢……その……どうしたんだ？ それ」

「ふにゆ？」

晃敵の指摘に、茜祢は言葉通りふにゆふにゆっと柔らかかそうな頬に手を触れて確かめる。

「……？ なにもないよ？」

「いや……その。顔と……手にも……」

「手？ ふいぎやあ！？ ちちちち 真っ赤な血だよー！

なんでえー！？」

「それを訊いてるんだけど……」

素っ頓狂な声を上げて動揺する茜祢に戸惑う晃敵。

「……どこも痛くないのか？ 傷とかは……ないみたいだけど」

しばらく慌てふためいていた茜祢だが、すぐに落ち着きを取り戻し、平然とした表情で頷いた。

「うん！ 大丈夫だよ。どこも痛くないよー」

その言葉にホッと胸を撫で下ろした晃敵は茜祢に洗面所へ行くように促した。

「じゃあ洗ってくるよ。それから今日もお弁当作るの 今日 は刹那ちゃんの好きなサンドイッチ弁当だよー えへへー」

「卵は茹ですぎるなよ。俺もすぐに下りるから先に進めておいてくれ」

「うん 茜祢がんばるー」

あどけない声を響かせながら、茜祢は不可解な血を洗い流すべく

洗面所へと向かう。トントントンと階段を下りる軽やかなリズムが耳に心地よく届いた。

「……一体なんだったんだ？」

いくら思案を巡らしても、茜祢の顔や手に血がついていた理由に辿り着くことができず、晃蔵は朝からモヤモヤしたまま、一日のスタートを切った。

そして、お待ちかねの昼休み。

晃蔵たちはすっかりお馴染みとなった屋上でのお弁当タイムを満喫していた。しかしひとつだけ、いつもと違う異変があった。それが。

「刹那ちゃん？ どうしたの？ あまり食べてないみたいだよ？ 今日のお弁当は刹那ちゃんが大好きなサンドイッチだよっ！」

茜祢が腕に縋りをかけて作ったんだよ。」

茜祢の様子に気付いた晃蔵も続けて声を掛ける。

「ん？ どうした刹那？ サンドイッチ好きだろ？ 遠慮せずに食べていいんだぞ？」

どうにも様子がおかしい刹那を気遣い、二人は優しく声を掛ける。しかし刹那はずっと俯いたまま、さつきからサンドイッチを食べようとする気配すらない。反応らしい反応といえば、たまに思い出したように、

「……うん」

と呟くだけである。

かといってそれは返事でない事は、晃蔵と茜祢は重々承知していた。だからこそ講ずべき策がなく、手を拱いてただ見ているだけしか出来ないでいるのだった。

なんとももどかしい雰囲気は二人の間に立ち込めている。結局その日のお弁当は、いままでにない重苦しい雰囲気のまま終了となった。

晃蔵に降りかかる異変はそれだけに留まらない。

その日の放課後。

茜祢は刹那の様子が心配だと言って、部活の終了を待たずに刹那と一緒に帰った。晃蔵と一緒に帰ってやりたい衝動を抑え、茜祢に任せる事にしたのである。

そして、学校の監視を目的とし、体力作りも兼ねている部活が終わった頃。

「!?」

実に二週間振りに感じ取った 鬼憑き の気配に、晃蔵は神経を研ぎ澄ませた。

「 主将。……すみません、ちよつと用事を思い出したので先に失礼します」

と断りを入れ、 鬼祓刀 を収めた竹刀袋を持って道場を後にした。 鬼憑き の気配は実習棟の奥から漂ってきていた。……それも二つ。冷や汗が浮かび、頬を伝う。辺りはまだ明るいものの、確実に陽射しは弱まりつつある。あと一時間もすれば日が暮れ始めるだろう。

そんなことを考えながら晃蔵は 鬼憑き の気配がする方へと近付いてゆく。実習棟の裏手へと続く角を曲がった瞬間、二つの影が視界を横切った。

(間違いない。今の気配 鬼憑き だ!)

すぐさま 鬼祓刀 を取り出し、抜き放つ。意識を集中させて右手に力を漲らせ、それを 鬼祓刀 へと注ぐ。これまで訓練してきた成果が如実に表れている。淀みのない、流れるような力の動き。次第に刀身が紅く染まってゆく。

「 よしっ! 」

確かな手応えを感じ、刀を真横に構えた直後の強襲。 鬼憑き は正面と背後から同時に現れた。

「 つ! お前らは……!? 」

襲い来る二体の 鬼憑き その顔に晃蔵は見覚えがあった。入学当初、部活を早々に放棄し、遊びたいという理由で帰宅部に甘

んじていたあの二人組だ。

生徒から度々カネを巻き上げていた事を思い出し、晃蔵は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。彼等が 鬼憑き になった理由は容易に想像できた。

「今、目え覚ましてやるよ！ 元に戻ったら昔みたいに部活に励んでみるッ！」

晃蔵は声高に忠告の言葉を言い放ち、二体の猛攻を捌いている。微塵の危うさすらない、的確な動きだ。

だがそれは、単に晃蔵の腕が上達したというだけでなく、鬼憑き 自体に齒応えがない所為でもあった。

「……………」

晃蔵は今までに遭った事のない類の 鬼憑き に怪訝な視線を向けている。相對している二体は不思議なくらい 鬼憑き らしくなかった。それはまるで？無理矢理 鬼憑き に仕立て上げでもした？ような そんな違和感すら覚えるほどだ。

(……………なんだ？ これが 鬼憑き なのか……………？ チツ……………考えが纏まらねえ！)

元々深く考えることは苦手な晃蔵は、取り敢えず目の前の 鬼憑き を片付けることに集中することにした。

「ッ！」

思考に意識が取られていた所為で 鬼憑き の接近を察知できなかった。咄嗟に身をよじったタイミングで爪撃が繰り出され、鬼被刀 の柄を掠らせてしまい、その衝撃で柄に巻かれた布の一部が解け、細長く尾を曳く形でなびかせた。目障りなので直したいところだが、構っている場合ではない。早々に片付けてしまおうと改めて意識を切り替える。

「遅いッ！」

裂帛の気合いを迸らせ、背後の一体を視界に捉えると 鬼憑きの心臓へ 鬼被刀 を滑り込ませた。

「グ……………ガ……………ッ！」

苦悶の声を漏らす。間髪を容れず力を送り込むと背後の空間がゆがみ、すかさず刀を引き抜きゆがんだ空間を切り裂いた。

リ

イン。

「あと一体……！」

舞うように身を翻し、残りの鬼憑きを見据えた。被われた生徒は意識を失いその場にくずおれている。

地を蹴り 鬼憑き の背後に躍り出た。この程度の動きでは今までの鬼憑きには通じなかつただけに「つくづく拍子抜けだな」と呟いた。存在に気付かれるより早く、晃蔵は鬼抜刀を煌めかせる。同じ要領で力を注ぎ込み続けて空間を断ち切ると同時に、爽涼な音が響いた。

リ

イン。

「『鬼抜い』 完了」

危なげない勝利である。

「ふう。……何だこの鬼憑きは……。弱いに越したことはないが……それにしても不完全すぎる……。妙だな」

二人を静かに見下ろし、ひとりごちる。

「……気のせいかな」

安堵の溜息をついて空を仰いだ その瞬間！

「なッ!？」

一瞬にして不可解な空気が辺りに満ち、晃蔵は意識を集中させ気配を探る。時間の経過に伴い、辺りが暗闇に包まれてゆく。日没にはまだ早いというにも関わらず、辺りは暗闇に包まれた。

言い知れぬ緊迫感が肌に突き刺さる。解けた布を直すことでもできずに身構える。

周囲にせわしく視線を走らせていると徐々に目が慣れてきた。

と、その時！

「白い布……。見つけた」

不意に抑揚のない、中性的な声が頭上から降り注ぐ。

「……。誰だ……?」

警戒心を湛えたまま、威圧するような口調で誰何して頭上を見上げた視線の先　実習棟の屋上に、鬼憑き　でも人でもない奇妙な影を捉えた。

影は音もなく晃蔵の視界に降り立つ。晃蔵は反射的に影を見据えて身構える。影は漆黒の法衣を纏い、フードで顔を隠している。だが、その右手には一振りの刀を携えているのが見て取れた。瞬時に地を蹴り、一気に晃蔵へと肉薄する。

「くっ……！」

黒衣の影は流れるような動作で袈裟斬りを繰り出し、晃蔵は水平に構えた刀身で受けとめる。甲高い金属音が弾けた。攻撃の手は休むことなく、矢継ぎ早に繰り出され、晃蔵は辛うじて黒衣の影の攻撃を捌いている。

確実に晃蔵の命を奪い取ろうという、憎悪にも似た念が滲み出ている。それでいてお互いが通じ合っているような……そんな違和感を晃蔵は覚えた。

様々な感情が身体を縛りつけ、行動を抑圧する。反撃に転ずるところか防御すらままならず、額に脂汗が浮かぶ。

（こいつ!?　っ……強いッ……!）

影から放たれる殺気は並大抵の鬼憑きの比ではなく、その一段上をゆくような威圧的な禍々しさ。一瞬でも気を抜けば有無を言わずに命を持っていかれるのは明らかである。

既に十数分の攻防が繰り返り広げられた中で晃蔵は終始防戦一方。しかも相手の正体すら判らないという不利な状況で、どうにか打開しようと思案を巡らしていると　突如、新たな影が二人の間に割って入ってきた。

「ッ……ッ!?」

どうやら黒衣の影すらこの事態を予期していなかったらしく、驚きの声が晃蔵と重なった。謎の者の参入に黒衣の影は間合いを取り、様子を窺う。眼前に現れたのは黒衣の影と同じような純白の法衣を纏っており、その容貌は見て取れない。しかし、晃蔵の眼には白衣

の影が何者かが理解できた。

（ 成り代わり寸前の 鬼憑き ……だと!? チツ 一体何が起こつてやがるんだ!? ）

それは晃蔵にとって初めての経験であった。自身が監視している区域で、ここまで悪化した 鬼憑き の存在に気付かなかつた事。

さらに、そんな 鬼憑き が自分の前に現れる事も。そのどちらもが不可解で、あまりにも異様であると、晃蔵の本能は警鐘を鳴らす。

そして晃蔵は目の当たりにする事となる。罪を犯したが為に 闇 を残し、 鬼 を呼び寄せ 鬼憑き となつた者の行き着く果てたる姿を！

白衣の影の 闇 が喰われてゆき、 鬼憑き が 鬼 へと化してゆく姿が、晃蔵の脳裏にハッキリと刻まれてゆく。

フードが外れ、表情が露わになった。

「……………これが 鬼 ……!?!」
成り代わつた 鬼 を見て、晃蔵は思う。

「俺たちと……………なんら変わらない。……………これが 鬼 ……!」

途端、頭が割れそうな苦痛が、晃蔵を襲つた。

「う……………うわああああーッ!」

自身にも判らない痛みの正体に、晃蔵が気付くのは もう少し先のこと……………。

晃蔵は意識を必死に繋ぎとめ、両の影を睨みつける。黒衣の影はもとより、眼前の白衣の影 鬼 からも相当量の力が感じられた。戦いになれば苦戦は必至……………最悪無事では済まないかも知れないと思うほどの力が、空気を不気味に一層凍てつかせる。白衣の 鬼 がおもむろに、晃蔵を視界に捉える様に頭を振つた。

「来るか ……!?!」

咄嗟に 鬼抜刀 を構え、状況を分析する。しかし、思うように思考が纏まらない。ただ判るのは、黒衣と白衣 どちらと戦つても自身の身にあまりすぎている相手だということのみ……………。

同時に攻められたら一卷の終わり……そんな考えが脳裏を過ぎるとどうしても身体が震えてしまう。黒衣の影も機を掴みきれないらしく、異様な三竦みの状態が続いている。そこで晃蔵は考えた。このままでは精神ばかりが擦り減ってしまい、ますます不利な状況になってしまふ。そうなる前に動こうとした　まさにその瞬間！

「殺……サセヌ！」

低く唸るような声と共に、鬼が黒衣目掛けて飛び掛った。膠着状態が解け、戦いの空気が舞い戻る。

「鬼の分際で私の邪魔をするなッ！　鬼は殲滅する！

梅原晃蔵も殺す！」

「なっ……俺を殺すだど!?　しかもこいつ……鬼の存在を知ってやがる……ッ!?」

晃蔵の動揺など意にも介せず、鬼は既に黒衣の影と刃を交え火花を散らしている。

互いの力は互角のように思えた。突然、蚊帳の外に投げ出される形となった晃蔵に出来る事は、両者の戦いを見守ることだけ……。

晃蔵は眼前で繰り広げられている光景をその眼に焼き付ける。

戦況は鬼の優勢で進んでいる。単純な力だけでなく太刀筋から身のこなしまでが明らかに鋭い。さしもの黒衣の影も容易には攻めきれないでいるようだ。

「邪魔を　するなあああ！」

「却下ダ。貴様ノ、思イ通り二八、サセルナト、仰セツカツテイル」

「鬼の分際で……私を止められると思うなよ！」
「……ッ！」

直接的な攻撃はもとより、言葉の応酬にも物凄い気迫を感じる。両者譲らず、熾烈な攻防が展開され、闇に満ちた空間の至るところで火花を散らす。

「なんだこれは……!?　一体……何が起こっているんだ……!?」
驚愕に値する戦いを眺め、晃蔵は悪夢にうなされているような声

を零した。それは客観的に両者の戦いを分析した結果、己の力が目の前の二人に比べてあまりにも劣っていることに気付いたからに他ならない。かつて、敵清の力を目の当たりにした時と同等かそれ以上の圧倒的恐怖であった。歴然たる力の差を認めると同時に、晃蔵は己の無力さを呪い、歯を軋ませた。

「……くそっ！」

苛立ちを抑えきれず悔しさが漏れ、握り締めた左手の爪が肉に食い込む。まさか自分が鬼に守られるなどという、滑稽な事態に自嘲にも似た笑みが浮かび、ひとしきり嘲った時、ある違和感を覚えた。

（ 鬼 に守られる……？ ……なんだこの違和感は……？ ）

新たに生じた霧が思考を蔽ってゆく。いくら考えても霧は晴れず、むしろ濃くなっている感覚に、晃蔵は思考の迷路に迷い込んでゆく。

「 破ッ！ 」

突如として鼓膜を振るわせた 鬼 の声に晃蔵の意識は引き戻され、戦況は動きを見せる。 鬼 が放った一撃が黒衣の左腕に、二の腕から甲の半ばにかけて赤い線を走らせた。

黒衣が裂け、鮮血が滴る。

だがそれは困だった。黒衣の影は 鬼 の大振りの一撃を誘い、腕を犠牲にして反撃に転じたのである。体勢を崩した 鬼 は自らの動きをコントロールしきれず、直後に煌いた一閃によってその身体は上下に両断され、直後、硝子細工の如く碎けて塵と化した。

「 『 鬼殺し 』 ……！？」

鮮烈な光景を目撃し、晃蔵が呆然と眩く。あまりに強大な力による決着。すっかり戦いの熱に呑み込まれていた晃蔵は黒衣の影を見据えて咄嗟に身構えた。

しかし黒衣の影は背後を向いたまま荒く息を吐き、その場に佇んでいる。どうやら 鬼 につけられた傷が思いのほか深いようだ。

様子を窺っていると突然、影が纏っていた黒衣が千切れ落ちた。どうやら激戦の負荷に耐え切れなくなったようだ。 鬼 との戦いがどれほど熾烈だったかを物語っている。

黒衣の下から現れたのは艶やかな黒髪を揺らした小さな少女のように見え　その後姿に晃蔵見覚えがあった。

「おい……嘘……だろ……」

どうして彼女が自分を殺そうと襲い掛かってきたのか……。考えれば考えるほど混乱を極め、否定しようとするほど「目の前の少女は？彼女？だ」と自分自身が告げる。

「嘘だ……嘘だ……！　おい、こつち向けよ……！　聞こえないのかッ！？　こつち向けて言っただよッ！」

尋常ではない取り乱しようである。一方で黒髪の少女は傷を気にしているようで動く気配はない。痺れを切らした晃蔵が一步踏み出そうとした瞬間　少女が振り向いた。

「　なツツ！？」

少女の顔を見た途端、これ以上ないというほどの衝撃が晃蔵の身体を駆け巡った。

「……想定外の負傷だ。従ってお前を殺すのは一時中断する」

しかし、その声だけはどうか考えても？彼女？と似ても似つかない……。黒髪の少女は暗闇の中を疾走し、姿を消した。それから数秒後、辺りに光が戻った。

「……どうして……どうして……どうして……！？」

悲痛な言葉が幾度となく繰り返され、静寂に溶けて消える。去り際に見た少女の顔……。あれは間違いなく。

「刹那。どうしてお前が……。茜祢と一緒に帰ったはずじゃ……。なかったのか……。！？」

混乱を極めた晃蔵の頭ではその答えを導き出すことは出来ない。沸騰した脳を冷やすべく、晃蔵は半ば放心状態で帰路に着いたのだった。

晃蔵の手には　鬼抜刀　が握り締められ、未だ解けている柄の布が寂しそうになびいていた……。

晃蔵は家に帰るや否や、「茜祢は刹那ちゃんと一緒に帰ったよ」

という言葉を茜祢から聞く事が出来た。すると晃蔵は、さっきの少女は自分の身間違いだっただんだと思ひ直し、ホッと胸を撫で下ろす。神経が擦り減った精神状態に於いて唯一、茜祢のいつもと変わらない無邪気な笑顔がなによりの安らぎとなっていた。

夕食の後、晃蔵は蔵清に「何か問題などは起きてはおらぬか？」と訊ねられた。一連の出来事を正直に報告するべきかと悩み逡巡した結果、晃蔵は初めて蔵清に偽りの報告をした。

すると蔵清は穏やかな表情を浮べ「そうか」とだけ呟いた。追及されなかった事に安堵する反面、尊敬する蔵清に嘘をついてしまった事に、晃蔵は後ろめたさを感じずにはいらなかった。

その夜。

晃蔵はまたしても夜中に起こされた。昨日に引き続き茜祢が悪夢をみてしまったようだった。今度は明かりを点けて茜祢の身体に異変がないか確かめる。幸いどこにも異変は見受けられず、晃蔵は安堵の溜息をついた。

電灯が煌々と輝く部屋で晃蔵はその腕に茜祢を抱き締め、気持ちを落ち着かせる事に努めた。

そして晃蔵は、茜祢を失いたくないという思いから、初めて彼女に背を向けることなく、茜祢を守るように抱いたまま眠りについた。

晃蔵は茜祢の温もりに何を思い出したのか……頬に一筋の涙が流れた。

一方その頃。

蔵清は自室として使っている座敷でひとり、手紙をしたためていた。置行灯の幽かな明かりが手元を照らしている。

「早いものだ。あれからもう十四日が経ったのか。？奴？が動き出し、那斬殿が殺された」

誰にともなくひとりごちた。細められた双眸からは事態の深刻さをしかと見据えているような気配が漂う。

「ともすればあの子が目覚めるのも時間の問題　いや、既に目覚めてるやも知れん。そうなれば激突は必至……避けられぬ未来よ」
手紙の文面に筆を走らせながら巖清は言葉を継ぐ。

「例の返答は聞くまでもない。……むしろこれが答えか。今や交渉は決裂し均衡は崩れ始めた」

そこで筆を置く。文面は然程長くなく簡潔な内容のようだ。短く溜息を吐き天井を仰ぐ。

「斯くなる上は私自ら……打って出るしかあるまい」

そのまましばらく天井の暗闇へ視線を投げた後、したためた手紙を封筒に収め、傍の掛け軸へと手を伸ばした。

次の日。

学校に登校すると、巖の不安を再び呼び起こすような事態が待ち受けていた。

「巖さま……やっぱり刹那ちゃん来てないみたいだよー……」

「……刹那が？」

「うん……。刹那ちゃん、どうしちゃったんだろ……。あ……。そういえば昨日、気分悪そうだったから、もしかしたらそれが悪化しちゃったのかなー……」

巖の頭の中では昨日見た少女は刹那ではないと判断している。

しかし、刹那に登校していない状況を目の当たりにすると、どうしても不安は募ってしまう。

それでもなんとか、刹那が黒衣の影ではないという可能性を必死に探る。茜祢の言葉にはどこかうわの空で相槌を打つ。

「……ああ。……そうかもな」

「一所懸命作ったお弁当……今日は刹那ちゃんと一緒に食べられないね……」

「明日はきつと……一緒に食べられるよ。……さあ屋上へ行こう」

「……うん」

落ち込んだ茜祢を連れて廊下を歩き出したその時、背後で誰かが

声を上げた。

「 聖森！ ちょっと待て」

聞き慣れた声に晃敵は振り返り、嫌悪すべき対象である声の主を見据えた。

「…………。戸梨センセイ…………茜祢に何か用ですか？」

良い噂がない教師だけに、どうしても口調に棘が混ざる。茜祢を庇う形で戸梨と対峙する。戸梨は視線を下方に向けて下卑た笑みを浮かべている。その眼差しが茜祢の下半身に向けられている事に晃敵は気付いた。晃敵は茜祢の体がなるべく隠れるように気を遣った。
「 聖森、少しばかりスカートが長いようだ。校則違反だ。放課後、生徒指導室に來い」

「 なんだと！？ でたらめを言うなよ teme……………！ 調子に乗ってるよ」

晃敵の言葉が言い終えるより早く、戸梨が口を開いた。

「 梅原ア。言葉遣いには気をつけるよ？ 俺は教師だぜ？ お前なんて何とでも理由をつけて退学に出来るんだからなア。 調子に乗ってるって何だつて？」

「 くっ……………！」

「 そうそう。素直に聞き分ければいいんだ。 聖森、分かったな？ 放課後、生徒指導室だ」

用件を言い終えると低俗な笑いを浮かべて去って行った。

「 茜祢。あんな奴のいう事なんて聞かなくていいからな」

「 大丈夫だよ、晃敵さま！ 茜祢、違反なんてしてないよ。きつと誤解ってことですぐに終わるよー」

的外れな解釈に晃敵は思わず声を荒げそうになる。

「 バカッ！ あいつは校則違反なんてどうとも思っていないんだ！？」

あいつは茜祢を」

戸梨の邪な真意を伝えようと捲くし立てる晃敵だが、茜祢の笑顔によって制された。

「 大丈夫だよっ！ そんなことより、早くお弁当食べにいこう

よー」

「…………。ああ。そつだな…………」

「うん！」

晃蔵は今、不安定な心を茜祢に継ぐことで辛うじて安定を保っている。しかし晃蔵はその時、ある重要なことを見落としていた。

依存とは依存すべき対象を失った時に想像の範疇を超えた反動を引き起こす諸刃の剣だという事にも気付かぬまま　　晃蔵は茜祢にその身を委ねてゆく…………。

その日の放課後、部活に赴こうとしていた晃蔵に茜祢が声を掛けた。

「　刹那ちゃんの様子を見てこようと思うの」

「刹那の家を知ってるのか？」

「え…………。あ…………うん。お話している内に聞いたんだよ。今度、晃蔵さまにも教えるね」

どことなく齒切れの悪い茜祢の返事に、晃蔵は妙な違和感を覚えた。しかし問い質すほどの勇氣はなく、無難な言葉を継いだ。

「それなら俺も　　」

　一緒に行く、と言い終えるより早く茜祢が口を開いた。

「茜祢だけで大丈夫だよ　　女の子同士の方が話しやすい事もあると思うから、今日は茜祢が行ってくるよー。この次は晃蔵さまも一緒にいこうね　　」

　そこまでハッキリ言われてしまうと返す言葉がなく、晃蔵は渋々頷くしかない。

「晃蔵さまは部活頑張ってるね！　行ってくるね　　」

　元気よく手を振って茜祢は学校を後にした。その後ろ姿を見送ってから晃蔵は部活へと赴いた。

「　　すまないな梅原。後片付けを押し付けちゃって」

　部活が終わり、他の部員が全員帰った頃、主将が晃蔵に話しかけ

てきた。

「いえ。俺はいつも途中で抜けたり早く帰ったりしているので、たまには片付けくらいさせて下さい」

「悪いな。じゃあ頼んだぞ。終わったら鍵は職員室へ返しておいてくれ」

そう言つて主将は晃蔵に道場の鍵を投げてよこした。

放物線を描いて落ちてくる鍵を軽くキャッチして、

「はい。分かりました」

と、微笑混じりに返す。主将は暑苦しい顔で精一杯爽やかな笑顔を作つて道場から出て行つた。その後、作業を再開した晃蔵が後片付けを終えるまで、案外時間が掛かったのだった。

「よしっ、片付け終了！ あとはこの鍵を返せばいいんだつたな」

モップを所定の場所に戻し、ポケットから鍵を取り出す。時計を一瞥すると時刻は既に十九時を過ぎていた。道場の中からも校内に生徒がいない雰囲気を感じられるようだった。カバンを手に道場を出て、施錠する。その足で職員室へと向かった。

職員室へと続く廊下を歩いていると『生徒指導室』と書かれたプレートの教室から話し声が漏れている事に気付いた。明かりは点いていない。

「……あれ？ 誰かいるのか？」

恐る恐る教室の中を覗いた瞬間、晃蔵は凍りついた。

「あれは……茜祢！？」

室内が薄暗くてハッキリと判別は出来ないが、暗闇でも光るほどの艶やかな白髪は全校生徒を探しても茜祢しかいないだろう。

しかし茜祢がいる筈がないと晃蔵は自分に言い聞かせる。白髪の少女が話をしていた相手へ視線を移し、晃蔵は目を見開いた。

「戸梨！？ それに鏡も！？」

少女が虚ろな瞳を向けて何かを囁いていた相手は、晃蔵たちの担

任にしてセクハラ教師の戸梨。その隣には篠眼 鏡が佇んでいるという、なんとも異様な光景……。

教室の壁に耳を押し当てれば、少女の声を聞き取ることが出来た。晃蔵は耳を澄ませて少女の声に神経を集中させる。

「低俗で卑しき、罪深い人間よ。その 闇 を我らに捧げ、 鬼 の顕現の糧と成せ」

それは予想の範疇を超えた言葉。様々な疑念や可能性が脳裏で渦巻き、一秒ごとにめまぐるしく変化してゆく。

少女の声を吹き込まれた戸梨の瞳からは正気が失われていた。胡乱な瞳のまま虚空を見つめている。

「やめ……る」

囁きにも満たない晃蔵の声は薄暗い廊下に消える。少女は鏡へと手を伸ばし、白磁のように白い両手で鏡の顔を包み込むと、さきほどと同じように言葉を紡ぐ。

「心から他人を信じきれぬ弱き人間よ。その 闇 を我らに捧げ、 鬼 の顕現の糧と成せ」

その瞬間に晃蔵は言い知れぬ不安に駆られ、教室の戸を勢いよく開け放った。

「やめろおおーっ！」

だが、晃蔵の視界に映っているのは誰もいない静寂に包まれた空間だけ。白髪の少女はおるか、戸梨や鏡の姿すら見当たらない。間の抜けた声が零れる。

「え……？」

「 どうした!？」

ほどなくして宿直の先生が駆けつけてきた。晃蔵は今の事を説明しようかとも思ったが、どうせ信じてもらえないだろうと判断して静かにかぶりを振った。

「……いえ。なんでもありません。これ……道場の鍵です」

「ああ……。確かに預かったよ。今日はもう遅い。早く下校しなさい」

「……はい。……失礼します」

当たり障りのない言葉を返し、晃蔵は学校を後にした。刹那に対しても……茜祢に対しても 拭いきれない疑念を抱いたまま……。

【 四章 】 【 ？ 答 ？ 】

「……ただいま」

「1」

陰鬱な気分で家に着いた晃蔵は、日頃の習慣から自然と挨拶が口に出る。すると待ち構えてでもいたように茜祢が柔らかな笑みを湛えて飛び出してきた。

「晃蔵さまっ！ おかえりなさいなのー」

その表情からはどう見ても、先刻目撃した白髪の少女とは似ても似つかない。単に杞憂で済んだことに晃蔵は胸を撫で下ろし、安堵の溜息をつく。

「晃蔵さま？ どうしたの？ どこか具合でも悪いの？」

心配そうに気遣ってくる茜祢を安心させようと、半ば無理にでも笑顔を取り繕う。

「……いや。大丈夫だよ。……それより刹那の様子はどうだったんだ？」

問われた茜祢は僅かに顔色を曇らせ、しかし事も無げに言葉を継ぐ。

「うん！ 大丈夫そうだったよ。……でも、もう少し学校はお休みするみたい」

晃蔵はその変化に気付くことなく、右手で茜祢の頭を撫でながら返す。

「そうか。早く戻って来るといいな」

「……うん。……そうだね」

二人の会話が一段落した頃、座敷へと続く廊下から蔵清が姿を現した。

「晃蔵。帰ったのか。着替えが済んだら私の部屋へひとりで来なさい。……少し話がある」

「おじいちゃん……？」

蔵清の瞳はいつになく深く、その表情の下に何かを隠しているようにも思え、素直に頷いた。

「はい。すぐに」

伝え終わると蔵清は踵を返し、座敷へと戻っていった。素早く行動を開始した晃蔵は早足に階段を駆け上がり、着替えを済ませる。

「茜祢。俺はゲン爺と話があるから、終わるまでここで待つてろな」

「うん！ 茜祢待つてるよ」

聞き分けの良い妹を持ったような気分を味わいつつ、晃蔵は座敷へと向かった。

「おじいちゃん」

「入れ」

僅かな間も空けず、蔵清の声が響いた。

「失礼します」

静かに障子を引いて開け、座敷へと足を踏み入れる。室内は相変わらず薄暗い。息苦しい空気の中、蔵清が口を開いた。

「話とは……我等の使命についてに他ならない」

「……俺たちの使命……」

鸚鵡返しに呟く。

「晃蔵。お前は『鬼抜い』の使命に遣り甲斐を感じておるか？」

蔵清の問いに、晃蔵は今までの戦いを思い出す。先輩や主将のこと。そして『鬼抜い』を行ったことで彼等が元に戻り、自身が救われたような気持ちを抱いたことを……。

実際、鏡には感謝もされた。未熟ながら精一杯『鬼抜い』の使命を果たしてきたつもりもりの晃蔵に迷いはなかった。

「はい」

蔵清を真っ直ぐに見据え、偽りのない答えを返す。

「……」

蔵清はそんな晃蔵の瞳に何を見たのか……肯定するでなく否定するでもなく、ただ低く声を零した。

「晃敵。部屋の中央で構えろ」

「え……？」

突然の言葉に戸惑い、敵清の顔を窺う。

「二度は言わぬ」

「は……はい……！」

慌てて立ち上がり、部屋の中央へと歩み寄った。座敷は広く、ざつと三十畳程ある。天井も高いので小規模な道場風な装いにも見える。晃敵が中央で構えると、続いて敵清も正面で構えた。瞬間、黒衣の影以上の威圧感が全身に突き刺さった。

「ッッ!？」

呑み込まれまいと必死に抗う。一年前、初めて敵清の『鬼抜い』を目撃した時以上の気迫を感じ、晃敵は戦慄を覚えた。あれから日々鍛錬を積み、少しは自分も敵清に近づけたと思っただけに、まさまざと力の差を見せ付けられた衝撃は計り知れない。

一体どれほどの時間が経過したのかすら判らないほど、今の晃敵には一秒が永遠にも思えた。不意に殺気が止み、時間の感覚が正常に戻る。

「ハッ……ハッ……ハッ……！」

肩で息を吐きながらも決して敵清から目を外さない。あまりにも桁外れの気迫を前に、己がどれほど矮小な存在であるかを、晃敵は身をもって痛感させられた。

「判ったか？これが意志の強さだ」

「……意志の……強さ……」

敵清は構えを解き、どこか物寂しそうに言葉を紡ぐ。

「何かを遂げようとする意志が強ければ？力？は自ずとそれに応えてくれる。『鬼抜い』の際、私は必ずこの？意志？を以って臨んでいる。その事を忘れるな。あとは晃敵がどのような意志を以って『鬼抜い』を為すか……ただそれだけだ」

言い終わると敵清はおもむろに右手を差し出してきた。

思いがけない振る舞いだっただため、その意図を量りかねて敵清の

様子を窺う。

「手を」

言われて初めてそれが握手だということに思い至り、殺気にあてられて汗ばんだ手を拭ってから恐る恐る差し出し、蔵清の大きな手を握った。

「お前には苦勞をかける。この先、困難がお前の前に立ちはだかりし時『梅原』の名を訪ねよ。きっと力になってくれるであろう」

「おじいちゃん……？ 何を言ってる」

しかし、それ以上の追及は蔵清が放つ気迫によって抑え込まれ、晃蔵は口を噤んだ。

「話は終わりだ。部屋に戻りなさい」

元の場所に座り直し、静かに瞑想するような姿勢でそう告げた。

「……。はい。失礼します」

蔵清の言葉に従うよりほかに晃蔵は、怪訝な思いを抱いたまま、座敷を後にした。廊下に出た晃蔵はひとりごちる。

「俺の……意志 か」

晃蔵には蔵清の言わんとしている事が、朧げながらも判ったような気がしていた。『鬼祓い』を行う上で常に意識に置いていること。それは。

「俺は人を 鬼 から救いたい……！」

晃蔵の静かな決意はただひとり 蔵清にだけ届いていたのだった。

その夜。

晃蔵は茜袴と夕食を供にした。蔵清は片付けたい作業があるらしく、自室に籠もったまま、結局晃蔵たちが食べ終わっても出て来ることはなかった。それから晃蔵の部屋で一息つき、今に至る。

「晃蔵さまっ！ お風呂だよ。今日も頭洗ってあげるね」

そんな茜袴のいつも通りの言葉でも、昨日までの晃蔵なら少なくとも動揺していたものだった……。しかし今日は様子が違った。

「……ああ。行くところか」

どこか思い詰めたような……そんな雰囲気漂っている。

「うん！」

晃蔵が思い詰めたような空気を漂わしていた理由は、脱衣所で判明する。今までは恥ずかしさから、茜祢にバスタオル着用を条件に、一緒にお風呂に入ることを了承し、明確に一線を引いていた。しかし。

「茜祢 今日からバスタオルは……着けなくてもいい」

晃蔵はハッキリと、そう告げた。自らの申し出を自身が取り払ったのである。既にバスタオルを巻き終えていた茜祢は、思いがけない一言に、ただ静かに晃蔵を見つめている。

「俺は茜祢のことをもつとよく知りたい……。今まで俺は茜祢と一線を引いてしまっていたんだと思う」

一言、一言……晃蔵は確固たる思いを籠めて言葉を紡いでゆく。

「茜祢は俺を守りに来たんだっただよな？俺も一緒だ。気がついたら茜祢の存在が俺の中でとても大きくなっていったんだ。大切にしたい……失いたくないって思うし、なにより俺は茜祢を守りたいんだ」

「！」

晃蔵の言葉に、茜祢は一瞬顔をしかめた。それは決して拒絶ではなく、頭痛を我慢しているような仕草……。一呼吸置いて、さらに続ける。

「だから俺は茜祢のありのままを見ていたいんだ！」

もう晃蔵の顔が羞恥に染まることはない。

己の想いを告げ、晃蔵の中で何かが変わってゆく。晃蔵の真っ直ぐな想いを受けて、いつもは平然としている茜祢の方が頬を赤らめている。

「！？」

予想外の反応に晃蔵は戸惑う。だが、一度口にした事を撤回出来るほど、晃蔵は器用な性格ではない。微妙な空気が脱衣所を包み込む。

取り敢えず浴室に入ろうかと切り出そうとした時、茜祢が言葉を紡いだ。

「嬉しい」

愛慕の念にも似た声が響いたかと思えば、茜祢は身を包んでいたバスタオルから手を離れた。バスタオルはするりと茜祢の肌から離れたことにより、一糸纏わぬ姿が現れた。

普段目に見えている肢体からも窺える、マシユマロのように白く柔らかそうな肌に晃蔵は魅入っていた。そこにやましい思いはなく、ただ純粹に、美しいものを見た時と同じ崇敬の如き眼差し……だが。

「なっ!?!」

眼前の美は完全ではなかった。不意に飛び込んできた光景に驚愕の声が零れた。お世辞にも豊満とはいえないなだらかな丘陵の間に一筋の傷痕が走っている。さながら自らの心臓を抉り出そうとでもしたかのような……そんな痛々しい傷痕。そこで晃蔵は己の不甲斐なさを思い知った。

茜祢は初めてお風呂に入る時から、この傷痕を晃蔵に見られることを厭うような素振りは見せなかったのだ。それはひとえに自分に対する信頼の表れであつたに違いない。晃蔵はそう考えた。

だが晃蔵は、単に恥ずかしいという理由だけで茜祢から一線を引き、彼女の想いに今この瞬間まで気付くことなく過ごしていたのである。突如として込み上げてきた後悔の念に、晃蔵は歯噛みして己を呪った。しかし、それでも茜祢の態度は今までとなんら変わりなく、優しい微笑みを浮かべて手を差し伸べてくる。

「さあ、晃蔵さま。早く入ろっ」

今の晃蔵が茜祢の想いに報いてやれることはなにもない。

ただひとつ、この場で報える事があるとすればそれは ありのままの姿をその瞳に焼き付け、茜祢を本当の意味で受け容れることだけ。だから今は言葉はいらない。その想いを胸に晃蔵は短く返した。

「ああ」

それから晃蔵は昨日までと違う感覚の中で、茜祢と一緒に風呂に入った。お互いに頭を洗い合い、背中を流し合った。一通りキレイになり、二人で満員の湯船に浸かって和む。手を伸ばせば相手の頭に触れるほどに近い。やがて、しばらく続いていた沈黙を茜祢が破った。

「ねえ……晃蔵さま……？」

「うん？」

天井を向いたまま目を瞑り、危うく眠ってしまいそうになっていた晃蔵は努めて平静を装った。

「茜祢ね……ときどき自分が人じゃなくなったような……怖い光景を見るの……」

「人じゃ……なくなる？ あの悪い夢の事か？」

「……うん。……その光景がね……すごく怖い……」

湯船の中で茜祢は自分の体を抱いた。幾度となく？怖い？という光景から自身を守るように……。

「茜祢。大丈夫だ。俺がいるだろ？ どんな恐怖からも俺は茜祢を守るよ」

必死に己の体を抱く茜祢の頭に手を伸ばし、優しく撫でる。

「晃蔵さま……」

呟いて視線を向けると、僅かに上体を寄せてきた。場の流れで晃蔵は、茜祢の華奢な体をその腕にしっかりと抱き締めた。湯船の温かさだけではない、確かな温もりが 晃蔵の心に深く沁み込んでゆく……。

「 晃蔵さまっ……！！」

途端、自分以外の誰かに抱き締めてもらえたことで感情の堰が切れたのか、茜祢は嗚咽混じりに、声量の程度も気にすることなく想いを溢れさせた。

「 茜祢は……生き……たいッ……！ あんな怖……い……光景は……見たく……ない。人じゃ……なくなる自分が……怖いよう……」

…晃蔵……さまあ……っ！」

いつの間にかその双眸からは涙までもが、とめどなく流れていた。腕に温かな水を受け、晃蔵は抱き締めている両手に一層の力と想いを籠めた。

「……茜祢は俺が守るから……ッ！ たとえ茜祢がどんな姿になるうとも……！」

感じたままの想いを耳元で囁く。そこで茜祢は涙で腫れた顔を上げ、晃蔵の瞳を上目遣いに覗き込む。

「……ホント？」

その時の晃蔵は、茜祢が紡ぐ言葉の真意を量りかねていた。しかし、これ以上茜祢を不安にさせたくない一心で、晃蔵は言葉を重ねてゆく。

「……ああ、ホントだ。約束する……！」

「嬉しい……。あれ？ あれ？ ……おかしいな……嬉しいはずなのに……涙が止まらないよ……どうして……かな……？」

それは嬉し泣いていうんだよ。

そう伝えたい思いに駆られた晃蔵だったが、嬉しくて涙を流した事のない茜祢の過去を思うと、言い知れぬ哀しさを覚えたのだった。「泣いていいんだ。悲しい時も……嬉しい時だって 泣いていいんだ……！」

「うん……！」

そうしてしばらく、晃蔵は深い感慨に浸った その時！

「ッ！」

浴室の向こうで砂利を踏みしめたような音が、晃蔵には聞こえたような気がした。泥棒か何かだろうかと、晃蔵は急いで風呂から上がる。

「茜祢。俺はちよつと様子を見てくる……！」

言うのが早く、晃蔵は脱衣所に出てズボンを履くと、上半身裸のまままで浴槽の裏手へと回った。

「誰もいないよう ん？」

ちょうど砂利の音がした辺りで何かが爪先に当たり、金属音が響いた。気になって拾い上げてみる。幽かな月明かりで手にした金属を視界に捉えた瞬間、晃蔵は驚愕に目を見開いた！

「……これは……！？ 刹那のプレスレット……！？」

浴室の裏手　砂利音が響いた辺りに落ちていたのは茜祢が刹那に上げた黒のプレスレットだったのだ。

ということは、浴室の裏手に潜んでいたのは刹那なのか。仮に刹那だったとして、プレスレットを落としていったのはワザなのか。様々な疑問が泡のように湧き起こる。

しかし現時点では、いくら考えようが答えなどである筈もなく、晃蔵は仕方なく部屋へと戻ることにした。　晃蔵が部屋に戻ると茜祢は既に風呂から上がっていた。

「……どうだった？」

不安そうな表情で尋ねて来る。プレスレットのことはひとまず伏せておく事にして、晃蔵は無難な答えを返した。

「……。なんてない。野良猫だったよ」

「そうなんだ。よかったね」

微妙な間に、見透かされているような錯覚すら覚えたが、それでも隠し通した。

「明日も早いことだし、今日はもう寝よう」

「刹那ちゃん、明日もお休みなのかなあ……。　茜祢のお弁当また食べてもらいたいよお」

「刹那にも事情があるんだろ。用事が済めばまた学校に来るよきつと」

「うん……そうだね」

「ああ」

晃蔵の言葉に納得したのか、茜祢はトテトテとベッドへとよじ登り、布団に潜り込むと、しばらくして「ぶはっ」と枕元から頭を出して晃蔵へ視線を向けた。

「　晃蔵さまも早くお布団に入ろうよー」

「はいはい。……そう急かすなよ」

軽い反論を口しながら晃蔵もベッドに入った。

その日の夜。

晃蔵は刹那に対する不安は拭い去れない気持ちの一方で、茜祢に自らの想いを打ち明けられた事で、幾分の安らぎを覚えていた。

茜祢と寝食を供にしてから初めて、晃蔵は茜祢と共に眠る事に、心からの安眠を得ることができたようであった。

刹那と三人で弁当を囲むくらい楽しい夢でも見ているのか、晃蔵の表情はとても穏やかなものだった……。

「2」

一方その頃。

「貴様二、梅原晃蔵八、殺させナイ！」

「其ノ命、此ノ場デ葬ル！」

「其レガ、我等ノ、使命！」

禱雅町の南部。人里離れた山間で、三体もの白衣の影が闇夜を舞っていた。

「目障りな 鬼 どもめ！ やはり梅原晃蔵の差し金か。返り討ちにしてくれるわッ！」

直後、夜の空から降り注ぐ月の光を受けて一振りの黒刃が煌いた。切っ先から柄頭に至るまで全てが漆黒に染められた刀を振るう者は紛れもなく刹那であった。だがその瞳には普段の少女らしいあどけなさは微塵もなく、修羅さながらの形相が浮き出ている。

「よくもパパを殺したなッ！ 貴様等 鬼 を 私は絶対に赦さないッッ！」

悲痛な咆哮を上げ、刹那は黒刃を煌かせる。ただ本能のまま、最愛の存在 那斬の死を悼むように……ただただ黒刃を 鬼 の心臓へと滑り込ませてゆく。その度に血飛沫が舞い散り、刹那の全身を赤く染め上げた。

刹那は鮮烈なほど華麗に、殺意が渦巻く戦いの最中を舞い躍った。命を絶たれた 鬼 はことごとく碎け 塵と化する。後に残っ

たむせ返るほどの血の香りが充満する室内で、刹那は咆哮にも似た慟哭を上げた。

「梅原晃蔵ッ！　パパを殺したお前を　私は絶対に赦さないッッ！」

晃蔵を？お前？と呼ぶ刹那の心にはすでに、？友達？の文字は消え失せてしまったのだろうか……。腹の底から憎しみを絞り出すように慟哭している刹那本人　その事に気付いていないのかも知れない……。

「違う……　晃蔵は悪くないッッ！　晃蔵は……悪く……　いやあ　ああああーッッ！」

否。刹那は忘れてなどいなかった。

ただ、自身の中で渦巻くもう一つの感情に……刹那の心は支配されようとしているのだ。

黒い感情に抗おうと、握り締めた手から零れ落ちる鮮血が……まるで刹那の涙であるかのように輝いていた。

「……梅原晃蔵を　殺す……！」
夜はこれから、深く昏く　その姿を変えてゆく……。

次の日。

朝から空には暗雲が垂れこめていた。何か不穏な気配を感じながら、晃蔵は学校へと赴いた。ほどなくして晃蔵が感じた嫌な予感、不気味にも的中することとなる。

朝のホームルームで、昨日の出来事を裏付けるような連絡が、副担任の口から告げられたのだ。

それは担任の戸梨と篠眼　鏡の突然の失踪であった。その言葉を聞いた途端、晃蔵はどうしても茜祢の事が気に掛かって仕方がなかった。

だが昨日、茜祢の事を守ると誓った手前、無闇に疑うワケにもいかない。

不意にまだ鏡と一度も遊んですらいないという未練が渦巻く。

茜祢を信じたい気持ちと疑心を同時に抱いたまま、晃蔵の思考は次第に底なし沼へと引き摺り込まれてゆく。

空を覆う暗雲からは、冷たい雨が零れ始めていた……………。

同日、深夜。

晃蔵は不審な物音で目を覚ました。

「あれ…………茜祢？」

隣で寝ているはずの茜祢の姿がない事に不安を覚え、晃蔵は階下へと向かった。茜祢はすぐに見つかった。玄関の前に佇み、ぼんやりと虚空を見つめている。

「どうした、茜祢…………トイレか…………？」

晃蔵も半覚醒状態なのでどうも思考がハッキリとしない。それでも辛うじて会話は出来た。

「…………うん」

「そっか…………じゃあ部屋に戻ろう。こんなところにいたら風邪ひくぞ」

「…………うん。お休み…………」

そういうと茜祢はふらふらと階段を上り、晃蔵の部屋へと戻っていった。

「…………？」

不意に廊下の向こう　　蔵清の座敷がある方向から、妙な気配を感じたような気がした晃蔵だったが、寝惚けている所為もあり、大して気に掛けるでもなく、茜祢に続いて部屋へと戻る。

晃蔵は茜祢の異変に気付くことなく、再び眠りに落ちていった。

晃蔵が階下へと下りてきた、まさにその頃！

蔵清の部屋では晃蔵の察した通りの事態が静かに起こっていた。

「ぐっ…………貴様に機先を制されるとは…………不覚…………。ぐはっ…………。

よもや夜襲とは　　いよいよとなって血迷ったか…………！」

「ふおっふお。誰も血迷ってなどおらぬ。言っただけじゃ、妾は？　すべきことを行っておるだけじゃ？との」

「……この 鬼 め！」

ありつただけの侮蔑を籠めて蔵清は言葉を吐いた。

「左様。そして其方は弱き人間じゃてのお。ふおっふお」

「古から続きし我等の行く末が変わる時が来おつた……？機？は満ちたのじゃ！」

「……？機？……だと……？」

蔵清の問いに老婆は悪辣な笑みをはり付かせて返す。

「ふおっふお。今から死に逝く者に申しても仕方なかるうてのお。

けど、まあよかろう。せめてもの冥途の土産にちいとばかり明かしてやるわい」

「……」

蔵清は黙したまま老婆の言葉を待った。

「……？機？とは我等が抱えておる？異なる者？ それぞれの接

触にあるのじゃ。我等は 鬼 を 護る 一族ならば、其方等の存在は古より疎ましかつたのは言わずもがなじゃ。されど、時は去り行き多くの一族が此の世から消滅していった。無論、其方等の一族のお」

そこで言葉を区切り、老婆は蔵清の巨軀を傍の壁へ軽々と放り投げた。間髪を容れず手にした純白の刀で蔵清の左肩を貫いた。

「……ぐあっ……」

苦悶の声が漏れる。その姿に愉悦を浮かべ、老婆は言葉を継いだ。

「機は我等一族に傾き始めた。故に我等はじつと機を窺うことにしたのじゃ。そして現在より二年前 奇妙な出来事が重なつたのじやよ。その事は其方もよく知っておろう？ 本来ならば始末されるはずであつた 鬼 が、どういう運命の悪戯か生き延びたのじゃ。

限りなく人間に近し心を宿した 異なる鬼 それがあの子たちなのじゃ。もつとも、茜祢は何も知らぬがお。あの子は『鬼護り』として不完全。故に危険分子だと判断したのじやよ」

「道理で様子が……おかしいワケだ……。貴様……あの子に精神操作をかけたな……！？」

「左様じゃ。鈍感な其方でも気付いたか……ふおっふお。結構な事じゃな」

老婆はそこで口を閉ざす。壁ごと貫かれた敵清に、侮蔑するような眼差しを向けている。

「……貴様等の……目的は……なんだ……？」

辛うじて繋ぎとめている意識の中で、敵清は問うた。対する老婆は、一向に絶命しない敵清に若干の苛立ちを覚えたのか、刀を差したまま捏ねくり回した。

「……ぐああっ……！」

声を押し殺して叫ぶ。

「……まあよかろう。我等の目的は、我等 鬼 に新たな未来を示すことの出来る？力を探し出すことじゃよ。……それが我等の悲願でもあるのじゃ」

老婆の言葉に敵清は己の耳を疑うように目を見開いた。

「……莫迦……な……！ ならばなぜ……例の話を反故にした……！？ それなら……私と……目指す道は……同じのはず……だ……なぜ……だ……答え……ろ……！」

切れ切れに紡ぐ敵清の言葉に、老婆は嘆息を零し、平然と言つてのけた。

「 不安要素は排除するに越したことはなかるう？」

「……ぐっ……貴様……！」

老婆の容貌が、さながら鬼の如くゆがんでゆく。

「……尤も明確な理由は別にあるのじゃよ」

「……なに……？」

老婆は冷然と言葉を継ぐ。

「妾が目指す道が 鬼 にとってプラスならば、其方はマイナス。

……歩む道は同じ……されど辿り着く果ては相反し、決して交わることはないのじゃよ」

「……そんな道に……救いなど……ありはしないぞ……！」

最後の気力を振り絞った言葉は、空しく虚空に溶けて消えた。

「長く喋りすぎたわい。……あとは妾に任せて、其方はゆるりと休んでおくがええ」

次の瞬間……！

ゾンッ

空気を引き裂いたような音と共に 蔵清は歸らぬ人となった……。

翌朝。

昨日の暗雲が雨雲に変わり、朝から雨が降りしきっていた。雨音で目を覚ました晃蔵の脳裏に、嫌な予感がよぎる。ふと横へ視線を向けた瞬間、晃蔵はギョツとした。なんとシーツや掛け布団が血で真っ赤に染まっていたのだ。慌てて階段を下りて洗面所に駆け込む。するとそこには、明らかに血を洗い流したような痕跡が見受けられた。

「……………これは……………」

「あ！ 晃蔵さまっ、おはようなの」

不意に菜箸を持った茜祢が洗面所に顔を出した。

「……………茜祢」

横目に視線を投げて、言葉を継いだ。

「茜祢……………ここで何を洗ったんだ？」

晃蔵が訊くと茜祢は引き攣ったような笑顔で返す。

「鼻血が出ちゃったみたいなの……………！ 朝起きたら全身真っ赤だったからビックリしたんだよ。……………お布団汚してごめんね。……………洗濯すれば落ちるかな？」

茜祢にしては珍しく、明らかな嘘をついていることに晃蔵は気付いていた。しかしそれ以上追及することはせず、「……………多分落ちるよ」とだけ答えた。それから晃蔵は着替えてから朝食を作り始めた。ほどなくして朝食の準備が出来た頃になっても、蔵清は食堂に姿を現さなかった。恐らく朝食は後で摂るんだろうと考えながら、一応声くらいは掛けておこうと思ひ、晃蔵は座敷へと向かった。

座敷の手前……縁側から見上げた空は陰鬱なほど暗く重たい。全身に圧し掛かるような重圧を振り払うように、晃蔵は先を急いだ。座敷の手前まで来た瞬間、晃蔵はむせ返るようなおいに気付き、顔をしかめた。嫌な予感が脳裏を駆け巡り、脂汗が額に滲む。座敷の障子を開けるなど本能が警鐘を鳴らした。

それでも晃蔵の手は止まらない。意を決して障子に手を掛け、一気に開け放った！

「なっ!？」

入口の正面　小さな床の間に飾られた掛け軸の前に　無惨にも絶命した蔵清の姿があつた。凄惨な光景にも、晃蔵は叫び声を上げない。なぜなら近頃の言動から、不穏な気配は薄々感じていたのである。

だがその懸念が、こんなにも早くに訪れるなどとは　微塵も考えていなかった。

晃蔵はすぐさま食堂へ引き返し、茜祢に先に学校へ行くようにと告げた。今はどうしても独りになりたい気持ちで晃蔵を駆り立てていた。晃蔵の言葉に茜祢は素直に従い、早々に登校した。再び座敷へと戻り、現状を整理する。家は窓や扉のすべてが施錠されており、破壊された形跡は見受けられなかった。家の中には蔵清を除き、晃蔵と茜祢しかいない。現段階で浮かび上がってくる、蔵清を殺害した犯人は　。

「茜祢……なのか？　……そういえばさっきの血はまさか!？」

そこで一旦思考を中断し、血のにおいが充満する座敷へと足を踏み入れた。蔵清の体を引き摺って部屋の中央へと運び、仰向けに寝かす。一応脈を取ってみるが、やはり蔵清は死んでいた。

「嘘だろ……。あの化け物みたいに強いゲン爺が殺されるなんて……。一体誰が……!？」

晃蔵は信じたくないといった表情で呟く。

何か手掛かりはないかと、唯一可能性がありそうな机の周りを漁ってみた。が、大した手掛かりは見つからなかった。

「くそっ……！」

焦りと苛立ちばかりが募ってゆく。

「……ん？」

ふと巖清の血を浴びてすっかり黒ずんでしまった掛け軸が目に残った。その瞬間、かつて巖清がその掛け軸について幾度となく語っていたことを思い出す。今考えれば異様なことであった。

巖清は決して他人に自分の持ち物を自慢するような真似は決してしない。ならなぜ、晃巖に掛け軸の話をしたのだろうか……。思いがけない取っ掛けかりを得た晃巖は早速掛け軸を外して入念に調べ始めた。

すると掛け軸の裏側に一枚の手紙を見つけ、慌てて引き剥がす。封筒には何も記されておらず、晃巖は中に収められている手紙を取り出した。

掛け軸から染みたとみられる血が手紙にも付着しており、ところどころ黒ずんでいたり張り付いていたりしたものの、なんとか広げることが出来た。

筆跡は確かに巖清のもの。晃巖は文面に視線を走らせる。

【晃巖へ。これを読　でい　いうことは、私　恐らく殺　たのであろう……。】

の命を狙つ　者がいる事を　に　えようと、この手紙を書い　。

その者　名は　という。　祖なる　の……。心して掛かれよ。

私が伝　言葉の　味をよく考え、お前にしか為せ　を遂げ

よ。　巖清】

所々血が黒ずみ読み取れなかったが、晃巖はおおよその意味を理解したつもりでいた。手紙を握り締め、好きだった巖清を殺した者への憎しみの念を滾らせる。

「……赦さない……。ユルサナイ　ッ！」

晃巖は巖清の死を茜祢には黙っておくことに決めると同時に、茜

祢が犯人であるという可能性を思考から切り離した。それは茜祢を守ると誓ったことに対する想いからくる感情なのか……それとも……。

その日、晃蔵は学校を休んだ。運命の歯車は終幕に向けて鈍い軌りを上げ続けていた。

「3」

翌朝。

晃蔵は心にささくれを持ったまま過ごしていた。朝食を摂り、茜祢を座敷に近づけさせないように注意を払いながら、家を出た。晃蔵の目的はただひとつ。蔵清を殺した犯人を捜し出すことだけ。そのことばかりに頭を使っていた晃蔵は、授業中はおろか弁当の時間でさえ、いつかの刹那と同じ……。

茜祢は心配そうな表情を浮かべていたが、声を掛けることは躊躇われたのか、結局最後まで会話が交わされることはなかった。

晃蔵の不調は放課後になっても直ることはなく、部活を休んで茜祢と一緒に帰ることにした。しばらく歩いた頃、ずっと続いていた沈黙を破ったのは茜祢だった。

「晃蔵さま……どうしたの？ 顔が真っ蒼だよ？」

「……。別になんでもない……」

「悩みとかあったら話してね。茜祢は晃蔵さまを護るんだからっ！」
それは他愛ない会話。悪く言えば上辺だけの……単なる気遣いだけのやりとり。

蔵清が殺された衝撃で半ば放心状態となっている所為で、茜祢の言葉はほとんど届いてはいない。

後に続く会話もおそらく変わり映えしないものだろうと、晃蔵は思っていた。

しかし、茜祢が口にした次の言葉で、晃蔵の意識は急激に引き戻されることになる。

「お爺様が亡くなられて悲しいのはよくわかるよ。……だから元気出してね」

「……ッ!? 茜祢……。今……。なんて言ったんだ……?」

「確か巖清の死は茜祢に話していないはず……。座敷にも近付かせていない。なのになぜ 茜祢は巖清の死を、あたかも当然のように口に出たのか。」

晃蔵の脳裏に、せつかく切り離れた可能性が音を立てて舞い戻ってくる。上の空だった意識から一転 晃蔵は疑念の眼差しで茜祢を見つめ続けた。

「どうしたの? 晃蔵さま。茜祢、何も言っていないよー?」

「ッ!?!」

あろうことか茜祢は、今自分が口にした言葉を覚えてはいないらしい。とぼけているような気配はなく、ただ単純に記憶にないという面持ち。

複雑な思いで茜祢を窺いながらしばらく歩き、歩道橋にさしかかった。

この場所が、初めて茜祢と出会った場所だと、晃蔵はふと思い出す。

橋の中ほどまで歩いたとき、茜祢が震えた声音で問うた。晃蔵は一言一句聞き漏らすまいと、意識を集中させる。

「茜祢ね、昨日も怖い光景を見たの……」

茜祢は三日前の入浴の時と同じように、自身の体を強く抱き締めている。晃蔵はそつと、茜祢の小さな体を包み込むように……。その肩を抱いた。

「大丈夫だ……。怖くなんかない。俺が茜祢を守るって言っただろ?」
それは偽りない晃蔵の想い……。たとえ疑念が心の中で渦巻いていようと……。晃蔵は茜祢を信じ続けると、固く己の魂に誓っていた。

「嬉しい。晃蔵さまが茜祢を信じて……。支えてくれるから茜祢は勇気を持てる。茜祢が知らない……。もうひとりの茜祢がいるような恐怖にも負けにくいくらいの勇気を……!」

「……茜祢」

茜祢は晃敵の胸に顔を埋めて熱い涙を溢れさせた。

こんなにも小さな少女が恐怖に打ち克つ勇氣を持てたのは、晃敵の……温かで不器用ながらもひたむきな心に 己の心を委ねることができたからなのかも知れない。

「だから茜祢は、晃敵さまの悩みを 受け止めたい……！」

茜祢の揺ぎ無い確固たる想いを受け……晃敵は意を決する。

どんな結末が訪れようと、茜祢を信じ、守るのだと……改めて心に刻んだ。

そして晃敵は茜祢に敵清の死を告げた。

「 えっ！？ お爺様が殺された！？ 殺された……殺された……？ 」

晃敵の言葉を聞いた瞬間から、茜祢は異様なまでに狼狽を極めた。視点が定まらず虚空を彷徨っているようにも思える。

「 殺された……？ 殺した。茜祢が殺した……茜祢が殺した…… 」

さながら精神異常者のように、茜祢はうわ言のように呟く。

「 茜祢！ しっかりしろッ！ 誰も茜祢が殺したなんて言っていないッ！ 」

悲痛な呟きを受けてなお、晃敵は茜祢の体を抱きしめ続ける。次に零れた言葉に、晃敵は耳を疑った。

「 だつて茜祢は 鬼 だから 」

「 な……に……ッツ！ 」

思考が混濁を極める中で、その言葉の意味を理解したくないという思いに、晃敵の脳裏は支配されている。茜祢は虚ろな瞳をしたまま、さらに継いだ。

「 晃敵さま。……茜祢、思い出したよ。茜祢は 鬼 なの。だからお爺様を殺した。なんでつて？ おばあちゃんが邪魔だつて言ったからだよ。学校で起きた失踪事件も茜祢がやったんだよ？ 先生と男の子を茜祢が 鬼 に喰わせてあげたの……！ おばあちゃんにたくさんほめられたんだよ？ 茜祢は良い子だね……って 」

茜祢が滔々と紡ぎ続ける言葉に、晃敵の思考は混乱を極める。受

け容れ難い異物として、脳が拒絶反応を示すばかり。

そんな晃蔵のことなど、茜祢はまったく意に介さない。

「どうして茜祢が？人？じゃない光景を見るのか……やっと分かった。茜祢は 鬼 だからなんだね……。誰かと？友達？になっても、いつかは 鬼 に喰わせなきゃいけないの。喰われた？友達？はそれまでの記憶を失っちゃうの。……そんなのはもうイヤ。だから茜祢は？人？として生きて、本当の？友達？を作りたいのっ！」
それは晃蔵にとって、あまりにも信じがたい告白であった。茜祢が 鬼 だったという言葉に、晃蔵の世界は大きく揺らぐ。果たして今のはすべて真実なのか。

答えを求めるより先に、晃蔵の心の底で「真実だ」と何かが叫ぶ。その声の正体すらも判らず、ありとあらゆるものがごちゃ混ぜとなった晃蔵の脳裏に、冷然とした声が響いた。

「見つけた」

たったそれだけの一言ですら、聞いた瞬間に戦慄を覚えるような……威圧的な声音。

慌てて振り向くと晃蔵たちが上ってきた階段の前に その少女は佇んでいた。

「……刹……那……ッ！」

瞬間 晃蔵は蔵清が遺した手紙の文面を思い出した。誰かに狙われていると蔵清が記したあの一文……。

晃蔵の中でドス黒い感情が……ひとつの明確な形となりつつあった。もはや手段などは思考の埒外。

今はただ、己の内に生じた憎しみの眼差しを刹那へと向ける。

いつしか蔵清殺害の疑念は刹那へとすりかえられていた。

「刹那……ちゃん？ 刹那ちゃん……！ 茜祢たちはずっと？友達？だよな……！？」

晃蔵と刹那が睨み合う最中、茜祢の縋るような……祈るような声が零れた。普段の刹那なら抑揚のない口調で無愛想ながらも「……友達」とでもいいような場面。

だが、茜祢の耳に返って来たのはあまりにも辛辣な敵意であった。

「黙れ！ 自分だけ幸せになろうとしているお前など……？ 友達？ でもなんでもない！」

「刹那ッ！？」

記憶の中の少女からは到底想像もつかない物言いに、晃蔵は心臓を握り潰されているかのような錯覚すら覚える。茜祢は虚ろな瞳で刹那を見据え、おぼつかない足取りで刹那へと歩み寄ってゆく。

「茜祢！ ダメだ！ そいつはもう今までの刹那じゃないッ！ 危ないから戻れ！」

「……うつん……刹那ちゃんだよ……！ 茜祢の？ 友達？。刹那ちゃんは忘れてるだけなんだよ。今……茜祢が思い出させてあげるね……」

今にも消え入りそうなほどか細い声を零し、カバンから何かを取り出している。

「……あれは……弁当箱……？」

ついこの間まで三人一緒に囲んでいた……今となってはかけがえない思い出が詰まった弁当箱だ。

茜祢は大きな弁当箱を両手に持ったまま歩み寄り、刹那の目の前に差し出した。

「ほら。みんなと一緒に囲んだ弁当箱だよ。明日はまた刹那ちゃんが好きなのサンドイッチ弁当だよ。なのにもう一緒には食べること……出来ないのかなあ？ ねえ刹那ちゃん」

茜祢の言葉が言い終えるより早く、刹那の右手が払われた。跳ね飛ばされた弁当箱は宙に舞い、歩道橋の隅まで放物線を描いて泳ぎ……そして。

地面にぶつかって砕け散った。

「……あ……」

まるで世界が壊れたような声が、茜祢の口から零れた。

三人の関係は、砕け散った弁当箱のように……

もう二度と、その中に思い出を詰める事が叶わないところまで

来てしまったとでもいうのだろうか……。

その時、茜祢の中で何かが音を立てて崩れ落ちた。

「茜祢ッ！ 来いッ！」

直後、晃蔵は動いた。刹那と戦うにしても場所が悪い。踵を返して駆け出す。

「……逃がさない……！」

晃蔵たちが走り出したのを受けて刹那も後を追う。

誰も居なくなつた歩道橋の隅っこで……

三人の思い出が詰まっていたはずの弁当箱の残骸だけが……
寂しそうに転がっている……。

晃蔵は走つた。脇目も振らず、ただただ走つた。目指すは自分の家。そこが一番戦い易いと思つたのだ。ふと目に留まつた茜祢の瞳には、なにも映っていない様に思えた……。

晃蔵の中で刹那に対する憎悪の想いが一層……募つてゆく。
ほどなくして家に辿り着いた。

「茜祢はここにいろ！」

茜祢を自分の部屋へ隠してから、晃蔵は座敷へと向かう。なぜならそこに……自分が倒すべき相手が待っていると感じたから……。
座敷の戸を開け放つと案の定、そこには刹那が佇んでいた。

「……刹那てめえがゲン爺を……ッ」

「……黙れ。私に 鬼 を仕向けやがつた卑怯者め！ お前こそ……私の最愛の人を殺したくせにッ！ 私はお前を赦さない 絶対に赦さないッ！」

刹那は押し殺していた感情を爆発させた。今までで一番凝縮された殺意を前に、晃蔵は歯を軋ませた。

「…… 鬼 を仕向けただと……？ 俺が誰を殺したって」

聞き捨てならない刹那の台詞に、反論の声を上げた晃蔵だが、
「黙れッ！ お前と言葉を交わす必要など……もはや微塵もないッ

「ッ！」

直後、畳が裂けるほどの強烈な加速から、一気に晃蔵へと肉薄する。煌く黒刃。間一髪 鬼抜刀 を抜き放ち一閃 鋭く斬り返した。

一度身を引いて間合いを取り、タイミングを窺う。その間に晃蔵は右手に意識を集中させ、力を解放してゆく。右手に宿った力は鬼抜刀 を伝い、刀身を紅く染め上げた。

さらに晃蔵は蔵清から教わった？意志の強さ？を 鬼抜刀 に籠めるといふ試みに出たのである。さらに意識を集中させる。

だがそこで、刹那の黒刃が挟まれ、力の生成を阻害する。互いに致命足り得る剣戟を繰り広げ、相手の一閃を紙一重で躲す。

晃蔵は動けば動くほど……刀を振るえば振るうほど 戦いに必要な感覚が研ぎ澄まされてゆくような酔い心地すら覚えていた。甲高い金属音が薄暗い座敷に反響し、耳鳴りを生じさせる。双方の切っ先が互いの肢体に赤い線を走らせる。それは力が拮抗し、熾烈な駆け引きが行われている証拠に他ならない。

間合いを取った隙に、晃蔵は力の生成を再開させる。この時、晃蔵は？意志の強さ？を誤った方向に練り上げてしまった。本来の晃蔵とは間逆の 相反する感情の発露。

その名は？憎悪？。

蔵清を殺されたことに対する、刹那への明確な憎悪の念が、晃蔵の眼を曇らせた。昏き闇は、迷い込んだ者の心を搦め捕る。

晃蔵の心は今まさに、黒き感情に囚われていた。その事に気付く術もなく……晃蔵は生成した？意志？を 鬼抜刀 へと注ぎ込んだ。

すると鮮やかな紅に染まっていた刀身が徐々に深さを増していき、やがては黒に近い深紅の刀身へと変化を果たした。

それは心の映し鏡。晃蔵の心に渦巻くもつとも深く濃い感情の現れ。確かな力の重みを感じ、晃蔵は憎悪に満ちた力を眼前で構えた。

互いに睨み合い、タイミングを窺う。

二人の間に言葉はない。否……… 必要ないのだ。互いに殺すか殺されるか ただそれだけの戦い。

相手より？意志？の強き者が勝つ 単純にして熾烈な戦い。刹那の容貌が苦悶に歪んでいる。さながら必死で何かに耐えているような……… そんな表情が窺い知れた。

それでも晃蔵は僅かばかりの情けすら、構えた刀に籠める気はない。 次の瞬間！

まるで示し合わせたように、互いが同時に疾走した。

座敷の中央で黒刃と紅刃の煌きが交差する。

双方、渾身の意志を籠めて振るった力の奔流は瞬間的に眩い光を生じさせ、座敷を包み込んだ。

突如として静寂が訪れる。

二人は対極に位置したまま微動だにせず、刀を抜き放ったままの体勢で固まっている。

「……… がっ……… は……… っ！」

途端に晃蔵は苦悶に顔を歪め、畳に片膝をつく。死すら覚悟した緩慢な時の中で、鮮血の噴き上がる音が物悲しく響く。晃蔵の背後で人が倒れる鈍い音がした。辛くも晃蔵に軍配が上がった瞬間である。

深い息を吐き 鬼抜刀 を収めると、振り返って刹那のもとまで歩み寄った。どうやら即死は免れたようだが明らかに致命傷を負っている。助かる余地はない。

「……… 私は……… 負けたの……… だな」

「……… 刹那」

苦しそくに呼吸をしながらも呟く刹那の瞳からは、それまで宿っていた憎しみの色は消え去っていた。かつての刹那と同じ眼差しを受け、晃蔵の心も同じように静まってゆく。

「……… 私は……… パパが殺されたあの日から……… 心が狂い始めた………」
とめどなく血を溢れさせながら刹那は言葉を紡ぐ。

「……そしてパパの側近だった者から明かされた。私が鬼という存在だと……！」

「なッ!？」

晃蔵は驚きに目を見開く。

「パパを殺した相手の……手掛かりは皆無に等しかった。……ただひとつ、柄から垂れた……奇妙な文字が記された布だけが……私の脳裏に刻まれていたのだ……」

「……布……?」

晃蔵は左手に携えた 鬼被刀 の柄を斜眼に見た。奇妙な文字が記された布が視界に移る。それはお守りだと、いつぞや蔵清は言っていた。

「……お前が二体の 鬼憑き と戦っていたあの日……記憶と同じ、柄から垂れた布を見た瞬間に私の理性は呑み込まれた……」

四日前の放課後。黒衣の影に襲われた時のことを思い出し、晃蔵はハツと息を呑む。

「頭では……お前がパパを殺した奴じゃないと……判っていた。だが、心の底で渦巻く憎しみの念を……抑えることが出来なかった。ただ、復讐する相手を……欲していた……んだろっな」

いよいよとして声が掠れ始めた刹那の悲壮な眼差しに打たれた晃蔵は静かにその手を取った。刹那の右手に触れた瞬間、驚きに目を見開いた。

「……これは!？」

小さくも美しかった手には生々しい火傷が見て取れた。さながら今この時まで、焼けた金属でも握っていたかのような……。

そこまで考えて晃蔵は傍に落ちている刹那の刀に視線を向けた。「それは……パパが『鬼殺し』という仕事に……使っていた。鬼^キ殺^{サト}刀 というそうだ。鬼 である私が扱うには……過ぎた代物だったみたいだ。力の代償として……このザマだ」

晃蔵は自身の刀 鬼被刀 の事を鮮明に思い出す。柄を握るとまるで炎を掴んでいるような熱さを感じていることを……。晃蔵

の脳裏にひとつの可能性が過ぎった。

(……………まさか……………!?)

その思考は刹那の声によって中断される。

「お前も……………私と同じだったんじゃないのか？ けれど心のどこかで私が巖清殿を……………殺していないと……………察したからこそ……………私を一撃で仕留め……………損ねた」

刹那の推測はまさに凶星であった。晃巖も心の片隅では判っていたのだ。刹那が巖清を殺した相手ではないことを。けれど踏み止まれなかった。

それは茜祢を信じたい気持ちと、好きだった巖清を失った悲しみが混ざり合い、心に渦巻く憎悪の念が、晃巖の真実を見る眼を曇らせた。

「……………やはり……………そうか……………。お互い……………不器用な……………性格だ……………な……………」

そう呟く刹那の表情はとても穏やかで、心なしか微笑んでいるようにも思えた。

「……………身勝手なのは承知で……………お前に頼みたい。パパを 闇倉那斬を殺した奴を……………葬って欲しい。それが私の……………最後の願いだ。いや……………もうひとつ……………ある」

何かを思い出したらしく、刹那は言葉を切った。

そして僅かに涙を湛え、継いだ。

「茜祢には……………悪いことをした。茜祢……………を……………悲しませて……………しまった。お前は……………なにがあっても茜祢を信じろ。それはお前にしか……………できない。もう茜祢の……………弁当を食べることは……………出来そうにないな……………そのふたつが……………私の願いだ。頼む……………無念を……………」
必死に涙を堪えている顔を見つめていた晃巖は、おもむろに刹那の頭をその腕に抱いた。

「ばかやろお……………悲しい時は泣いていいんだ。自分の気持ちを押し殺す必要なんてなんだからなッ……………。それに……………？友達？を？お前？って呼んじゃダメなんじゃなか……………ったのかよおっ！」

表情こそ見られてはいないものの、切れ切れに零れる声にはハッキリと嗚咽が混ざっている。

「お前こそ いや、晃蔵こそ……泣いて……いいんだぞ。ふっ……私たちは……つくづく不器用……だな……。やっぱり……茜祢がないと……ダメだな」

晃蔵の胸の中で刹那の笑い声が聞こえたかと思うと、堰を切ったように泣き出した。

もう僕かも生きられない時の中で刹那は泣いた。今まで抑え込んでいた感情が溢れ出し、大好きだった那斬に届けとばかりに……。体中が悲鳴を上げていることも忘れ、晃蔵と一緒に泣き続けた。互いの涙は枯れることを知らないかのように……。いつまでも流れ続けた……。

そして刹那は最期に満面の笑顔を浮かべ、穏やかに言葉を紡いだ。「また明日……学校で……。……買ってもらったプリン……おいしかった」

「ああ……また学校で……。茜祢と一緒に弁当を食べような……！」
晃蔵は刹那の体を力強く抱き締めて、静かに言葉を返す。

刹那が最期に囁いた言葉は、あまりにも平凡で……
ひよつとすると明日、学校に行けば刹那に出会えるような……
そんな錯覚すら覚えたのだった。

そして刹那の体は硝子細工のように碎けて……塵と化した。

絶望にも似た悲しみの後に残ったのは、刹那の力の象徴たる鬼殺刀 と、もうひとつ。

「ん？ これは……!？」

いつかの屋上で茜祢が刹那に贈り、三人お揃いとなった、黒のブレスレットだった。

晃蔵は慌ててポケットから先日拾ったブレスレットを取り出して見比べる。

「……これは贗物……!？ 一体誰が……こんなことを……!」
つまり、刹那が最期まで肌身離さず、懐にしまっていたブレスレ

ツトこそ本物だったのだ。刹那は深い憎悪に心を支配されながらも、心のどこかでずっと茜祢と晃蔵のことを信じ続けていたという証拠に他ならない。

「……刹那……ッッ！」

静寂に満たされた座敷の端っこで、晃蔵は刹那のブレスレットを抱き締めて慟哭した。

しばらくして立ち上がると、鬼殺刀を拾い上げた。

「痛ッ……！」

掴んだ瞬間に耐え難い痛みが全身を駆け巡った。とても握り続けていられないほどの、焼け付くような痛み。

「……刹那はこれほどの痛みに耐えながら……父親のことを想っていたのか……！」

刹那が味わい続けた痛みを共有するかのようになり、晃蔵はさらに強く、鬼殺刀を握り締めた。

「ぐああああ アアッ！」

右腕はおろか、全身が灰燼に帰し、脳すら沸騰しそうな激痛の中、晃蔵は必死に意識を保ち続けた末に、鬼殺刀は晃蔵の手から消失した。

だが、その右手には確かに？力？の鼓動が感じられた。半ば無意識に鬼殺刀を引き抜き？力？を注ぎ込んだ。

すると普段は鋼色で力を注いだ時に紅に染まる刀身に変化があった。

「……黒い……刃……！」

それはまさしく鬼殺刀の煌きであった。晃蔵の想いに刹那や刹那の父親、那斬の遺志が応えてくれたのだと思い、晃蔵の心に熱いものが込み上げてくる。

「……刹那……仇は必ず討つ……！」

晃蔵は蔵清たちを殺した黒幕が誰なのか、おおそよの検討はついていた。

刹那の悲しみをその肩に背負い、すべての決着をつけるべく茜

柝が待つ部屋へと戻る。晃蔵の部屋で茜柝は膝を抱えて小さくなっていた。

たださえ小さな体がより小さいものに見え、晃蔵は寂しさを覚えた。できることならそっとしておいてやりたかった。けど今は、嫌でも動かなければいけない時……。

晃蔵は意を決して茜柝に声を掛けた。可能な限り……力強く。

「茜柝。すべての決着をつけにいこう……！」

「決着……？ 晃蔵さま……刹那ちゃんは……？」

縋るような思いで見上げてきた茜柝の顔は涙でぐしゃぐしゃになっていた。きつと晃蔵が刹那と戦っている間もずっと……独りで泣きじゃくっていたのだろう。アーモンド形の双眸は赤く充血しており、未だ涙を湛えている。晃蔵の表情で最悪の答えを悟ったのか、再び顔を伏せて肩を震わせる。

悲しい時は泣いていいんだ。

そう、茜柝に言ったのは他ならぬ晃蔵自身だ。だからこそ晃蔵は静かに、茜柝を包み込むように優しく抱き締めた。

「刹那はもう居ないんだ。だから心から泣くといい……そうすればきつと刹那に届くから」

せつかく抑えた涙が晃蔵の瞳にも浮かんできた。茜柝は晃蔵よりずっと早く、涙を心の奥に仕舞い込んだ。

「うっん……泣いてばかりじゃ……刹那ちゃんに笑われちゃうよ……」

茜柝の覚悟に晃蔵は涙を拭って頷く。

「……茜柝。ひとつ確かめたい事があるんだ。……だから正直に答えて欲しい」

「……うん！ 茜柝に分かる事なら何でも聞いて」

晃蔵は呼吸を整え、真剣な面持ちで告げる。

「茜柝のおばあちゃんの名前は……？ ネム？ っていうんじゃないのか？」

「……。そっだよ」

茜祢の返事に晃蔵は確信した。

学校で初めて戦った 鬼憑き が零した？ネム？という言葉。あれこそが黒幕へと繋がる糸口だったのだ。そして晃蔵は茜祢にとって悲しい事実を口にする。

「茜祢。ゲン爺や刹那を殺したのはほぼ間違いなく？ネム？なんだ。だから俺は？ネム？を倒さなければならぬ……。ゲン爺や刹那のためにも！……悪いがわかってくれ」

恐らく晃蔵の言葉は予想していたのだろう。微塵の動揺もなく、ただ晃蔵を見詰めている。

「やっぱりおばあちゃんが関係していたんだね。いいよ。茜祢の家に案内するね。そこでなにがあっても、茜祢は晃蔵さまを信じてるから！ だから晃蔵さまも自分を信じて！」

「ああ。なにがあっても俺は自分と なによりも茜祢を信じる！ 刹那に……そう約束した」

「茜祢とも……約束！」

「ああ……約束だ！」

そう囁き、二人は互いの小指を絡め合わせた。それはささやかだが確かな想いの形。すべてを受け止める覚悟は決まった。

晃蔵は茜祢と共に決戦の地へと向かった。

そして遂に、二人は茜祢の家に辿り着いた。

「ここだよ。ここにおばあちゃん 『鬼護り』の頭首、聖森祢夢がいると思う……」

「『鬼護り』……。じゃあ茜祢も」

「……うん。一応『鬼護り』だと思う」

不意に晃蔵の脳裏に先刻生じた可能性が過ぎりかけたが、掴む前に消えてしまった。まるで自身がその可能性に抗っているかのような、そんな感覚……。

「……晃蔵さま……気をつけてね……！」

懸命に明るく振舞おうとする茜祢の健気さに、晃蔵は温かな想いを感じ取った。

「ああ……。大丈夫だ。刹那の仇は……。必ず討つ……。！」

「……。あ……。！」

茜祢は悲しげな面持ちで晃蔵を見つめていた。晃蔵はその時、自身が告げた言葉が茜祢の心を締め付けているとは知らず、刹那の仇を討つことに、気持ち先走ってしまった……。

それでも茜祢は晃蔵を信じて微笑む。なにがあっても晃蔵を信じると約束したから……。

様々な想いを胸に晃蔵は木製の門扉を開き、そこから続く石畳の上を歩き出した。

半ばほどまで進んだ頃、しわがれた声が敷地内に響いた。

「ふおつふお。ようやっと現れよったか。その様子じゃ、闇倉の娘に相当苦戦したようじゃのお」

「！ お前が？ネム？か！？」

「いかにも。妾が祢夢じゃての。……。よもや茜祢にかけた精神操作が解かれるとは……。ふおつふお。茜祢や、ご苦労じゃったの。お前のお陰で順調に事が運んだわい」

祢夢の不敵にゆがんだ双眸が、茜祢に向けられる。

「……。い……。や……。いや……。いやッ……。！」

茜祢の様子がおかしい。目の前の存在が茜祢の知る祢夢とはかけ離れている所為だろうか。茜祢は恐怖に慄いた表情を貼りつかせて、すっかり怯えきっている。

「……。お前の相手は俺だ！ 茜祢に薄汚い目を向けるなッ！」

晃蔵は戦慄を押し殺し、吐き捨てるように言い放つ。二人の様子を愉悦の眼差しで眺めていた祢夢がゆっくりと返す。

「ふおつふお。人間に感化された 異なる鬼 の分際で、よく吠えよるのお」

「 異なる鬼 ……だと ……!? 」

今まで必死に抗ってきた？可能性？をまざまざと宣告され、晃蔵

の理性が揺らぐ。一方で確かに、その？可能性？に至るピースは最初から示されてはいたのだ。

過去二年までしかない記憶　儀式を受けずとも視認できた　闇茜祢が自分を？護り？に来た理由　蔵清より授かった　鬼被刀　の柄に巻かれた布の意味……。

そしてなにより　鬼　を識別できないワケはすべて、祢夢の言葉に集約される。

そのすべてから晃蔵は今まで目を背け、気付くまいとしていた。ずっと自身を？人間？だと思ひ込み、人の　闇　を糧にして此の世に現れる　鬼　に少なからずの嫌悪を感じていたから。

だというのに、その自分自身が　鬼　だなんてことは、晃蔵の心には到底受容できない事柄　排すべき最大の真実となり得る。

祢夢に告げられた今なお、晃蔵は自我を保つべく異物を振り払おうと足掻いている。

「なんじゃ？　蔵清から聞いておらんのか。　異なる鬼　それは本来ならば始末されるはずであった　鬼　じゃ。　鬼　ならざる心を持ったモノよ」

「言いたいことは……それだけか　ッ！」
「ふお？」

晃蔵は自身に突きつけられた真実を受け止めた。それは茜祢との約束。なにがあっても自分を信じ、すべてを受け止めるという約束だから晃蔵は受容し乗り越えることが出来たのだ……己が宿命を！

湧き起こるのは祢夢に対する怒りの感情……刹那や茜祢、那斬や蔵清の想いを遂げようとする確固たる信念だった。

「茜祢を利用し……刹那の父親を殺し……ゲン爺までもッ！　刹那の矛先が俺に向くように仕向けたのも貴様だな！？　こんなことをして、一体なにをしようとしてるんだ　ッ！」

抑えきれなくなった感情が爆発し、胸の中に渦巻く思いを叩き付ける。すると祢夢は涼しそうな表情でこともなげに答えた。

「ふおっふお。知れたことよ。お前たち　異なる鬼　を互いに干渉

させ、我等 鬼 の新たな道標となる 真なる鬼 を創り出すこと
じやてのお。あとひとつ 我等『鬼護り』の力を注ぎ込めば」

「 真なる鬼 だと？ ふざけるなッ！ 俺はそんなモノにな
ったりはしないッ！ そんなもののために貴様はみんなを殺したの
かッ！？ 答えろッ！」

鬼気迫る晃蔵の追及に、祢夢は臆面もなく返す。

「お前が望まずとも、妾の力を以ってすればどうともなるうて。

それに、お前は誤解しておるでの。那斬と蔵清を殺したのは そ
こにいる茜祢じやてのお」

「嘘をつくなああ ツ！」

裂帛の気合いと共に 鬼被刀 を抜き放ち、晃蔵は石畳を疾走し
た。過ぎゆく視界に入った茜祢の表情は、祢夢の言葉に混乱をきた
しているように思えた。だが今は目の前の敵を倒すことだけに晃蔵
は意識を集中させる。

(茜祢……待ってるよ……！ もうすぐ？ 答え？ が出るからな……
ッ)

確かな想いを胸に、晃蔵は祢夢へと迫った。

「ふおっふお。弱い鬼ほど良く吠えるとは言いで得て妙じゃの……は
て、犬じゃったかの？」

冗談を口にしながら、祢夢は白拵えの鞘に収められた刀をぬるり
と抜き放つ。

切っ先から柄頭まで、全身が純白に染め上げられた……？ 力？
の現れ。刹那の 鬼殺刀 とは対極に位置しているような ……？ 力
？。

晃蔵がそう感じるのも無理からぬ事。刹那の一族が『鬼殺し』
なれば祢夢は『鬼護り』 相反は至極必然。

「ふお？ そうじゃ……もうこんなモノは必要ないのお」

そう呟いて柄から解けるように垂れた？ 白い布？ を取り払った。

その表面には奇妙な文字が記されている。？ 白い布？ は刹那の疑心
を晃蔵へ向けるために仕込んだ細工。

しかし頭に血が上っている今の晃蔵に、そこまで考える余裕はあるわけもなく、右手に？力？を集中させ、鬼抜刀に注ぎ込んだ。

刹那とのわだかまりが解けたとはいえ、晃蔵の中から憎悪の念が消え去ることはなく、またしても昏い感情に支配されたまま刃を振るおうとしている。

だからこそ、？力？を注ぎ込んだ刀身が 漆黒に染め上げられた……！

まるで刹那の思いまでもが籠められているかのよう。二つの？力？が内包した刀は強かに脈動し、晃蔵を戦いへと駆り立てた。

「闇倉の力……。愉快よのお。ますますお前の可能性をこの眼で見 てみたくなつたわい」

「アああああアアツツ！」

晃蔵は 鬼抜刀 を構えたまま祢夢へと肉薄し、直前で石畳を蹴り上げ身を翻し背後に躍り出た。着地と同時に黒刃が煌めく。

「なるほどの。……確かに闇倉の遺志を感じるわい……！」

祢夢は前を向いたまま、白刃を背後にかざして晃蔵の一閃を受け止めた。

「なっ……！？」

あまりにも平然と止められ、晃蔵は息を呑んだ。

「されどまだ妾には敵うまいて。 出よ、同胞……我等の標を屈させるのじゃ」

おもむろに祢夢はしわがれた声を零した。直後、背後に二つの気配を感じ、反射的に跳躍して躲わした。間合いを確保するように石畳の上を転がり、祢夢を鋭く見据える。

「まさか……！？」

祢夢の傍に畏まるように佇む者の顔に……晃蔵は見覚えがあった。

「……………戸梨……………それに 鏡ッ！」

眼前に佇むのは間違いない、担任の戸梨と、また一緒に遊ぼうと言ってくれた鏡の二人であった。晃蔵の心が大きく揺らぐ。

二人の瞳は虚ろで、正気を保っているとは到底思えない。

「……………鬼 なのか……………？」

脳裏によぎった言葉を零す。嗜虐的な冷笑を浮かべ、祢夢は口を開いた。

「左様。茜祢によつて 鬼 に成り代わつた者じゃて……………お前にとつて良い相手じゃろ？」

「ふざ……………けるな……………ッ！」

晃蔵は怒りに歯を軋ませて毒づく。

鏡とはまだ一度も遊んでいないというのに……………。どうして鏡が鬼 にされなくちゃいけないというのか……………。戸梨には少なからずの嫌悪を覚えてはいたが決して憎んではいなかった。その感情はひとえに、晃蔵の本当の意志 ？人？を 鬼 から救いたい？という思いに根ざしているから。

晃蔵は信じたかつたのだ。……………人の心を。ならばこそ、晃蔵が二人と戦うことなんて出来ようもない。けれど茜祢との約束や己の思いとが……………自身の中でごちゃ混ぜになってゆく感覚に歯噛みする。

「脆いのお。人間に近し心を持ったが故に、なんたる脆さよ。我等の？力？を宿しさえすれば、その苦しみからも解放されるやも知れぬ……………。往け！」

激しい葛藤に苦しむ晃蔵に対し、祢夢は無慈悲にも二人をけしかけた。戸梨と鏡は虚ろな瞳のまま晃蔵へと迫る。視界にその光景を捉えながらも、晃蔵は動けない。どうしていいのか判らず、焦点の合わない視線を前方に向けている。

風が通り過ぎる音がしたと思つた直後、戸梨の硬質化した爪が雑ぎ払われ、晃蔵の皮膚を深々と切り裂いた。混乱を極める意識の中に激痛が駆け巡る。間を置かず背後に鏡の気配。同じく硬質化した爪が突き出され、胸を抉つた。鮮血が溢れ、視界が霞む。

「……………ぐっ……………」

間一髪身をよじり、心臓への直撃を回避したと思つたのも束の間、左方から戸梨の容赦ない蹴りが炸裂した。為す術もなく宙を舞い受

身すら取れず、何度も石畳の上を弾むように転がった。

「もう終わりかのお。闇倉の娘を倒したとなれば僅かながらも期待していたのじゃがのお」

激しく蹴り飛ばされた晃蔵は、転がりに転がって物置のような小屋に衝突してようやく止まった。晃蔵は瓦礫の下敷きとなり視界が暗闇に閉ざされる。

「くそ………つたれ。………このまま死ぬのか………？ 茜祢………俺は………もっ………」

不意に晃蔵の脳裏に茜祢の笑顔が浮かんだ。写真のフィルムを引っ張りだすように記憶を辿ってゆく。

「………！」

やがて目蓋の裏に、自分の部屋で茜祢と約束した時の光景が映り、声が反響する。

「茜祢は晃蔵さまを信じてるから だから晃蔵さまも自分を信じて！」

続いて先刻、最後に見た茜祢の錯乱に歪んだ顔が浮かび、胸が締め付けられる思いを覚えた。

「そうだ………俺は約束したんだ。なにが起こっても………自分を茜祢を信じると………！」

その時 鬼抜刀 を握った手に熱い力が集まってきた。

（俺はまだ戦える………！ 刹那………茜祢 力を貸してくれ………！）

戦う意志を取り戻した晃蔵は瓦礫の下から抜け出し、眼前に戸梨と鏡を見据える。

さらにその左方 入口の門扉前に茜祢の姿を視界に捉えた。未だに正気を失っているといった様子に不安を滲ませる。必ず勝つ事を心の中で茜祢に誓い、黒刃の脈動を全身に受けて軽やかに着地した。

直後の一閃。戸梨の延髄へ峰打ちを叩き込み昏倒させるに留めた。昏い感情に支配されながらも、晃蔵は衝動を抑え込んだ。それ

は晃敵の中にある？二人は悪くない？という思いが彼を踏み止まらせた。流れる動作で素早く標的を鏡に定める。

「鏡……。絶対俺が助け出してやる……。だから今は　眠っていてくれ……。！」

謝罪の言葉を囁くと同時に鏡の首筋に一撃を打ち込んで倒した。

「……鏡……。戸梨……。！」

憐れにも　鬼　にされた二人を見つめ、祢夢に対する怒りを募らせてゆく。

「……ネムツ……。貴様だけは赦さねえ！　絶対に赦さねえ

ッ！」

「ふおつふお。足掻きよるわい。小童が……。身の程をわきまえよ」

「　黙れッ！」

深い憎しみを籠めて言い放つと同時に晃敵は疾走した。右手に握り締めた　鬼抜刀　がその昏さを増してゆく。やはり心に巢食う憎しみは……。所詮憎しみでしか晴らせないのか。

「おおおおおおー！ーッ！」

なおも強まる昏き力をその手に宿し……。晃敵は黒刃を振るい続ける。祢夢の白刃と激しい剣戟が繰り広げられている。

「ぐぬっ……。！？　此奴……。急に力が……。ッ！？」

それまで晃敵を侮っていた祢夢が初めて表情を曇らせた。

他の感情を一切排し……。祢夢を攻め立ててゆく。夕闇が近付き始めた空の下で、黒刃と白刃がぶつかり合い、幾度となく甲高い金属音を響かせる。幾度も……。幾度も。

徐々に晃敵は徐々に祢夢を押し始めている。

「ネム！　人は誰でも一度はあやまちを犯す！　けどどなア……。罪を償うことで未来に希望を繋げる存在でもあるんだっ！」

晃敵はありのままの想いを祢夢にぶつけてゆく。

「それをテメエ等　鬼　が引つ掻き回すから……。あやまちは繰り返される……。負の連鎖は途切れないんだッ！」

「ぬかせ小童！　その様な脆弱な心だからこそ……。あやまちを繰り返

返すのじゃろうが！ 弱き心の責任を我等に転嫁するとは……なんと浅はかな事よ……」

晃敵の言い分に祢夢も負けじと反撃する。しかし、その程度で晃敵は揺らがない。一閃毎に己が魂を籠め、祢夢を追い詰めてゆく。

「違うツ！ 人はそんなに弱くなんかない！ 自分の罪と向き合い、二度とあやまちを犯す事なく真つ当に生きようと、心から思っているんだ！ 誰もがそれを願っているツ！」

「願うだけじゃ何も変わらんぞ……！ たとえ我等が現れなくとも、此の世は罪に満ちた世じゃろうて！」

「だったら今すぐ消えてくれ！ そしたら証明してやるよ……！ この世界の人々が……どれだけ強い心を持って生きているかをなアツツツ！」

裂帛の気合いを籠めて放った一閃は、祢夢の身体を袈裟懸けに斬り裂いた。鮮血が飛沫き、祢夢の体が揺らぐ。

「……ぬう……闇倉の力が……これ程とはの……っ！」
祢夢は傷口に手を当て、『鬼護り』の力で治癒を施した。瞬く間に傷口が塞がる。

「へっ。てめえだけズルいんだよ。だったら次は……回復する力も出なくしてやるぜツ！」

己が駆ける道の果てに、必ずや人の温もりを取り戻せる未来があると信じて……晃敵は黒刃を振るう。

「お前言ったよな？ 俺たちが 異なる鬼 だと。 鬼 ならざる心を持ったモノだと！」

「……。それがどうしたというのじゃ……紛れもない真実じゃて……」

晃敵の攻撃を険しい表情で捌きながら、祢夢は言い放つ。

「負の連鎖をもたらす 鬼 の中に……俺たちのような存在が生まれた事こそが……テメエ等 鬼 に対する抵抗の 強い心の表れじゃねえーのかよツ！？ 長い歴史の中で……人の心が 鬼 の心を変えたんだ！」

自分が 鬼 だという驚愕の事実を拒む事無く受け容れて、それでも己の内に宿る信念は揺らがない。『鬼袂い』の道を歩むと決めたあの日に抱いた……？人を救いたい？という変わらぬ思いが……満身創痍の晃蔵を突き動かす！

「……詭弁を……弄するでないぞ……小童……っ！」

晃蔵は祢夢の反撃を許さない猛攻を繰り返している。一閃するたびに祢夢の身体が朱に染まってゆく。

「……ぬう……莫迦な……」

瞬間、晃蔵の眼差しが鋭い輝きを放つ。

「死ねエエ……！」

感情を絞り出したような声が零れた。際限なく膨れ上がる晃蔵の力を前に、祢夢の顔に動揺の色が表れ始めた。

晃蔵の攻撃は止むことはない。とめどなく流れ出し、失った血液ですら、憎しみの念で補っているかのように……晃蔵は祢夢を追い詰めてゆく……！

そして………！！

「……終わりだ……ネム！」

「な……ならぬ……妾はまだ終わるわけにはいかぬのじゃ……真なる鬼 を……我等の道標を……」

己の願望を呟く祢夢を睥睨しながら晃蔵は天高く 鬼袂刀 を掲げた。

那斬、蔵清と 刹那の無念を晴らすべく………なにより、茜祢を守るために。様々な想いを一身に受けて、晃蔵は黒刃を振り下ろした！

ゾンツ。

祢夢の手から純白の刀が離れ、石畳に当たって哀しい音を響かせた。晃蔵が刀を引き抜くと、祢夢の体は力なく崩れ落ちた。晃蔵を苦しめ続けた憎悪の霧が晴れた瞬間であった。

「か はッ………ぐっ………」

直後に激しい痛みが全身に走り、晃蔵は堪らずその場に片膝をつ

く。

「……茜祢……」

それでも晃蔵は、一刻も早く茜祢を安心させてやろうと、おぼつかない足取りで歩を進めた。半ば引き摺るように……それでも確実に茜祢のもとへと急ぐ。刹那を失った悲しみが残るものの、これでまた日常が戻ってくる。そんな思いが心に湧き起こった。

しかし次の瞬間。

「おばあちゃん……！」

それまで正気を失っていたはずの茜祢が突然、悲痛な声を上げて祢夢へと駆け寄った。

「……おばあちゃん……しっかりして……おばあちゃん……！」

茜祢はしきりに祢夢の体を揺さぶり、声を掛け続けている。晃蔵の目には、心なしか祢夢の体が淡い光に包まれているようにも思えた。晃蔵はその光景を、体が痛むことも忘れ呆然と見つめ続ける。

「……おばあちゃん！ 死んじゃやだよ。おばあちゃん！」

「ッ！？」

茜祢の眼差しを目にした瞬間、名状し難い衝撃が晃蔵の心を打った。晃蔵は見落としていたのだ……茜祢の祢夢に対する本当の気持ち。

何度も声をかける茜祢の瞳には憎しみや怒りではない、純粹に家族を思い遣る情愛が湛えられている事を……。

その大切な家族に刃を向けたのは他ならぬ自分自身だということに、晃蔵は言い知れぬ歯痒さを覚えた。

仕方ないと己に言い聞かせれば、本当に仕方なかったのかという問いが返って来る。晃蔵は茜祢との約束を胸に 鬼抜刀 を振るった。

自分は一体、どこで誤ったというのか……。答えの出ない疑問に、晃蔵の心は深い暗闇へと沈んでゆく……。

そんな晃蔵の心を、さらに深い深淵へと突き落とす如き言葉が茜祢の口から放たれた。

「よくもおおばあちゃんを……！ 我はお前を……赦さない！」

「……ッ！ 茜祢……ッ!?」

「我等はただ、此の世で生き続けたいだけなのに……どうして邪魔をするの？ 我等がなにをしたっていうの!? 人なんて我等が此の世に現れるためだけの存在なのにッ！ 違う！ 茜祢は人が好きなのっ……！ 茜祢は人として普通に生きていたかったっ！

自分の正体なんて知りたくなかった！ 人が好き。もっとたくさん友達を作って……一緒に弁当を食べたかった！ 戯ケタ事ヲ

ッ！ 我等ガ此ノ世デ繁栄スル事コソ、正シキ在リ方ダツイウ事ヲ何故判ラヌッ！ 我等ハ、生キ続ケル、生キ続ケル……！」

晃蔵は茜祢の中に相反する意思が混在していることを目の当たりにした。本来の 鬼 としての本能……此の世に生き続けるという願望と、人と共存したいという茜祢の想いが激しくせめぎ合う。

恐らく茜祢の心を飲み込もうしている 鬼 の思念は、此の世に存在する全ての 鬼 から注がれているだろうと晃蔵は考えた。

たったひとつしかない茜祢の意思など無力に等しい……意思が喰われるのも時間の問題。そう思った瞬間、晃蔵の脳裏に茜祢の言葉が反響した。

『茜祢は晃蔵さまを信じてるからっ』

たとえ何があるうとも、茜祢は晃蔵を信じると言った。何度も確かめたはずなのに……結局自分自身が、本当の意味で茜祢を信じきれていなかった事実には晃蔵は己を呪った。

ただ憎悪に身を委ね、祢夢を倒しただけ。天高く掲げた 鬼抜刀を振り下ろしたあの瞬間……本来持っていた筈の意志は存在していなかった……。

不意に蔵清の言葉が蘇える。

『何かを遂げようとする意志が強ければ ?力?は自ず

とそれに応えてくれる』

そこで晃蔵は、いつの日か蔵清が言った言葉の真の意味を理解した。

「意志の強さ……。俺が……。為したいこと……。それは」
己が想いを脳裏に描き、呼吸を整える。すると漆黑に染め上げられた刀身が徐々に紅く変わってゆき、晃蔵本来の？力？が戻ってくる。

「俺はみんなを 鬼 から救いたい……！」

一体どれほど遠回りをしたのだろうか……。元々、自身の中に存在していたありのままの気持ちに……。晃蔵はようやく気付くことができた。だが晃蔵は 鬼 抜刀 を振るうことはせず……。数多なる 鬼 の思念に震える茜祢の小さな体を優しく抱き締めた！

「茜祢……。戻ってきてくれ。今の俺にはこうすることでしか茜祢を守れない……ッ！」

「異ナル鬼 メ！ 殺ス……殺ス……！」

「茜祢……ッ！ 茜祢……ッ！」

晃蔵は何度も呼びかけた。茜祢が 鬼 の思念に打ち克ち……。戻ってくることを信じて。

何度も……。何度も……。だが。

ゾンッ。

「……ぐは……っ……！」

非情にも 鬼 の思念に操られた茜祢の右手は、鏡たちによってつけられた傷口を深々と抉りあげた。苦悶の声を漏らす晃蔵の顔を見つめ、茜祢の表情が嗜虐に歪む。

「茜祢……。俺が……。判らないのか……？」

掠れた声で囁くも、茜祢は眉一つ動かさない。あれほど自分に懐いてくれていた茜祢の攻撃は、肉体以上に晃蔵の精神に深いダメージを与えた。たとえそれが茜祢の意思でないと頭では判っていてもどうしようもなく……。それでも晃蔵は茜祢の名を呼び続ける。

だが、思いのほか出血が酷く、意識が朦朧とし始めた。このままで茜祢を救えない……。そう思ったとき、傍に横たわる祢夢の姿が視界に映った。そして思い出す。

「…… 鬼 の新たな道標となる 真なる鬼 を創り出す

ことじゃ』

「……………真なる鬼……………！」

晃蔵は祢夢の戯言など露ほども信じてはいなかった。むしろ逆……。ワケの判らぬ思想に拒絶すら覚えていた。だが、今は……。そんな一縷の望みにも縋らなければならぬ状況。

すべてを受け容れる覚悟は決まっただと、自身に言い聞かせる。

「……………が……………はッ……………！」

注意が逸れた隙を衝いて、再度、茜祢の右手が傷口を抉る。躊躇っている猶予など、もはや一刻もない！

「確か……………茜祢たちの……………？力？……………を……………注ぐと……………」

記憶を手繰り寄せ、真なる鬼を創り出す方法を思い出す。

「……………？力？？？力？つて……………なんだ……………？どうすれば……………いいんだ……………？」

肝心のピースが判らず、思考が迷走する。

「……………熱ッ！」

不意に鬼祢刀が熱を帯び、意識が引き戻される。右手に握られた鬼祢刀に視線を向けると漆黒と真紅が交互に刀身を染め上げていた。

「……………これは……………」

黒刃は那斬と刹那の意思が、紅刃は蔵清の意思が宿り、何かを訴えているかのように思えた。

「……………そうか……………っ！」

直後、晃蔵は閃いた。すかさず視線を走らせ、祢夢が使っていた純白の刀へと移す。

焦る気持ちを抑え、手を伸ばす。

「……………ぐああああ……………っ！」

身を伸ばしたことによる痛みと、三度、茜祢の右手が晃蔵の傷口を抉った痛みが合わさった。茜祢の意思が鬼の思念を抑えているのか、それとも鬼が晃蔵を弄んでいるのか……………執拗な攻撃が

続く。痛みを堪え目一杯伸ばした手に、純白の刀は握られた。鬼殺刀の時みたく、耐え難い激痛を覚悟した晃蔵だったが……！

「……あ……温かい……」

手にした刀はまるで雪を溶かす陽射しのような温かさで晃蔵の心を優しく包み込んだ。

温もりに心を委ねていると、鬼殺刀と同じように純白の刀は消失した。そして晃蔵は柄に巻かれた？お守り？を取り払った！

次の瞬間、鬼袂刀に異変が起こった。それまでの輝きに加え、茜祢たち『鬼護り』の？力が、純白の輝きが刀身に宿ったのである。

それぞれの？力が共鳴し合うようにめまぐるしく刀身の輝きを変えてゆく。

晃蔵と蔵清の？力？……『鬼袂い』の紅刃と。

刹那と那斬の？力？……『鬼殺し』の黒刃と。

茜祢と祢夢の？力？……『鬼護り』の白刃が。

渾然一体となり、そして。

「これが……真なる鬼の……？力？………！ 陽光色の刃……！」

晃蔵の手に握られた鬼袂刀はその姿を大きく変え、太陽の如く刀身が染まり上がったのだった。祢夢が求めてやまなかった道標たる？力の発現。

右手を介して穏やかな温もりが伝わってくる。確かな力をその手に感じ、晃蔵は柄をしっかりと握り締めた。

「茜祢……俺を信じて受け容れてくれるか？たとえどんな結末が訪れようとも……！」

依然として虚ろを貼りつかせた瞳のままの茜祢……。

「うん……！ 茜祢は信じてるよ。……晃蔵と一緒に 明日を迎えられることを……！」

「……茜祢」

意思が喰われゆく時の中で茜祢は初めて？ 晃敵？と呼んだ。それは祢夢に操られることがなくなつた茜祢の……ありのままの気持ち……。生と死の狭間で二人は……初めて心から繋がり合うことができたのであつた……。

「……俺、やっと判つたよ。信じるという想いが……。一緒に迎えよう 明日を！」

晃敵の言葉を受け、茜祢は最後に笑顔を浮かべる。

高らかと刃を掲げ、晃敵は考えた。

茜祢の笑顔は別れを悟つたがためのモノだったのか……それとも共に歩む未来に思いを馳せたがためのモノだったのか……。

まばゆくも温かな輝きに視界が染まってゆく。

そうして、晃敵は手にした刃を一気に振り下ろし……茜祢の胸を

貫いた。

「茜祢ッ！ 茜祢ッ！ 目を開けてくれッ！」
晃敵は懸命に茜祢の名前を呼び続ける。不安を湛えた表情で何度も、何度も。

「……うん……あれ……晃敵……さま……？」
意識がハッキリしていないのか、呼び方が元に戻っている。

「茜祢ッ！ 大丈夫かッ!？」
目を開いた途端に顔を覗き込むように近づける。息すらかかる距離だ。だが茜祢の安否しか頭のない晃敵に、そんな事を気にする余裕があるワケがない。

「……うん……茜祢は大丈夫だよ。……！」
視線を振った瞬間、隣で仰向けに倒れている祢夢を見て茜祢は悟る。すべてが終わったのだと。

「……そっか……終わったんだね……」
どこか悲しげな表情を浮かべ俯く。

「……茜祢。……最期くらい、笑顔で見送ってやれ」
「え？」
不可解な言葉に茜祢は視線を上げて晃敵を見詰めた。

「……ほら」
そう言っつて祢夢の方を示す。

「……？ おばあちゃん……？」
晃敵の意図するところを量りかねて、訝りながらも祢夢へと這い寄る。

「おお……茜祢かい……。お前には辛い思いをさせちゃったねえ……許しておくれ」

「……おばあ……ちゃん……!？」
晃敵の黒刃に倒れたはずの祢夢が生きているという事実、茜祢は思わずその大きな双眸から涙を溢れさせた。

「……おばあちゃん……どうして……？」

「茜祢や……お前の……『鬼護り』の力が……妾の命を少しばかり繋ぎとめたのじゃ」

「……茜祢の……『鬼護り』の力……？」

晃敵の一撃が祢夢を打ち倒した後、駆け寄った茜祢が『鬼護り』の力を使っていたのだが、無意識だったため茜祢は覚えていない。祢夢の言葉に晃敵はあの時、淡い光を見たことを思い出していた。

「やはり 真なる鬼 は……存在しておったのじゃな。それこそが我等の道標とならん」

「…… 真なる鬼 ？」

茜祢の問いに、祢夢が息苦しそうに答えた。もう自身の命が長くないことを悟っているような瞳を浮かべて……。

「鬼 に対する……もうひとつの 鬼 扱い ……それが…… 真なる鬼 ……の力であったのじゃ……『殺す』でも『被う』でも……

……ましてや『護る』ですらない……謂わば三つなる信念の融合形。

……さしずめそれは 鬼おにがえおにがえ還鬼還し ……かの」

「…… 鬼還し ……？」

二人のやりとりを晃敵は哀しげな表情で見詰めている。

「…… 鬼還し とは言葉通りじゃ……。我等 鬼 を元の場所

彼の世へと？還す??力?……。人には人の…… 鬼 には 鬼

の棲むべき場所が……在るといふことなのじゃ……」

晃敵が示した道標たる?答え?。

『殲滅』でも『排除』でも『保護』でもない手段 すなわち

『棲み分け』である。

人は此の世で 鬼 は彼の世で……それぞれ暮らしてゆくという道標。

「もつとも……妾に宿っておった 鬼 の望みとは……正反対の結果が……出たようじゃがの……」

祢夢はどこか皮肉を籠めて呟く。視線を移し、茜祢の体を腕の中へと引き寄せる。

「すまぬのお茜祢。辛かったろう……不安じゃったろう。妾を許しておくれ」

「おばあちゃん……。ううん……。茜祢は幸せだったよ」
涙を堪え、茜祢は嗚咽混じりに言葉を紡ぐ。

「だって……。こんなにもおばあちゃんに想ってもらえてるんだから！ 茜祢は幸せだよ」

「おお……。茜祢。妾を許してくれるのかい？ おお……。茜祢」

数刻前の祢夢からは想像すら出来ない、情愛に満ちた表情がありありと表れていた。今や祢夢の中に 鬼 は存在しない。晃蔵が茜祢を救った時と同じように……。祢夢に宿っていた 鬼 も還したのだ。

すべては 鬼 の意思による悲劇だったということを、晃蔵はその身で痛感していた。

「じゃあ茜祢たち……。人になれたの……！？ これからは人として暮らせるの!？」

茜祢の表情がみるみる喜悦に溢れてゆく。

「ああ……。そうじゃ……。人として……。生きるんじゃ……。茜祢。妾の分までのお……」

「……。え？ おばあちゃんも一緒だよ!？」

「妾は……。ちと長く生き過ぎたのじゃ。妾は茜祢が生まれる……。遙か昔から生きておるのじゃからの。鬼 はなくなれど、肉体がもたぬのじゃ。茜祢や……。わかっておくれ……」

死を悟った祢夢の言葉に茜祢はたちまち瞳に涙を湛え、込み上げる感情に身を委ねた。悲しい時や嬉しい時には泣いていいんだという晃蔵の言葉を胸に、茜祢は涙を流して泣き続ける。大好きな者の胸の中で……。いつまでも……。いつまでも。

晃蔵にとってその光景は羨ましかった。蔵清の今際の際に居て上げられなかった自責の念が、深く心の中で渦を巻く。

「茜祢や……。良い友を……。持ったの。決して裏切るでないぞよ。己を信じ……。相手を信じる心を……。互いを思い遣る事の出来る強き想

いを……忘れるでないぞ」

「うん！ 絶対に裏切らないよ。茜祢は晃敵さまを 晃敵を信じ
てるから……っ！」

「……茜祢」

茜祢のまつすぐな想いを胸に受け、晃敵は心に誓う。この先、たとえどんな困難や苦難が待ち受けていようと、茜祢だけは守り抜くことを。祢夢の言葉通り決して裏切らず、互いを思い遣り、信じ合える関係を築こうと……。深く、深く……。その心に刻んだ。

「梅原の……茜祢の良き友よ……。妾の傍に……。来てくれぬかの……」

意外な祢夢の申し出に、晃敵は躊躇いなく歩み寄った。

「……はい……お傍に」

晃敵の気配を感じ、祢夢は言葉を継いだ。

「まだ此の世には……大勢の 鬼 たちが……棲んでおる。 鬼 の導たる妾が消えることによつて……恐らく今まで以上の混乱が生まれることじやろう……。こんなことは言えた義理ではないのじやが……すまぬが彼等も彼の世へ還してやつては……くれぬじやろうか？ ……それが妾の……最期の願いじや……」

晃敵は 鬼還し の力を手にした瞬間から、此の世のすべての 鬼 を彼の世へ還すことを決意していた。それが、今の祢夢の言葉でより確固たるものとなった。一度己の中で確かめるように呼吸を整え、決意に満ち満ちた明瞭な声で返した。

「 はい。わかりました」

晃敵の返答に祢夢は心残りが晴れたような穏やかな微笑みを浮かべた。

「すまぬの。最期に人として……死ぬ事が出来て……妾は幸せじやの。……さらばじや」

「ッ！」

「おばあちゃん……ッ！」

茜祢が祢夢の手を取った瞬間……祢夢の身体は泡沫のような光

となつて……夜の空へと昇つてゆく。古から続いた呪縛から解放された魂は……夜空の瞬きにも劣らぬ輝きを放つていた。

辺り一帯が暗がりにも包まれた中で……晃蔵と茜祢はそつと互いの手を取り……夜空を仰ぎ続けた。

その後、鏡と戸梨を病院に送り届けた晃蔵と茜祢は、二人が初めて出会つた歩道橋へと足を運んだ。

「……なあ茜祢」

おもむろに晃蔵が口を開く。

「うん？」

「俺と初めてここで出会つた時『久しぶりだね』つて言った意味がやつと判つたよ」

「えへへー。間違いじゃなかつたでしょ？」

茜祢はすつかりいつも通りの笑顔を取り戻していた。その気持ちの強さは是非とも見習いたいなと思いつつも、晃蔵は言葉を継いだ。
「ああ。会つてたんだな……俺たち。彼の世で 実体のない 鬼の時に」

「そうだよー。晃蔵さまつて意外とにぶいんだね」

「ほつとけ。……ん？ なんだよ、結局『さま』付けで呼ぶつもりか？」

「えへへー だつてこつちの方が思い入れあるだもん！」

一瞬、言い返してやろうと思つた晃蔵だが、思い入れがあることは否定できないので、仕方なく甘んじておくことにしたのだった。

「あ~~~~っ！」

不意に茜祢が素つ頓狂な声を上げ、歩道橋の端っこへ駆け寄つた、
「……どうした？」

後に続き歩道橋の端っこまで歩き、茜祢の手元を覗き込んだ。

茜祢が見つけたモノ……それは刹那との思い出が詰まつた弁当箱だつた。

「良かったな。回収されていなくて」

数時間前、刹那に差し出した時に払い飛ばされ、半壊してしまつた弁当箱。まるで茜祢たちの帰りを待つていたみたいひっそりと……歩道橋の隅っこに転がっていたのだ。茜祢は大事そうに弁当箱を胸に抱き、目を瞑った。

弁当箱に籠められた刹那との日々を思い出すかのように……。

「うん！ ……これはずっととっておく。刹那ちゃんとはずっと一緒……」

「ああ……そうだな。ずっと一緒だ。ずっとな」

振り向き微笑みを浮かべていた茜祢は、ふと何かを思い出したように首を傾げた。

「……そういえば晃蔵さまは人に戻ってないんだよね？ どうして？」

「ん？ ああ……どうやらこの力は自分には使えないみたいなんだ」

晃蔵は祢夢の 鬼 を還した後、自分に対して力を使ってみた。だが晃蔵の内に宿る 鬼 が還る事はなかった。

少しは残念に思った晃蔵だが、逆に割り切ることが出来たと思う事にしたのだった。

自身の事はすべての 鬼 を還したら考えよう……晃蔵はそう決意した。

「たとえば 鬼 でも晃蔵さまは晃蔵さまだよっ！ これからもずっと一緒にいようね、晃蔵さまっ」

「ああ。もちろんだ」

その時 奇しくも 鬼 と 人の心が……真の絆で繋がっていた。

もしかしたらその在り方こそが……

もう一つの？答え？であるのかも知れないと……

二人は心の奥底で思っただろうか……。

あと数時間もすれば、新しい朝が訪れる。

それまで二人は夜空に想いを馳せることにした。

空に瞬く星の輝きを見詰めながら、晃徹は小さく言葉を零した。

「この世に 鬼 は俺だけでいい……………」

了

終章 【 ？ 絆 ？ 】 （後書き）

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

二年前にこの原稿を書いた時は、自分の中で殻をひとつ割ることが出来たような成長の実感を得たことを覚えています。

あれから約二年が経った今、自分はこの原稿を書いていた頃から成長出来ているのかどうかは判りませんが、スタート地点を目指して少しずつでも前に進んでいこうと思います。

私はこれまで十数回小説賞に応募して来ましたが、昨日今日と掲載した二作をもって、ある種の自信を持ってお見せ出来るような原稿は無くなりました（笑）

けど、これも良い機会なので、お目汚し覚悟で掲載するかもしれませんが、悪しからず……m（——）m

2011/04/23 / 樹 文緒

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6865s/>

鬼の宿命

2011年5月24日17時52分発行